

令和5年度 全国高等学校社会科学 ・郷土研究発表大会報告書



大会実行委員会：静岡県高等学校文化連盟郷土研究部編

目 次

	頁
ご挨拶	2
神奈川県立足柄高等学校 歴史研究部	3
静岡県立菰山高等学校 文芸郷土研究部	9
栃木県立石橋高等学校 歴史研究部	1 3
成田高等学校 社会科研究部	1 8
岐阜県立加納高等学校 地域研究部	2 4
石川県立金沢泉丘高等学校 鉄道研究同好会	3 0
栃木県立矢板東高等学校 リベラルアーツ同好会	3 5
静岡県立浜名高等学校 史学部	4 0
岐阜県立関高等学校 地域研究部	4 5
神奈川大学付属高等学校 歴史研究部	5 1
鳥取県立智頭農林高等学校 地域研究部	5 6
愛媛県立今治東中等教育学校 観光おもてなし EAST チャレンジャー	6 5
鳥取敬愛高等学校 社会部	6 9
千葉県立千葉工業高等学校（定時） 郷土研究部	7 3
石川県立七尾高等学校 郷土研究部	7 9
大会要項	8 4
大会概況	8 6
新聞記事	8 8

ご 挨 拶

大会実行委員会委員長 櫻井 祥行
(静岡県高等学校文化連盟郷土研究専門部会長)

令和5年度全国高等学校社会科学・郷土研究発表大会も開催することができ、発表していただいた生徒をはじめ、関係の先生方には感謝申し上げます。そしてここに大会報告書を上梓いたします。

今回の静岡大会においては、高大連携歴史教育研究会と静岡大学のご後援をいただくとともに、公益財団法人高梨学術奨励基金のご支援を受け、大変盛況な発表大会となりました。改めてお礼申し上げます。

高校で郷土研究をはじめとする歴史研究が、昨今の総合的探究の時間に取り組まれていますSDGsの学習に押されつつある中、今回様々な角度で地域を見つめ、その中で新たな課題を発見して、解き明かそうとする真摯な研究は幾つかの発表の中に見出すことができました。

審査員長を務められた静岡大学名誉教授の小和田哲男先生からの講評にもありましたように、地域には様々な史実が埋もれており、それをどのように捉えて他と結びつけて考えていくかが大切です。そういう視点で見ますと、最優秀校に輝いた浜名高等学校と今治東中等教育学校の研究は、研究視点とその展開において優れていたことがわかる大変素晴らしい発表でした。やはり足を運んで取材し、様々な史料に当たるといふ地道な作業の中から史実を見出す喜びは郷土研究の醍醐味であると思います。

ここまで日ごろ指導されている先生方におかれましては、1人の部員とマンツーマンで研究された学校や数十人生徒たちと取り組まれた学校と様々でしたが、時に研究に行き詰まったり、なかなか結論にもっていくのが難しかったり、生徒とともに悩まれた方もおられたと思います。そうした中で生徒が教員以上の発想で取り組まれた研究もあり、改めて高校生の可能性を感じました。

大会プログラムでも申し上げましたが、当発表大会を機会にそれぞれの県におかれまして郷土研究の活性化を望む次第であります。いつかは高文連組織に郷土研究部門を設置する県が増え、全国高文祭大会で発表できるよう努力していきたいと思っております。

結びに全国高等学校文化連盟をはじめ、ご支援ご協力を賜りました関係諸機関に厚くお礼申し上げます。

班目人形芝居から足柄座へ

神奈川県立足柄高等学校
歴史研究部

はじめに

私がこのテーマを研究しようと思ったきっかけは、祖母の家の仏壇から高祖父である石塚花之助に関する新聞が出てきたからだ（図1）。その新聞には、花之助が40年振りに班目（まだらめ）人形芝居を復活させたという記載があった。そして、花之助が復活させた班目人形芝居の歴史や班目人形芝居を受け継ぎ、現在も活動続ける相模人形芝居足柄座について詳しく知りたいと思い、調べることにした。

そこで私は、班目人形芝居について聞き取り調査を実施した。まず神奈川県南足柄市班目地区に行き、人形芝居について、詳しい人がいないか聞き取りを行った。聞き取りの結果、現在班目人形芝居の伝統を受け継ぐ足柄座の座長を務める武藤瑞乃氏にお話を伺うこととなった。武藤氏からは班目人形芝居に関する資料を貸してもらい、南足柄市郷土資料館で実際に足柄座の活動（人形芝居の実演）を見せてもらうこととなった（図2）。さらに、班目人形芝居と関わりがあったとされる神奈川県足柄上郡山北町の岸地区でも調査を行った。そして戦後に班目人形芝居が衰退し、足柄座へと変化した流れを調べ、まとめることにした。

第1章は班目人形芝居の歴史、第2章は岸との繋がりについて、第3章は聞き取り調査の結果や足柄座の現在の活動についてそれぞれまとめた。

1 班目人形芝居の歴史

（1）江戸時代の班目人形芝居

班目人形芝居は、享保19年（1734）に阿波から来た夫婦が班目村に来たことによって広まったと言われている。夫婦は酒匂川の氾濫にあい、村人九左衛門の父に世話になったと伝えられている。その後、夫婦はお礼として人形芝居を班目村の村民に教えた。その際に人形の首（かしら）を15、6個残していった。しかし、現在その首の所在については不明となっている。人形芝居は、酒匂川の氾濫により偶然村に伝わったものであった。

また先行研究によれば、文化8年頃（1811）に班目村の市川万兵衛が人形芝居に熱心に取り組んだそう。班目人形芝居が始まったとされる享保19年（1734）から80年余りの間で、村人がどのような人形芝居を行ったのかは明らかになっていない。万兵衛は三人遣いの存在を知り、是非三人遣いの指導者が欲しいと考えたという。

班目人形芝居の古い衣裳の肩板に天保2年（1831）の銘（資料番号ABC—29）（以下、資料番号は『班目人形芝居調査報告書』の番号に基づいた）が残されている。もしかしたらその時までには三人遣いの指導者が見つかり、その時に班目では三人遣いの人形芝居が行われていたのかもしれない。しかし、証拠となるのは人形の肩板に残された銘だけで確証はない。その後、どのように班目人形芝居が活動を行っていたのかは史料上明

らかにできない。

（２）明治時代の班目人形芝居

班目人形芝居の貢献者として、吉田東九郎という指導者の名前が伝えられている。吉田東九郎とは文楽の出身で、明治時代のはじめに八王子にいた人形遣いである。村民の再三にわたるお願いの結果、ついに明治１１年（１８７８）に東九郎が村に来て人形芝居の指導をしたという。指導は厳しかったものであったと伝えられ、明治３９年（１９０６）に東九郎が村を去るまでの２８年間続けられたということだ。人形芝居の衣裳の調査では、女形の衣裳の肩板に「明治三十五年 東九郎」（資料番号ＡＢＣ―１８）の記載があり、明治３５年（１９０４）頃に東九郎が班目人形芝居に深く関わっていたことが分かる。

（３）大正時代以降の班目人形芝居

大正１２年（１９２３）の関東大震災で、それまで班目人形芝居で活動していた公民館は半壊し、土蔵は全壊した。土蔵の中に納めてあった首や衣裳等は損傷してしまった。そのため、班目人形芝居は活動ができなくなったという。昭和８年（１９３３）に福沢村（班目地区を含む）に発電所ができて補助金が出たおかげで、班目人形芝居が復活した。この復活の背景には、石塚花之助をはじめとした村人たちの努力があった。

先程述べた新聞は、調査の過程で『読売新聞読売神奈川』[「村の更生に捧ぐ石塚翁苦闘の三十年」（昭和１０年７月２日、第２０９７５号Ａ）。なお、新聞の同定にあたっては、相模人形芝居の研究者である三上芳範氏の協力を得た]だということが分かった。新聞には、「同村に長く伝わる文楽操り人形を４０年振りに復活させ都会に憧れる青年女子に農村芸術の尊さを吹き込み」とあり、花之助が実際に人形芝居を復活させたことが記されている。花之助は当時の座長格で、指導の中心であり、班目人形芝居は当時花之助の家で稽古を行っていたようだ。新聞では、花之助のことを「第二の尊徳」と評している。さらに、昭和８年（１９３３）の「東海新報」の記事にも「復活に懸命な修業をつんでいる上郡福澤村班目の中堅三十余名は石塚花之助氏宅に相寄っている」[昭和８年４月２９日「農村更生に操り人形 福澤村班（ママ）目で企図」（『班目人形芝居調査報告書』掲載の新聞記事を翻刻）]と書いてあり、この頃に花之助が復活させたことは大々的に新聞で報じられたようだ。私の祖母（高橋晴世・花之助の孫）の話によると、祖母が高校生の頃に広い土間のある家から現在の家に建て替えたと言っていた。この広い土間で班目人形芝居の活動が行われていた可能性が高い。その後、先程の『読売新聞読売神奈川』はコピーであり、原本が見つかっていなかったため、祖母の家や仏壇の中などを調査した。

調査の結果、仏壇の中から花之助の新聞の原本が見つかった。その他に、私の曾祖父である高橋亀太郎がこの地域の事柄を記事にまとめ発行していた大量の『富士新聞』が見つかった。しかもその中に、花之助に関する記事もあった。記事には、「関東大震災のため大破したものを当時世話人株にあった故石塚花之助氏らが中心になって大修復したものであった」（昭和２８年２月２５日）と記されており、人形芝居の衰退は関東大震災の影響が大きかったこのことがこのから裏付けられた。

（４）戦後の班目人形芝居

昭和８年（１９３３）に復活をした班目人形芝居であったが、第二次世界大戦のために中断を強いられてしまった。

戦後に再興が叫ばれたが、人や物が不足する中では思うように行かなかった。それでも、

昭和30年（1955）の町村合併の頃には一時、文命座と名付けて細々とした活動を続けていたようだ。この年の4月から工事が行われていた南足柄町中央公民館が11月に完成し、昭和31年（1956）の中央公民館落成式が行われた。この時こけら落としとして班目人形芝居が行われ、郷土に誇る文化財として喝采を浴びた。上演した人形の首は痛みも酷く、あやつりの糸は切れ衣装もねずみに食われ傷んでいる状況の中で応急処置をし、やっと間に合わせたものだった。そこで町が首の修理を阿波の人形師である大江巳之助氏にお願いし、力を入れようとしたが、既に時期を逸していたのは残念なことであった。

こうして、班目人形芝居は昭和31年（1956）4月15日に隣町の開成町下島公民館での公演が最後のものになってしまった。演目は「傾城阿波之鳴門」と「壺坂靈驗記」の2つで、古老達が、左遣いが欠けたりしながらも立派に演じた。ここで班目人形芝居は中断することとなった。

2 班目人形芝居と岸の人形芝居

（1）岸とのつながり

ちょうど花之助が人形芝居を復活させた頃、班目と岸は、人形芝居において切っても切り離せない関係にあった。しかし、先行研究では、岸についてはほとんど触れてはいない。調査を進める中で昭和8年（1933）に班目が岸から人形を買い取ったという記録があった。実際に現在残されている班目人形の衣装の中にも、例えば「明治二巳年 岸 三尋木濱印」（資料番号AB-16）と所有者の名前がある。そして、明治元年の書簡が胴（どう）の裏に貼り付けられているものも発見した（資料番号AB-8）。このことから恐らく江戸時代の頃から岸では班目と同様に人形芝居が行われていたと考えられる。

（2）山北町岸・向原での聞き取り調査から

足柄座の方から聞き取り調査を行った際に、人形芝居を行っていた元舞台小屋が岸の神社にあり、川村の方にまだ残っていると聞いた。先行研究にも祭礼の時に使う山車をしまっていると書かれていたので、岸の調査を進めることにした。調査を進めるうちに先行研究ではどこの神社に元舞台小屋があるか記載されていなかったが、元舞台小屋は岸の八幡神社にあると分かった。そこで神社の真下に住む鈴木収氏に話を伺った。鈴木氏が小学生の頃までは神社で盛大な芝居が行われていたようだ。芝居には、全国的に活動をしている役者を八幡神社に呼び、祭りに合わせて芝居を行っていたという。ただし、鈴木氏の覚えていられる限りでは、人形芝居ではなく普通の役者が演じる芝居を行っていたそう。現在は山車を元舞台小屋に保管しており、その横には元舞台小屋を象徴する人の出入りが出来る扉があると知った。

なお、私たちは、岸自治会の自治会長を務める野地泰次氏に自治会に人形芝居に関する史料が残っていないか聞き取りしたが、残念なことに史料が残っていなかった。そこで山北町文化財保護委員長である茂木哲夫氏の紹介で、向原に住む藤原巳鶴氏のお宅には、人形芝居で使ったと思いき古い羽織があると聞いた。しかし、藤原氏へ聞き取り調査をしたが、古い羽織は人形に着せるものではなく役者が行う地芝居のものだと思われる。このことから人形芝居は向原に広まっていた確証はないと考えた。

（3）岸の人形遣いの子孫

班目人形芝居の衣裳を調査した際、「為次郎」や「相原富次郎」、「武井松五郎」、「牧田重太郎」、「鈴木庫吉」、「府川尤太郎」など岸の人名が多く残されていることが判明した（表を参照）。そこで、人形芝居に関する調査を岸で2日に分けて行った。1日目は山北町岸の宿（しゅく）地区を中心に調査をしたが、有力な情報は得られなかった。2日目は湯坂（ゆざく）地区を中心に調査をした。こちらにも関係ありそうなお宅に戸別訪問をしたが有力な情報は得られなかった。しかし、最後の最後に相原氏のお墓を調査する中で「相原富次郎」の文字を発見し、さらにお墓の掃除に来ていた富次郎の子孫の正氏にお話を聞くことができた。正氏の話によると富次郎は明治期前後を生きた人物で80歳まで生きたという。当時では、かなり長生きだったことが分かった。そして、「自分の先祖が人形芝居をしていたなど知らなくてビックリしました」と語ってくれた。また、後日、三尋木（みぞろぎ）氏の子孫である福岡初江氏から情報提供を頂いた。その話では、三尋木氏はこの近辺に2～3軒しかなく、明治時代の祖先に「三尋木濱次郎」という人物がいるという。そのため、先述した「三尋木濱印」と記載のあった胴は、おそらく三尋木濱次郎が所持していたものだと考えられる。このように岸では、現在ほとんど人形芝居に関する伝承は残されていなかったが、当時人形芝居を行っていたと思われる人物の子孫が何名かいることが分かった。

3 足柄座の歴史

（1）足柄座の発展

一時中断を余儀なくされた班目人形芝居だが、昭和40年（1965）に 桐竹智恵子氏を指導者とし、地元で「ささら踊」を行っていたメンバーで人形の練習を再開し、班目人形芝居を継承する相模人形芝居足柄座の活動が始まった（発足当時は婦人会として活動）。現在、神奈川県内に存在する相模人形芝居は、足柄座を含めた5つの座が活動を行っている。南足柄市の足柄座、小田原市の下中座、厚木市の林座・長谷座、平塚市の前鳥座の五座である。

班目人形芝居は男性中心だったが、現在行われている相模人形芝居足柄座は女性中心で活動を行っている。現在活動している足柄座の方から聞いた話では、宇佐見ウメ氏という方がリーダーをしていた。「相模人形芝居「足柄座」 三十年のあゆみ」という資料には、宇佐見氏がささら踊に力を入れていた責任者であったと記されていた。その中で宇佐見氏は幼い頃父親が義太夫をやっていたことを僅かに覚えている程度で人形芝居のことはあまりわからなかったと語っている。そんな宇佐見氏の元に、班目人形芝居に関わる窓口を務める教育委員会の遠藤金治氏から「宇佐見氏が中心となってなんとか人形芝居の復活に取り組んでもらえないだろうか」と強い要請があった。そこで宇佐見氏は「私達が郷土のお役に立つのなら」と受けて立たれた。そしてこの呼びかけを昭和38年（1963）の夏頃に婦人会の有志やささら踊の仲間にした。その時この話に賛同して集まった人達がたくさんいた。

（2）聞き取り調査の概要

ここでは、足柄座の方から聞き取りをした内容を整理していく。2022年6月4日に8名の方から話を伺った。以下、座員の方から聞き取った内容をまとめていく。

座員の方の話では、資料で読んだ通り、阿波から人形芝居は伝わってきたとのことだ。四国から全国へ人形芝居を伝えていた夫婦が、たまたま班目へとやって来た。その際に夫

婦は酒匂川の氾濫にあったが、村の百姓に助けられた。そのお礼として人形芝居を披露した。そして夫婦の奥さんが病気になるってしまい、持っていた人形を班目に託したという。班目人形芝居の起源について、先行研究に記してあることよりも詳しい内容が伝わっていることが分かった。

（３）足柄座の体験

実際に人形をどのように動かして芝居を行っているのか聞き取り調査からまとめていく。人形を使うとき中心になる人を「主遣い」（おもづかい）という。主遣いは人形の背中から左手を差し込み、人形の首の部分につながる「心串（こころぐし）」という棒を握って支える。人形は衣裳等を合わせると幼児くらいの重さがある。それを左腕一つで支え、心串の「チョイ」や「小ザル」を左手の指で引き、首の色々な表情を作る。そして使い手の右手で人形の右手を使う。また主遣いは足遣いの姿勢が楽なように「舞台下駄」という特殊な下駄をはく。「左遣い」は右手で人形の左手を使う。左手は自由になり、その人形の使う小道具を取り出すが、普通は目立たないようにしている。「足遣い」は、後ろから中腰に構え、人形のかかとを持って足の運びを操る。女の人形には足がないので、衣裳の裾の内側にある「ふき」をはさみ、いかにも歩いているかのように見せる。三味線に合わせての足踏みも足遣いの役目となっている。

足柄座の方から人形の使い方について教わった際の私の体験談も記しておく。人形はかなり重く、持ち上げるのがとても大変だった。左手一つで支え、指や表情を変えるので難しかった。舞台下駄は厚さが１５センチほどあり、下駄を履いたまま三人で息を合わせるのでも苦戦した。足柄座の方たちはスラスラと歩いていたので、沢山の稽古を重ねたのだと思った。演目の内容を理解し、語り手の話に動きや顔の表情を合わせるのは、とても難しいと感じた。

（４）足柄座の現状

現在足柄座の座員は１７人で、活動は土曜日に行われている。足柄座のある方が、「今一番の課題は、後継者がいないこと」と語ってくれた。「若い座員がいない」というのが、課題であるが、こうした活動に興味を持ってくれる方もいる。課題もあるが、「昔からある活動なので大事にしている。」と話してくれた。

おわりに

今回の研究では、江戸時代から続く班目人形芝居の歴史について明かすことができた。阿波から来た夫婦によって広まり、明治に吉田東九郎の指導により発展を遂げた。そうして地域で伝承されてきた班目人形芝居だったが、関東大震災の発生により活動が困難のものとなってしまった。だが、新たに発見した新聞の記事などによれば、私の高祖父である石塚花之助ら村人の尽力で復活を遂げることとなった。その後は、第二次世界大戦の中で活動が行えない時期もあったが、戦後も地域で続いてきたものの、昭和３１年（１９５６）を最後に一時中断することとなった。

資料を読んで行く中で班目の対岸にある岸とも深い繋がりがあったことが分かった。岸についての資料はほとんど無いが、八幡神社に元舞台小屋があることも確認できた。さらに、現在残る班目人形芝居の衣裳を分析した結果、その中に岸で使われていた人形が多く伝来していることも分かった。また、人形の衣裳に記された名前の方の子孫が現在も岸地

区に何名かいられることを明らかにした。しかし、聞き取り調査を行う中で、岸では人形芝居の文化は今では全く伝わっていないということを肌で感じた。いくら地域で長い間伝わってきた文化とはいえど、一旦文化が途絶えてしまうと、その文化は人びとの記憶からは全く消えてしまうのだ。

班目人形芝居も歴史上その活動を中断することがしばしばあった。しかし、先人たちはその困難を乗り越え、活動を現在まで伝えてきた。足柄座も後継者不足などの問題はあるが、私はそうした足柄座を始めとする人形芝居の活動をより多くの人に知ってもらえるよう、その歴史を伝え、今後も研究を続けていきたい。

【参考文献】

- ・『郷土資料館調査報告書第三集 相模人形芝居 足柄座』（南足柄市郷土資料館、1993年）
- ・『班目人形芝居調査報告書 平成15年度文化庁ふるさと文化再興事業』（相模人形芝居足柄座、2004年）
- ・「足柄座 座員について」（武藤瑞乃氏保管資料）
- ・市川鉦雄「班目人形芝居」（『史談あしがら』第1集、1962年）
- ・市川鉦雄「県指定 無形民俗文化財 相模人形芝居「足柄座」三十年のあゆみ」（『史談あしがら』第30集、1992年）
- ・永田衛吉『神奈川県民俗芸能誌』（錦正社、1987年）
- ・神田由築『江戸の浄瑠璃文化』（山川出版社、2009年）
- ・『相模人形芝居 足柄座 50周年記念誌』（足柄座、2015年）
- ・「足柄座公演記録」（平成27年7月14日～令和5年3月4日）
- ・『かながわの民俗芸能』第82号（神奈川県民俗芸能保存協会、2018年）

図1 高祖父・石塚花之助の新聞のコピー
（高橋晴代氏蔵）



図2 足柄座での体験の様子（撮影：2022年6月4日）

青年川端康成が旅した伊豆

～電気・鉄道と旅芸人が交錯する風景～

静岡県立韮山高等学校

文芸郷土研究部

1 序論（研究の背景）

誰もが知る「文明開化」が、私たちの住む伊豆半島ではどのように展開されていったのか、それが研究のきっかけであった。研究が進む中、誰もが知っているであろう、川端康成の『伊豆の踊子』執筆の背景には「伊豆における文明開化」が強く影響していたことが分かった。『伊豆の踊子』は、近代化が進む時代の中でいわゆる「前近代的な要素」を色濃く残している作品でもある。

そこで私たちは『伊豆の踊子』に記された「前近代的な要素」を踏まえつつ、伊豆の近代化の歴史について調べることにした。

2 本論

（1）川端青年の伊豆旅行

『伊豆の踊子』は川端康成がモデルであろう青年と、旅先で出会った踊り子との伊豆の地での淡い恋物語となっている。川端は大正7年に実際に伊豆旅行をしている。川端が通ったルートは文豪の島崎藤村・田山花袋たちが明治42年にすでに通っていたルートとほぼ同じである。このルートは当時の旧制高校生や寄宿舎生に人気があり、伊豆旅行自体がとても流行っていたようだ。



左→川端
右→島崎藤村ら

また、私たちは湯ヶ島の温泉宿、湯本館の現社長土屋さんのお話を聞き、当時の様子を聞いた。学生旅行が流行っていたと言っても学生一人旅はあまり歓迎されず、川端も修善寺ではあまりいい思いをしなかったようだが、湯本館の当時の女将であるかねさんは川端に優しく、のちには一年のほとんどをそこで過ごすほどになったそうだ。

川端は旅の最後の下田を訪れたが、「南豆風土誌」から、当時の下田港は風待ち港として物流の拠点となり栄えていたことがわかった。下田には「南豆馬車鉄道」が大正7年から通っていたた

め、伊豆は船と同じように陸上でも日本の最先端を走っていたことがわかる。下田の繁栄は以下の表からもわかる。

貨物商品	輸出額(円)	輸出先	輸入額(円)	輸入先
穀物・野菜	117.485	七島	391.044	東京・尾州・駿州・七島
魚介類・海藻	305.094	東京・大阪・駿州	376.748	房州・七島・駿州・北海道
日用食品	42.210	七島	101.131	東京・駿州・三州・尾州
建築材料	32.050	東京	35.240	東京・尾州
雑貨品	65.763	群馬・信州・東京	104.034	七島・東京・野州・駿州

(2) 川端康成の足取りの背景

伊豆の文明開化には「道路」「電気」「鉄道」の3つのポイントがあった。

① 「道路」の面

川端は三島から伊豆に入り、天城峠を超えて下田に出て船で東京に帰るルートを取ったが、天城山隧道、通称旧天城トンネルができていなかったらこの旅は成立しなかったと考えられる。



ちなみにこのトンネルは道路トンネルとしては日本初の重要文化財となっている。

また、川端が旅をした大正7年は丹那トンネルの工事が始まった年でもある。丹那トンネル開通以前は東京から三島は約5時間かかったが、開通以降は2時間で行くことができるようになった。

トンネルができるとそこを馬車が通るようになり、大正7年には乗合自動車、すなわちバスが下田から大仁まで運行するようになった。このことから伊豆の道路はバスが通れるほど整備されていたということがわかる。

② 「鉄道」「電気」の面

旧天城トンネルができた背景には東海道線の全通があった。東海道線が流通の主力になると船が減り、下田や南伊豆がやがて陸の孤島になってしまうと危惧した県会議員などによってトンネルが整備されたためである。また、現在は「伊豆箱根鉄道・駿豆線」として三島・修善寺間を運行している「豆相鉄道」は静岡県内初の鉄道会社で、そこに電力を供給していた「駿豆電気」も静

岡県内初の電灯会社だった。ここで注目されるのは「電気」という当時最先端の技術を持っていたのは帝国大学や工手学校の生徒というごく一握りの人たちだけだったにもかかわらず、そうした若きエンジニアを「駿豆鉄道」では多く雇っていたという点だ。また、「駿豆電気」の取締役兼技師長であった野口遵は、のちの新興財閥、日室を一代で築いた人物である。日室は今でも JNC や積水ハウスなどの企業として残っている。

伊豆箱根鉄道は電灯と電車の事業の事業拡大を進めるためにも発電事業の増強を図り、函南の平井発電所と中伊豆の梅枝発電所を作った。

これらのことも含め、「電気」「鉄道」の二つの偉業が県内で初めて伊豆の地で達成されていることはまさに「伊豆の文明開化」と言えるだろう。

（3）旅芸人と伊豆

川端康成は実際に旅芸人に会い、その体験をもとに『伊豆の踊子』を執筆したと考えられているが、当時旅芸人らは冷遇されていたようである。その影響もあるのだろう、『伊豆の踊子』以外に旅芸人についての記述があるものはほとんどなかった。そこで私たちは当時を知る方にお話を伺った。その中の一人、修善寺の稲葉さんによれば、「旅芸人は河原乞食のように見られていた」「映画などの新しい娯楽の影響を受けて旅芸人らは消えていった」ということであった。

また、下田での取材でお会いした「真木たばこ店」のご主人によると、「昭和初め頃から旅芸人が見られなくなった」ようである。これは1920年代の不景気や、戦争の影響などもあったと考えられる。小説の最後にあった「踊子と私が映画を一緒に見る」という約束を果たせなくなるのは新しい娯楽とそれによって消えていった旅芸人のことを示していて象徴的と言えるだろう。

3 まとめ

近代から伊豆には最先端のものを取り入れる気風があったが今回はその一端に触れただけだった。差別の目を向けられていた旅芸人らは記録されにくく、あまり詳しく調べることができなかった。一方で伊豆の風光明媚な自然や穏やかで癒しとなる場所は都会の喧騒から離れたものを求める多くの旅人を集めた。

4 今後の課題

本研究を進めるうえで、伊豆の近代的な面では「最先端のものを取り入れる気風」、前近代的な面では「伝統を大切にする気風」や「自然豊かな伊豆」を知ることができた。これを生かして私たちの住む伊豆半島についての探求をさらに深めていきたい。

【参考文献】

- ・川端康成『伊豆の踊子』 川端康成『伊豆の旅』（中公文庫、1981年）
- ・島崎藤村『伊豆の旅』（1909年） ・田山花袋『温泉めぐり』（1918年）
- ・深田久弥『日本百名山』（新潮社、1978年）
- ・林良平『日本の原風景』（パレード、2014年）
- ・勝間田泰平『伊豆鏡』（郷土出版社、1914年【1987年復刻】）
- ・佐藤小一郎、友野博『目で見る三島・伊豆の百年』（郷土出版社、1991年）

- ・戸羽山瀚『写真集 明治大正昭和 三島・修善寺』（国書刊行会、1979 年）
- ・森信勝『静岡県鉄道興亡史』（静岡新聞社、1997 年）
- ・静岡新聞社編集局『静岡県 鉄道物語』（静岡新聞社、1981 年）
- ・東京電力株式会社『関東の電気事業と東京電力』（東京電力、2002 年）
- ・板垣賢一郎『伊豆 天城路』（板富書院、1970 年）
- ・下田市史編纂委員会『年表 下田市史』（下田市教育委員会、2022 年）
- ・『静岡県南豆風土誌』（長倉書店、1914 年）
- ・八木洋行・野本寛一ら『しずおかトンネル物語』（静岡県文化財団、2016 年）
- ・鈴木邦彦『伊豆文学紀行』（伊豆文学フェスティバル実行委員会他、2003 年）
- ・静岡県知事直轄組織デジタル戦略局統計調査課『静岡県の国勢調査 100 年』（2020 年）
- ・田村善次郎・宮本千晴『宮本常一とあるいた昭和の日本』（農山漁村文化協会、2012 年）
- ・宮本常一『旅の手帖 <庶民の世界>』（八坂書房、2011 年）
- ・宮尾與男『図説 江戸大道芸事典』（柏書房、2008 年）
- ・戸羽山瀚『江戸から静岡へ』（静岡文化研究会、1969 年）
- ・戸羽山瀚ほか『ふるさと百話 第三巻』（静岡新聞社、1971 年）、『同 第 19 巻』（1976 年）
- ・沖浦和光『旅芸人のいた風景』（河出書房新社、2016 年）
- ・北野昭彦「『伊豆の踊子』の<物乞ひ旅芸人>の背後」（『日本言語文化研究』第十号、2007 年）
- ・稲葉修三郎『歴史の散歩道 天城のみちすがら』（2016 年）



下野国の薬種事情～江戸時代の朝鮮人参栽培から紐解く～

栃木県立石橋高等学校 歴史研究部

1. 序論

以前の宇津救命丸の研究中に徳川吉宗の命令により下野国内の日光地域で人参栽培をしていたという、興味深い事実を知った。なぜ、輸入ではなく、価値が劣るであろう国内栽培なのか。なぜ日光という地域で栽培がおこなわれたのか。これらの疑問を解決すべく、下野国内の朝鮮人参¹(以下、人参と表す)の栽培について詳しく調べてみることにした。

2. 本論

1). 栽培の発端と日光での栽培

人参は万能薬とされ、薬種として類を見ない貴重なものであった。江戸時代初期には、朝鮮からの輸入が中心であった。しかし、享保期以降は輸入が滞り²、品薄になった一方で需要は減らず、単価が高騰した。そのため幕府はこれらの問題を解決し“御仁政”を図るべく、国内での栽培を試みた。

幕府はまず国内各地の御薬園で種を増やし、国内各地の候補地へと植え付けた。その結果、享保 14 年(1729)に日光のみで植え付けが成功した³。そこで幕府は元文 3 年(1738)にお触書を出し、人参の種子を売り、栽培法を公開して民間にも栽培を奨励した。その後 14 年を経て宝暦 2 年(1752)に日光の今市で農民 3 名が自力での栽培に成功した⁴。その後、寛政期までに栽培は下野国一帯に広まった。

2). 栽培の管理とその制度

人参の栽培を行う人は参作人と呼ばれ、享和 3 年(1803)の記録では 500 名近くとなっている。そこで幕府は、人参御用所と呼ばれる管理の拠点となる役所を設け、名主のような存在である参作世話人を通して、参作人の栽培を管理した。^{図 I}

また、栽培の管理にあたり、当時の行政区分とは異なる「持村」を設け^{図 II}、栽培を管理する参作世話人の負担が均等になるようにした。それと同時に、幕府への提出書類にも名主の署名を入れない^{図 III} など、村の事業とは明確に区別され、独自の参作社会

¹ 国内産の朝鮮人参は、朝鮮種人参やお種人参ともいう。

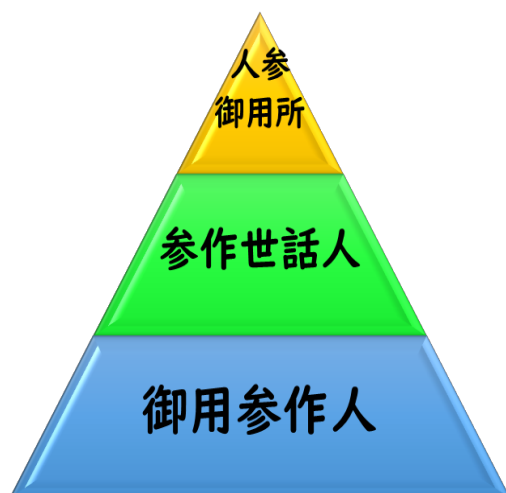
² 銀貨流出などの面からも制限された。

³ 朝鮮人参秘史より

⁴ 参才夾祥録 (栃木県史 史料編 近世 6 p.555)より

を築き上げた。

人参栽培に当たり、幕府は畑に板垣や番小屋、木戸を設ける^{図Ⅲ}など厳重な盗難防止・機密保持の対策を求めた。また、余った種は焼き払われるなど、厳しい統制が行われた⁵。これらの統制は、裏返せば、人参の密栽培や漏洩が頻繁にあったことがうかがえる。



図Ⅰ 参作人の管理



図Ⅲ 人参畑絵巻図

朝鮮種人参実採入書上帳		日光 御神領野州都賀郡
文化十二年八月		
一 参実 五万千百粒	草久村	長左衛門
一 参実 五万千百粒	同村	理左衛門
(中略)		持村制
一 参実 貳千五百粒	大久保村	榎渕美濃
一 同 壹万八百粒	同村富蔵代作	人
一 同 貳千五百八粒	同村	久左衛門
一 同 千八百八拾貳粒	同村	重右衛門
一 同 貳千五百六拾粒	同村	並木大隅
一 同 貳千八百三拾粒	同村	茂兵衛
一 参実 貳千五百拾壹粒	同村	政蔵
都合貳拾万貳千四百六粒		
右八当亥年採入候、参実書面之通相違無御座候、以上		
文化十二年八月		
朝鮮種人参御掛		
御役人中様		
日光市史		

図Ⅱ 採入書上帳

⁵ 朝鮮人参御種培養方等見分覚書より

3). 人参の栽培と売買

人参の栽培方法は、畑に日よけを設置し、土を柔らかくして、病虫害や霜に気を付け4年以上栽培する、というものである。種の発芽率はとても低く、栽培には手間と時間がかかる作物であった。

人参は収穫後、人参御用所に送られ、上・中・下を選別された。大きさに応じて一定の価格で幕府が買い上げた。1人あたり1両～最大で15両もの収入があり、御用所付近の4カ村だけでも1000両以上は売りあげた。

その後人参は人参御用所で日持ちするよう加工⁶され、江戸へと運ばれた。江戸の人参座では品質が良いものだと金1両、悪いものでも銭600文で売られ、幕府が多大な利益を得たことがうかがえる。表Ⅰ

種類	上人参	並人参	肉折人参	細髭人参
値段(江戸時代)	金1両	金2分	銭1貫文	銭600文
値段(現在)	10万円	5万円	2万5000円	1万5000円

表Ⅰ 人参の種類と値段

4). 五千石での栽培

人参栽培は五千石と呼ばれる地域⁷でも行われていた。

栽培前の五千石を含む北関東・東北周辺の農村は、飢饉や疫病、過剰な新田開発などが原因で、荒廃の一途をたどっていた。そこで秋田藩は、百姓救済・財政安定のために藩政改革を開始した。改革にあたり、飛び地領である五千石では、産物方⁸が設置され、「諸産物を取り立てるので申し出るように」というお触書が出された。これを受け、秋山家から手紙が出され、その手紙には「人参栽培が有利であり、惣村荒廃防止に役立つ」という内容である。^{図Ⅳ}。以上のことから栽培理由は惣村荒廃防止であったことがうかがえる。

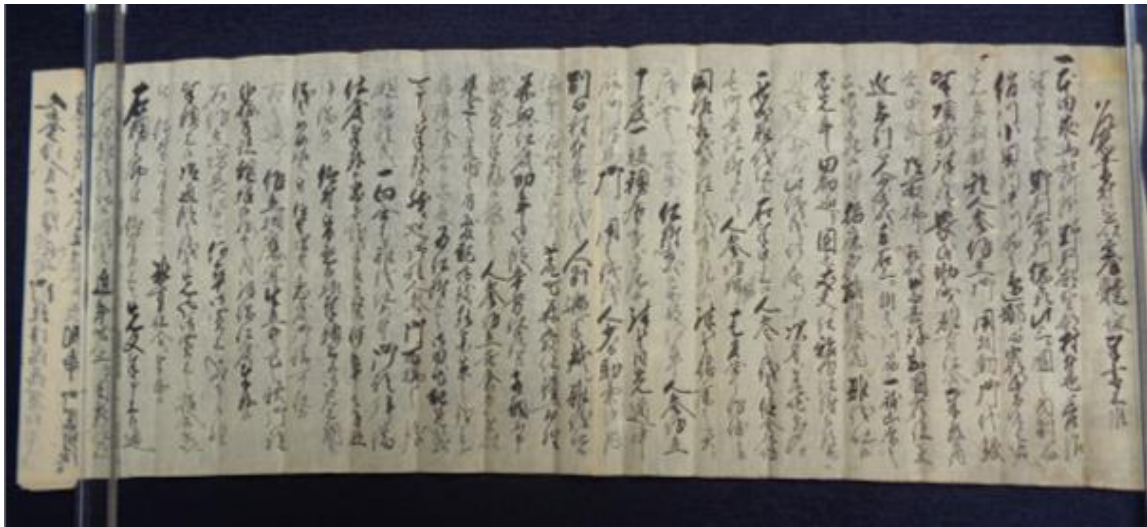
五千石だった地域には、「三仏」という地名の地域^{図Ⅴ}があるが、これはもともと「産物」であり、諸産物の生産がここでされていたことを表している。そのため、人参栽培も三仏周辺でされていたと考えられる。

⁶ そのため、人参御用所は人参中製法所とも呼ばれていた。

⁷ 下野国内における秋田藩の飛び地領で、現在の下野市南河内地区付近。現在でも「五千石球場」など、名残がみうけられる。

⁸ 領内の生産品の管理・統制を行う役職。五千石では、秋山家がその役職を務めていた。

図Ⅳ 秋山家からの手紙 栃木県立文書館蔵



図Ⅴ 三仏地区 電子国土基本図より

5). 秋田本領での栽培

一方、秋田本領でも人参栽培が試みられた。文化 11 年(1814)に会津から人参の種 10 万粒を入手し、指導者を迎え入れた。しかし、指導者は急死し、天候不順やほかの産物⁹の台頭などにより衰退し、五千石に拠点を移した。

3. 結論

人参栽培は大きな利益をあげたため、本来の目的である“御仁政”からはなれ、独自の参作社会を形成し、幕府は栽培を管理するようになり、利益追求の事業に様変わりしてしまった。

⁹ 秋田本領では甘草の栽培が盛んとなっていた。

人参栽培の利益は、日光以外の地域でも注目され、五千石地域では財政改革の一環に用いられ、利益は惣村荒廃の防止に役立てられた。

これらのことから人参は江戸時代の人々にとって経済的にも必要な「薬種」であったと言える。

4. 今後に向けて

江戸時代、下野国一帯で盛んにおこなわれた人参栽培も、明治以降衰退し、現在では地元の農家の渡辺正さんのみが栽培を続けている。現在、渡辺さんは栃木県内で鹿沼南高校と宇都宮大学に人参栽培技術を伝えている。かつて栃木県でのみ成功し、人々を救った栽培技術が失われようとしている現在、この灯火を絶やさぬよう、私たちは地域のイベントなどで歴史を伝え、後世に伝えていくと同時に、さらなる研究を進めていきたい。

【参考文献】

書籍

- 熊田一．野州一国御用作朝鮮種人参の歴史．熊田一先生著作頒布会．1979.
- 半田和彦．秋田藩の武士社会．無名社出版．2006.
- 上田三平，三浦三郎編．日本薬園史の研究．渡辺書店．1972.
- 岩下哲典．権力者と江戸の薬-人参・葡萄・御側のお薬．北樹出版．2009
- 川島佑次．朝鮮人参秘史．八坂書店．1993.
- 今村鞆．人参史．朝鮮総督府専売局．1936.
- 中沢隼．“近世下野における朝鮮人参生産の展開と御用作人”．近世下野の生業・文化と領主支配．下野近世史研究会．岩田書店，2018.
- 中沢隼．下野の朝鮮人参栽培．栃木県立文書館だより．栃木県立文書館．2012，57号．
- 野口一雄．朝鮮種人参のわが町の作立．郷土史会報．教育委員会，郷土史研究会．1990.

自治体史

- 栃木県史 通史編4，(同)5，史料編．編纂委員会．栃木県．1984.
- 南河内町史 通史編近世，史料編3．編纂委員会．南河内町．1992.
- いまいち市史 通史編Ⅲ，史料編Ⅲ．編纂委員会．今市市．2000.
- 日光市史 史料編中巻．編纂委員会．日光市．1987.

Web ページ

- 地理院地図 / GSI Maps | 国土地理院 (<https://maps.gsi.go.jp/>)
- 国立国会図書館デジタルコレクション (ndl.go.jp) 『秋田変革史大成』

近代の荒川流路の変遷～田中正造が思い描いた理想の治水とは～

成田高等学校

社会科研究部

1 はじめに

田中正造は、足尾鉍毒問題の解決に奔走し、銅山の操業停止を求めて明治天皇に直訴を試みようとしたことで有名である。しかし、その後の正造の活動についてはそれほど知られていない。実はその後の正造の活動として、渡良瀬川から利根川流域にかけての治水のあり方について、実地調査を交えながら独自の考えを主張していたことが分かった。

今回は、荒川放水路の開削工事のきっかけとなった明治 43 年の大洪水を軸に、田中正造の治水への取り組みを浮き彫りにしていくとともに、その思想の現代性について考察していく。

2 荒川で流路の開削工事が行われた背景とその概要について

荒川での流路の開削工事が行われたきっかけは明治 43 年の大洪水である。明治 43 年の大洪水は、東京府民へ被害を与えたと同時に、明治政府の意識を変え、大規模な治水対策に乗り出させるなど非常に大きな影響を与えたといえる。

明治 43 年の大洪水は、8 月 6 日から同月 16 日までの間にこの時期としては珍しい梅雨前線に加え、2 つの台風が連続して日本に上陸してもたらされたものである。

私の住む千葉県での被害の様子は以下の通りである。

・千葉県下においての総雨量は 250mm から 650mm。・平郡(現在の南房総市)では最高 725mm。・9 日には関宿で利根川 9 尺(約 2.7m)、江戸川で 10 尺(約 3m)の出水が確認され、12 日では利根川 18 尺(約 5.4m)、江戸川 19 尺(約 5.7m)。・利根川及び江戸川での堤防決壊箇所 66 カ所。・耕地の浸水や流失または埋没 4390 町歩(約 1317 万坪)。家屋浸水 2719 戸、流失 53 戸、全壊 21 戸、半壊あるいは破損 200 戸、死者 5 人(注 1)。・15 日においては佐原町本町岩ヶ崎の堤防が決壊し、本町の南岸は濁流に浸かるほどのものであった。翌 16 日の午後 9 時半ごろには笹島地先の堤防が決壊し、稲田 3000 余町歩(約 900 万余坪)、民家 1000 戸が沈んだ(注 2)。また、罹災民 921 人が佐原小学校に避難し、(注 3)浸水家屋 1190 戸、流失 2 戸(注 4)。

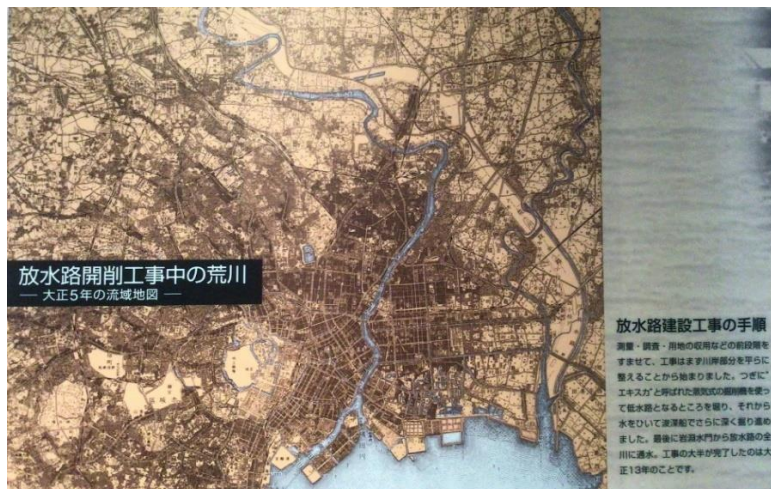
また、被害の全体像は次の通りである。

・埼玉県名栗では総雨量 1216mm(日本の平均降雨量は 1700mm)。・荒川の岩淵水門付近では水位が 8.2m まで達した。(平常時では約 1.3m(注 5))。全国統計では浸水家屋が 27 万戸、流失全壊家屋が 1679 戸、被災者数はなんと 150 万人。死者数は 369 人で、被害総額は約 1 億 2000 万円程(現在の価値で約 2 兆 4000 億円程)であった。

これに対し政府は翌年、放水路工事に着手した。放水路開削工事の概要は以下の通り。

・工事のために移転をした家屋数は 1300 戸。・国が買収した土地の面積が 1088ha。・総工事費が 3147 万円(現在の価値で 6294 億円程)。・工事期間は約 20 年。・総労働者数は 310 万人である。・死傷者数 998 人のうち 22 人が死亡。・掘削浚渫土量は 2180 万 m³

この荒川放水路開削工事は「洪水被害を契機とする抜本的な治水対策」（荒川下流河川事務所『荒川放水路変遷誌』）とされている。（注6）この様な大規模災害によって国家的なプロジェクトによる近代的な治水工事が始まったのである。



（図1）荒川放水路開削工事中の荒川の様子（荒川知水資料館 amoa 所蔵）

しかし、この大洪水に対して独自の調査に基づく、当時の一般的な視点とは一味違った、別の視点で治水のあり方を考えていた人物がいた。田中正造である。田中正造は、足尾銅山鉍毒事件での解決に向けて奔走したことで活躍したことで有名であるが、ここでは晩年期のもうひとつのライフワークであったといえる「治水」に関して取りあげたい。

3、田中正造の治水への取り組み

荒川放水路開削工事以前の江戸における治水対策というのが、日本堤・隅田堤に代表される、低水法による「堤」である。低水法とは、自然あるいは水の流れに「逆らわない」ことを重要視した、川をあえて溢れ出させることを前提とした治水対策のことである。

前出の『荒川放水路変遷誌』によれば、隅田堤は東京の市街地を守るために人工的に決壊させることを前提に作られたものとされている。



（図2）荒川放水路開削工事前の堤の様子（荒川下流河川事務所編『荒川放水路変遷誌』（2011）より）

つまり、開削工事が行われる以前の、堤を利用した治水対策こそが「低水法」である。

逆に荒川放水路開削工事に挙げられるような日本近代化の象徴とも言える、洪水時に絶対に河川を溢れさせないことを前提とした治水対策のことを「高水法」という。現代の荒川や利根川の堤防がそうである。

両者の治水対策の方法の大きな違いは、「流水を溢れさせるか否か」という点である。低水法では完全に洪水を抑え付けようとせず、溢れさせた上で洪水を止める。例えば、戦国時代に造られた信玄堤や江戸時代の日本堤や隅田堤のような関東流がそれにあたる。

ある程度の出水を認めながらも最終的には被害を最小限に留める。いわば洪水被害を『受容』することであり、高水法とは完全に洪水自体そのものを押さえ付けることを目的とし、水の流れをコントロールして『支配』するものである。正造の唱える「治水論」は、このうちの「低水法」と重なる。その根拠として次の一文を紹介する。

(史料 1) (『田中正造全集』第 4 巻 534 頁)

今日といふとも道路氣(ママ)車の設備ハ治水と異なり皆直線を好んで山河高低亦殆んど眼中ニなく、或ハ山腹ヲウガチ高橋ヲ架シ座シテ千里ヲ走ルト雖、不(ママ)自然ヲ害スルニ至ツテ其害スルノ甚シキホド今ノ文明ノ利益トスル処多シ。但シ此利益ナルモノハ天然自然ヨリ受ケル利益ニアラズシテ誠ニ之レ人造ノ利益ナリ。利益ト云フモノ、文明ト云フトモ可否詳カナラズ。天ノ与ヘザルモノニテ人ノ与ルモノハ害必ず其内ニアリ。而モ之レハ知識ニ問フテ決スベシ。只水ハ氣車道ノ如ク無利(ママ)山ヲキリ川ヲ移動シテ妄リニ直径直行ヲ好ムモノニアラザルハ断々乎トシテ明カナリ。川ト道トハ全ク同ジカラズ。約言セバ道ハ法律ノ制裁ニ従フト雖、水ハ法律ノ制裁ナシ。之ヲ制裁セバ却テ順ナラズ。水ハ誠ニ天地ノ如シ。天地ノ大ヘナルハ法律ノ制裁ナシ。即水ノ心ナリ。水ハ尚神の如し。自由ニ自在の自然カヲ有シ又物ヲ害サズ偽ラズ、故障アレバ避ケテ通ルハ水ノ性ナリ。

この文章について、小松裕は次のように評している。

この文章は、近代文明の本質を鋭くついている。ここで対比されている「道」と「川」とは、自然との関係で、それぞれ異なった「文明」のありようとして描かれている。つまり、「道」(道路・鉄道)の文明は、直線を好み、自然を害し、「川」の文明は、自然の地勢に従うことから必然的に曲線を好み、自然を害さない、というのである。「直線を好」み、「自然ヲ害スル」文明は、「利益ト云フモノ、文明」だ、と正造は喝破している。正造の治水論は、こうした利益至上の、あるいは効率万能の近代文明のありようそのものを告発する視点に立っていたのであった。(注 7)

また、正造は「治水ハ造るものニあらず」(小松 前掲 184 頁)とも述べている。

これらの言葉から、正造は治水について、水の本性に逆らうことなく、それにしたがって治水を進めるべきだという、老荘思想のような、東洋思想に基づいた考えを持っていたようである。また、正造は山林を保全し、乱伐を戒めることも述べている。(注 8)

そして「高水法」のように、人の手を加えて工事作業を行うような、西洋由来の治水そのものを人為的に「造る」という感覚に落とし込んでいながら、批判している。

これらの言葉は正造の治水論の根底にある真髓そのものを端的に表した秀逸な一節であるのではないだろうか。

これまで古代から続いてきた伝統的な治水対策（低水法）が、急速に近代的な治水対策へ移行していることへの、過去からの訓告と受け取ることができるのではないだろうか。（注 9）

ところで、この正造が持っていた低水法的治水論は突拍子もなく浮かんだ、単なる思い付きの思想ではない。それを裏付ける証拠として正造は明治 43 年の大洪水後に独自に被害地への精力的な調査をしていたことが分かった。今回はその調査の一部として私のいる千葉県を中心として正造が調査を行った様子は次の通りである。

8/2 洲崎・浦安・行徳・船橋を調査(史料 2～5)

- ・東京府内現在の日本橋付近から東を調査。気象上の記録には見られないが、7 月 25～27 日に浦安・船橋付近を襲った高潮の被害を調査。洲崎では 52 人、死亡。
- ・浦安から船橋にかけて海辺から約 8km の範囲で樹木や稲に塩害。
- ・船橋大神宮では「いてふの大樹三木皆傾きて葉を出さず。恰モ海岸一帯秋の紅葉の如シ」
- ・船橋の「遠藤浜」だけでも 13,205 円余りの損害。
- ・この日は船橋大神宮前の「いびや(海老屋)」に宿泊。

8/3 津田沼・幕張・検見川・千葉町・佐倉・成田まで移動、安食で宿泊、夜豪雨(史料 6～10)

- ・船橋を出発後、午前 11 時に千葉町に到着。
- ・千葉町で桜井静の未亡人宅を訪問しようと考え、場所を確認するも実現せず。
- ・桜井静…下総国香取郡牛尾村（千葉県香取郡多古町）出身の実業家・政治家・衆議院議員。
- ・成田では成田山に参拝

8/4 安食を出発。11 時に我孫子到着。強雨、取手から布川へ汽船で移動(史料 11、12)

8/5 布佐へ渡船、我孫子へ。午後 5 時頃土浦に到着、宿泊(史料 13)

8/6 土浦より小山、栃木、7 日佐野、8 日に谷中へ帰る予定。(史料 14 から 16)

また、次の史料を読むと、正造はこの被害地の治水調査で、関宿から流入する江戸川の入口の川幅が狭いことと、その地点の川底をコンクリートで固めて水深がこれまでの半分以上浅くなっているために、渡良瀬川と利根川が合流する地域で洪水が起きやすくなっているとの結論を持つに至ったことがわかる。

（史料 2）明治 44 年 8 月 2 日—8 月 8 日〔ノート〕（『田中正造全集』第 12 巻 359 頁より）

因ニ曰く、旧渡良せ川存在の当時、江戸川の上流関宿四里間野田まで二十間程ニ掘り削り、水勢入口ちよろしきため、追々五六十間ニ開き、而も旧渡良せ川ハ未だ入口ちをゞきらずして、自然的浅淤を図る時き、二流の洪水下流ニ害ありとて終に訴訟となりて、関宿入口ハ拾八間四尺よりハ広げざりとの約束を、事件ハ落着せしも、当時ハ旧渡良せ川一百間以上もありて、流水滞りなければ、上流町村も右ニて済方いたしたるに、数年ののち、旧渡良せ川ハ自然的浅淤ニよりて川底高く埋りて、流水下り少きを見て、イツノマニカ此口ちを塞ぎ止めたり。之を塞ぎ止めるニ於てハ、関宿ハ改めて一百五十間となすべきに、依然十八間四尺なりを以てし、のち兩岸松杭を五六間ヅゝ打出して、合計三十間前後にて、上流湛へ多く、此頃より数丁の間ニ少々ヅゝの逆流を渡良瀬川ニ見るあり。但し此逆流ハ利根川のみ大洪水にして、渡良せ、思両川の水量極めて少量の時ニ限るれり。

然るに此三十間前後の川巾を拾四間とし、就中平水の点ハ拾間とまで切り詰め、川底四丈以上ありしハ二丈七八尺セメンニテ（法外ナ工事）埋立てゝ、川底に人造磐を築き浅

瀬となし、川巾拾間の飛瀑を造りて船舶の通行をシテ遮断したるハ現今の形ちなり。隅々衆議院議員花井卓蔵氏問フテ曰ク、飛瀑の高さ一丈ニ及ぶときけり、如何、との問ニハ、オランダ式なり、飛瀑の高低ハ僅々二寸二分のみとの答弁ハのせて速記録ニあり。オランダ式とハイカナルコトカ。オランダノ何川ニ此クノ如キ工事ヲ用ヘタルカ。其河川名及地名ヲ云ハズ、徒ラニ外国ノ例なりとして答ヘタルハ抑モ怪ムベキナリ。

渡良せ川二十九年ノ水量ハ合計拾四万余ノ立方尺ナリ。此に対スル関宿の現形ハ二万余ニ過ギズトセバ、残り十二万の水ヲ関宿以上ニ湛ルノ当然ナルコト数理ノ見易キ処ナリ。故ニ之レオ四倍トセバ拾万立方ノ通過アリ。外ニ旧渡良せ川ヲ復シテ四万立方ヲ容ルヽ足ルノ設計ヲナサバ、渡良せ川治水本来ノ面目を復スルモノナリ。而して一方中利根川の如きハ、上流妻沼ニ於ケル洪水量十八万立方の通過ニ堪ル丈けの改修ヲ為シ、本川の流水ヲシテ途中ニ滞留宿泊の無法的懶惰怠慢の流水を造ラズ、水ノ心ニ反カズ、滔々海湾ニ行クベキヲ行セシメンコトヲ期ス。

正造はこの調査を通じて、治水のあるべき姿を追求しながら、独自の治水論を持つに至ったと言える。私はこの調査を「治水を通じた、真理の為の吟味立て」と名付けたい。

また、この調査を経て得られたと思われる治水の思想の背景にはキリスト教(西洋的思想)と古来日本に伝わる伝統的な東洋的思想が深く関わっていると考えている。正造自身はキリスト教徒ではなかったものの、『マタイ伝』に常日頃から親しんでいたことがわかっている。史料のから読み取れる正造の治水の考え方には、老荘思想的な東洋思想の影響が強く見られる一方で、足尾鉾毒事件への取り組みをはじめとする正造の一連の活動には、「人々のために」という博愛的な考え方も見られる。

4、見直される「水系一貫の治水」

近年、「水系一貫の治水」(注 10)というものが改めて脚光を浴びている。令和 3 年には「特定都市河川浸水被害対策法等の一部を改正する法律」通称「流域治水関連法」を筆頭に 9 つの法律が改正された(注 11)。

この法改正の狙いとして掲げられているのが、「流域治水」と呼ばれるものである。「流域治水」というのは、『水があふれることを前提にして、水を貯められる場所をたくさん確保したり、危険な場所に住まないようにしたり、あらゆる対策を組み合わせる被害を小さくしようという考え方』である(注 12)。

流域治水の代表的な例として挙げられるのが「霞堤」である(注 13)。霞堤とは先述した日本堤・隅田堤に挙げられるような、河川が氾濫することを前提に作られた「堤」の総称である。一方、近年「霞堤」が差している意味が変化し、「通常の連続堤防とは異なり敢えて開口部を設けた堤防で、洪水のエネルギー散逸を目的の一つとする治水手法」で、今後頻発化するであろう豪雨・洪水における対応策として注目されている(注 14)。この霞堤は各地の河川にも存在しており、鬼怒川(栃木県)・手取川(石川県)・豊川(愛知県)などが代表的である。

通常霞堤の役割というのは氾濫水の河川への還元、河川水の遊水による下流での水位低減、内水の排除の 3 点と考えられている(注 15)。具体的に各河川のもつ霞堤がどのように河川の氾濫に対して効果を発揮するのかを見てみると、手取川の場合、「霞堤では超極大洪水の場合は遊水効果を示すが、通常の洪水流量では遊水機能が発揮されることが稀で

ある」と想定され(注 16)、方や鬼怒川の「霞堤では急流河川である鬼怒川中流域において大規模な洪水が発生した際に霞堤からの洪水遊水は生じない」とされている(注 17)。

このように両者の見解は見事に相反するものであり、場所による問題だと受け取ることができるが、共通して言えるのはどちらの河川も急流河川であることだ。なににせよ「水系一貫の治水」が再注目されていることは確かである。

田中正造の治水の考え方については、当時の近代的な治水の工法から見れば、時代に逆行するような面があったかもしれない。しかし、正造の考え方の背景には「なぜ下流域の利益のために中流域が損をしなければならないのか」「自然が持つ本来の力に任せながら、それに逆らうことのない治水方法こそが理想的である」ということが史料から読み取れる。それは目の前の水害だけに対処するのではなく、問題の解決のために、社会全体で取り組んでいくべきだという見方ともとれる。その点で、現代の私たちにとっても共通の問題といえる。今こそ田中正造が唱え、実践し、目指した『治水論』というものを見直していくべきではないだろうか。

(注 1) 千葉県東葛飾郡教育会『東葛飾郡誌』(1988)

(注 2) 千葉県香取郡佐原町『佐原町誌』(2010)

(注 3) 佐原市役所『佐原市史』(1986)

(注 4) 千葉県香取郡役所『香取郡誌』(1989)

(注 5) <https://www.river.go.jp/kawabou/pc> 国土交通省 川の防災情報 最終閲覧日 2023 年 7 月 21 日

(注 6) 荒川下流河川事務所「荒川放水路変遷誌 もっと知っておきたい荒川放水路の歴史と効果」(2011)より

(注 7) 小松裕『田中正造 未来を紡ぐ思想人』184～185 頁(2013)

(注 8) 明治 43 年 8 月 11 日「洪水は七分人為也」(『田中正造全集』第 4 巻 169 頁より)

(注 9) 荒川放水路開削工事の工事が始まったのは 1911 年のことであるが、この時点で正造はまだ生きている。(1913 年に死去) この歴史事実のズレであるが、開削工事以前からの 1903 年に始まる、渡良瀬川遊水地計画に対する批判の事実から「過去からの訓告」と形容した。

(注 10) 注 8 前掲より 173 頁

(注 11) https://www.mlit.go.jp/river/kasen/ryuiki_hoan/index.html 国土交通省公式ホームページ 最終閲覧日 2023 年 7 月 18 日

(注 12) <https://www.nhk.or.jp/kaisetsu-blog/100/451749.html> NHK 公式ホームページ 解説委員室「変わる水害対策～流域治水をどう進める」 最終閲覧日 2023 年 7 月 18 日

(注 13) なお、現在建設が進む荒川第二・三調節池も流域治水の例の一つといえる。

(注 14) 大畑萌・小林健一郎「石川県手取川霞堤の効果に関する基礎的研究」『水分・水資源学会研究発表会要旨集』(2022)より

(注 15) 注 14 前掲より

(注 16) 注 14 前掲より

(注 17) 池田裕一・長田一輝・飯村耕介「鬼怒川における霞堤の治水機能及び周辺の土砂動態に関する基礎的研究」『土木学会論文集 B1(水工学)』(2020)

岐阜町を支えた二つの材木商家題

—丹羽與三右衛門家と桑原善吉家の比較考察—

岐阜県立加納高等学校 地域研究部

1 序論

こんにちは、岐阜県立加納高等学校地域研究部です。本日は私たちの地元岐阜の歴史をご紹介します。美濃国厚見郡岐阜町、私たちの地元岐阜県岐阜市は長良川の水運で栄えました。戦国時代は斎藤道三や織田信長の城下町だったことでも有名です。しかし慶長5(1600)年8月、関ヶ原の合戦の前哨戦で岐阜城は落城し、その後徳川政権の指示で城と武家屋敷が南の加納へ移転することとなり、岐阜町は純粋な町場として再出発しました。この近世以降の岐阜町を支えた有力な町人が長良川沿いで西材木町の丹羽與三右衛門家と、中河原の桑原善吉家という二つの材木商家です。

鉄道もトラックもない時代、材木は山で伐って川に落とし、桴に繋いで運びました。丹羽與三右衛門家・桑原善吉家は、どちらも長良川上流からの桴を引き込む拠点にあります。

丹羽與三右衛門家は近世後期から町人のトップ、岐阜町惣年寄を代々務めました。私たちは丹羽家に直接うかがいました。丹羽家の現当主、丹羽佳夫さまは私たちに貴重な「丹羽家由緒書写」を見せてくださいました。これは文化7(1810)年に11代目丹羽與三右衛門氏祐(うじすけ)が、岐阜町領主の尾張藩10代目藩主の徳川斉朝に提出した丹羽家歴代の記録です。ここには、丹羽與三右衛門の初代丹羽元助は、丹羽氏次の支流で、天正年中に岐阜町に入った、とありました。丹羽氏次は尾張岩崎城主で織田信長の息子信忠に天正8年から仕えました。この時信忠はちょうど岐阜城主です。信長・信忠親子が本能寺で亡くなると丹羽氏次は徳川家康に仕え、小牧長久手の戦いで岩崎城を拠点に家康に勝利をもたらしました。岐阜では1600年の関ヶ原の戦いを経て、1601年に岐阜代官所、1602年に加納城などができました。これらは丹羽家から真南に進む直線道路上にあります。私たちは岩崎城歴史記念館にうかがって「岐阜の丹羽與三右衛門家は、小牧長久手で活躍した丹羽氏次の縁で、加納城などの材木の水揚げを命じられた」という発表を館長さんにご覧に入ってきました。岐阜の丹羽與三右衛門家は戦国大名出身で「近世岐阜町が徳川政権によって再構築される際に特に選ばれた」という出発点をもつ家だと私たちは考えています。

丹羽家は19世紀初めから堤防に穴をあけ、材木を引き込む通路にしていました。この穴は昭和8年に閉じられました。現場に行ってみると、付近の方から、丹羽家の西の端で堤防が飛び出した所が穴の跡だと教えられました。

これに対して桑原善吉家は、かつて中河原と呼ばれた長良川の中洲にあります。岐阜日日新聞社の「白蛾一人語り 桑原善吉回想録」によりますと、斎藤道三の息子義龍が臨済宗の伝灯寺という寺院をこの地に建てましたが、義龍の死後破壊され、跡地が東傳寺という荒れ寺になっていました。初代善吉は18世紀初めに雛屋忠兵衛という名で、ここを拠点に人形芝居を始め、同時に桴の水揚げや、更に下流に桴を繋いで送る仕事も始めて材木商「雛屋」となりました。桑原家は、丹羽家のような支配者とのつながりや特権を最初から

持っていた家とは対照的に、非常に庶民的な立場から成長した家とみられます。

桑原家は近世後期から付近の土地を次々と買い取り、明治になって東海道線ができると、金華山麓の場所を岐阜市に寄付して、中央の要人をもてなす施設を整備しました。萬松館は、伊藤博文以下歴代総理大臣を接待した旅館です。山腹の三重塔や信長の岐阜城跡に建てられた模擬城は、10代目善吉らによって木橋だった長良橋の廃材で出来ました。城は昭和18年に火災で焼失しましたが、昭和31年に11代目善吉を中心に再建されました。

丹羽家と桑原家の近世における成長には、時間差があります。支配者とのつながりがもととあった丹羽家は近世中期から後期に大きく成長し、近世になってから自然発生的に活動を始めた桑原家は近世後期から明治以降にかけて大きく飛躍しました。

2 本論

以下に、丹羽家と桑原家それぞれについて私たちが調べたことをご紹介します。

丹羽家も桑原家も長良川沿いですが、丹羽家は堤防で守られた岐阜町の中にあります。国土地理院地図の断面図でその様子がわかり、丹羽家の社会的立場を示していると思われます。岐阜市史にある貞享5年1688年の西材木町の家並帳によりますと、当時西材木町は丹羽家を含め下人と下女を従えた、財力のある商家が並んでいました。その中でも丹羽家は間口23間半42.3mで最大の家でした。これを地図に示すとその大きさがわかります。この中の間口11間の主屋に家族5名と下人・下女8名が住んでいました。

これより25年後、正徳3年1713年の西材木町宗門改には、各家の奉公人が「一季者」・「年季者」と書かれています。辞典によりますと「一季者」は一年契約、「年季者」は複数年契約を指します。ただし「年季者」は終身雇用でなく、一定期間が過ぎると退職する、これも期間限定社員です。この頃の丹羽家は、8名いた奉公人が12名に増えていました。「年季者」の他に「歳季者」とあり、これも「年季者」と同じとみると、年季者は3名で、あとの9名は一季者です。一年限りの奉公人が非常に多いことがわかります。ただしこれは西材木町全体も年季者10名、一季者36名で、一季者が多いのは西材木町そのものの特徴だったと言えそうです。これら一季者は、あるいは1年ごとの契約更新だったのかもしれませんが、それでもこれを見る限り、長い年月を丹羽家で過ごすことはなさそうです。

奉公人の出身地も確認しました。大半が通うのが不可能な遠距離からの者たちで、そのほとんどが農村部の者たちです。当時の日本の経済規模から考えると、彼らは家計を成り立たせるのが目的で「社会的な成功をおさめる」といった、現代的な目標はなかったと思われます。

これより更に87年が経過した寛政12年1800年の間口帳があります。当時の丹羽家は、先ほどの丹羽家由緒書を書いた最盛期の12代目氏祐（うじすけ）です。丹羽家の北にあった大規模商家が移転して、23間半だった間口が61間、実に110m近くに拡大しました。更に南の13間23m余りも丹羽家の所有になりました。以前の23間半の屋敷はほぼ同じ場所で新築され、拡張された場所は、狭い間口に甚蔵・平兵衛・菊蔵ら、奉公人とみられる者たちが住む、丹羽家のいわば社宅となったことが読み取れます。そして道の向かいも一部が丹羽家所有となりました。この直後、丹羽家裏にあった法運寺を一番北の端に移転させ、先に述べた堤防の穴があげられて広い作業場が設けられました。法運寺は今も移転した場所にあります。丹羽家のみが拡大して通りの西側がほぼ独占されました。

丹羽家は、労働力確保のために奉公人の家を外に設けたのでしょうか？氏祐より一代前の11代目氏胤（うじたね）は、丹羽家で最初に岐阜町のトップ、岐阜町惣年寄になっています。氏胤は武家で従四位上小栗大炊頭元善の長女と結婚しました。そしてこの間口帳の頃の12代目氏祐は京都今出川家の利子という公家の娘を妻としました。氏胤・氏祐は和歌を冷泉為村・為泰から学んでいます。

丹羽家由緒書には、丹羽家は長良川上流の郡上藩に出入りし、藩の材木を伐る権利を得て、氏祐の時も郡上に入出入りしていた、とあります。ご長男の丹羽崇陽朗（たかひろ）様によりますと、丹羽家では氏祐の頃、聴古庵とよぶ茶室を設けて、当時の郡上藩主青山家や岐阜領主尾張徳川家をもてなしていました。崇陽朗様より聴古庵の軒にかかっていた札（ふだ）を見せていただきました。丹羽家には郡上藩主の青山家当主が丹羽家をしばしば訪問していたという話が伝わっており、また尾張徳川家歴代藩主は毎年の岐阜御成（おなり）の際、岐阜町惣年寄の家を訪問することになっており、「増補岐阜志略」にも12代藩主の徳川齊荘が丹羽家を訪問した記録が確かにあります。これらは、社会の上層部との関係を緊密にして、丹羽家の商売上の特権を維持することに貢献したと思われますが、これほどまでに上流階級との関係が密になると、農村出身の奉公人たちは同じ家に住むことは許されず、丹羽家本宅の外に住む必要が生じたのではないのでしょうか。

また丹羽氏祐は長い準備の後、文化14年1817年に石門心学の塾「逢原舎」を設けました。石門心学は当時広まりつつあった一揆や打ちこわしなどの反体制的な動きを戒め、日々の商業活動に励むことが社会貢献になると説きます。私たちは丹羽家の主屋に入れていただきましたが、大正時代に建てられたこの建物は、「濃飛文教史」に紹介されている逢原舎の間取りを忠実に再現してあることに気付きました。逢原舎だけで主屋の半分を占めています。丹羽家は材木商に加えて、上流階級による句会・茶会の場となり、更には学校の機能も持つようになったため、奉公人を外に移す必要が生まれたのではないかと感じました。

もう一方の桑原善吉家は丹羽家と違って堤防に守られておらず、いきなり長良川に臨んでいます。しかも断面図で、桑原家の玄関口がこの直線上で一番低いことに気付きました。それでもここにいれば、最も能率よく材木の仕事ができます。桑原家は水害の危険に身を置きながら労働の現場を守る、いわば度胸のすわった親分です。

昭和59年の岐阜市教育委員会『旧中川原町並調査報告』の、桑原家の図面を見ると、桑原家は様々な建物からなっていることがわかります。解説には「(…略…)事務所の隣は(…略…)レンガ蔵3間、(…略…)主屋（おもや）6間半、別棟2間、東端は3間で(…略…)主屋とその東側の2軒は別の構造で、建設されてから後に壁を抜いて通路を付けたことは明らかである」とあります。レンガ蔵や事務所も主屋と向きが違い、別の家だったようです。桑原家は、もともとは間口6間の真ん中の家のみで、貞享5年1688年当時の丹羽家と比べて4分の1程度の小規模な家から始まったようです。ここからも丹羽家に比べて桑原家が庶民階級から始まり、次第に経済力をつけて周囲の家を買い足していった過程が読み取れそうです。桑原家の間取りは、道路に面した部分は、帳面を付ける「みせ」や、玄関・応接間・仏間・座敷、主人が過ごす「格子の間」があります。お手伝いさんの部屋と台所があり、これらは桑原家の住宅兼オフィスのようなのです。

桑原家ではどんな生活をしていたのでしょうか。私たちは桑原家雛屋から独立したという、森嘉七銘木店にお邪魔しました。当主の森哲宏さまは、森嘉七のお孫さんです。興味

深いことに、森嘉七銘木店はかつて丹羽家奉公人の家だった場所にあります。近代になって丹羽家が規模を縮小し、桑原家が成長したことを示しているように思いました。

森哲宏様によりますと、森嘉七は岐阜市北部の芥見出身で、10代前半で「農家の口減らし」のため、雛屋に「小僧」として入店したそうです。森は雛屋で小僧から番頭になり、更に独立して「岐阜木材会の長老」と呼ばれるまでになりました。店内で森嘉七が奈良の春日杉の前に立つ写真と、銘木に貼って産地を証明する札を見せていただきました。森様より、森嘉七と全く同じ年齢で同時期に雛屋で「小僧」に入った西垣秀吉（しゅうきち）という人物がいることを教えられました。西垣は、雛屋で過ごした日々を細かく証言しており、これが岐阜市史に収録されていました。西垣秀吉のたどった経歴を森嘉七もほぼ同じように過ごしたと思われます。西垣は岐阜市北部の則武という場所にあった菓子屋の長男でしたが、雛屋の店頭に貼りだしてあった「小僧入用」の文字を見て父親に相談し、明治30年に13才で雛屋の小僧になりました。

西垣少年が「今日よりよろしくお執り成しの程、お願い申し上げます」と述べると、主人の10代目桑原善吉が「今日より、秀吉から秀次と名を改めよ」と命じて、入店が決まりました。次いで番頭の宮崎正助から「目上の人を通ったら、座っていても頭を下げよ」「主人を旦那様、奥様を御新造様と呼べ」「返事は必ず「へい」と言え」といわれました。店の主人が奉公人の名前を変えさせるのは、奉公人が主人に人生を預けるほどの深いつながりで結ばれることを意味します。

西垣少年は、雛屋での最初の5年間は、昼は主人の参詣や所用の供に買物や掃除、夕方は番頭が集金に回る際の提灯持ち、夜はソロバンの練習や材木通帳のこよりづくりをしました。食事は主人が座敷、家族・女中・番頭が台所、小僧は下の腰掛で食べていました。小僧は一汁一菜の粗末な食事でしたが、低い場所で食事をしていたため、番頭になって品数が増えることを小僧の頃には知らなかったそうです。また給与はなく、年に二度の「藪入り」とよぶ里帰りで、それぞれ十銭の小遣いが出るのみでした。それでも食事や衣服、病気の際の治療費は全て主人から出たので、不自由は感じなかったということです。

西垣は二十歳で番頭になりました。大番頭の宮崎正助の具申で主人が昇格を認める仕組みで、西垣は「21歳で番頭になった者もいた」と述べています。これは森嘉七のことかもしれません。同年齢・同年に雛屋に入った西垣と森はライバルだったのではないのでしょうか。雛屋では番頭に昇格することを「元服」と呼びました。「元服」の日、西垣は奥座敷に呼び出され、主人の10代目善吉から「秀次、今日から秀蔵と名を改めよ」といわれ、宮崎大番頭から羽織が渡され「今からお前は番頭だ」と言われました。「元服」で主人から改名を命じられ羽織の着用を認められるのは、まるで大河ドラマで戦国大名の家臣が取り立てられていくシーンのようです。

西垣が番頭になった頃の明治40年、雛屋には番頭8名に小僧10名がいました。当時の写真には、まだ小学生で「真一さま」と呼ばれていた11代目桑原善吉を中心に、大番頭宮崎正助に西垣秀蔵・森嘉七ら番頭4名と、小僧とみられる5名が写っています。雛屋の奉公人は、10代の「小僧」が多いことがわかります。ちなみに先ほど紹介しました丹羽家の正徳3年の西材木町宗門改帳では、丹羽家の男性奉公人は8名で、うち10代は2名で、8名中5名が一季者でした。明治になってからの雛屋は、10代の小僧をたくさん抱えて、主人・家族・番頭と共に同じ釜の飯を食べて生活の一切の面倒を見ながら教育し、昇格をモ

チベーションに競わせ、仕事に取り組む活力を生んでいたと考えられます。

西垣は 30 才で結婚し、主人の持ち家を借りて外から通う給料制の「別家番頭」になりました。結婚相手は主人が勧める相手、又は主人が認める相手に限られていました。雛屋では別家番頭になることを「別家する」といい、少年時代から長年桑原家で家族の一員として共に暮らした日々を卒業し、主人に深い恩義を持ちながら引き続き雛屋を支えるスタッフとして自立することを意味しました。

昭和 16 年 1941 年、主人となった 11 代目善吉に西垣が独立を申し出ると、許可が出ました。独立が許されたほぼ最初の例でした。西垣は白木商となって電柱を商い「雛屋への感謝の気持ちは終生忘れられない」と述べています。森哲宏さまによりますと、森嘉七も同時期に独立を許され森嘉七銘木店が開業しました。

桑原家は、先の道路に面した住宅兼オフィスに加えて、それと同じ規模の離れが東と西に二つあります。「白蛾一人語り 桑原善吉回想録」には、日本画家の竹内栖鳳や川合玉堂が 10 代目善吉からしばしば招かれて桑原家に滞在し「水屋づくりのような高い石垣の上」にあった離れの座敷で絵を描いていた、とあります。実際に桑原家を見学すると、裏は確かに石垣の上にあり、金華山や岐阜城を眺めることができる窓がありました。「回想録」には、三重塔を金華山に建てる際、川合玉堂にこの部屋から建設場所を決めてもらったという話も紹介されています。つまり東側の離れは来客用施設だと言えます。するともう一つの離れは小僧や番頭の住まいと考えられます。西垣秀吉・森嘉七ら桑原家に小僧として入店した者たちは、ここで 20 年近くを一緒に暮らしたのです。

貨幣経済の定着してきた近世中期、岐阜町では武家出身で支配者層とのつながりが元々深い丹羽家がまず優位に立ちました。通貨流通量は後の時代ほどはなく、丹羽家のみが単独で成長し、そこに農村部が労働力を提供してその経済力に頼るという関係が読み取れます。当時はまだまだ武家や公家に力があり、丹羽家は一貫して彼ら保守層との関係を優先しました。そのため奉公人との関係は深くはなく、奉公人を屋敷の外に住ませた背景もこのあたりにあると言えそうです。対して、近世後期に通貨流通量が増加して、生活のすみずみまでがお金の取引で進められる時代になると、労働者階級からも富裕層に成長できるチャンスが生まれました。自身も労働者階級の桑原家は、奉公人を子供の頃から小僧として養い、長い年月を家族同様に過ごして絆を深め、「番頭」から「別家」へと昇格する仕組みの中で、主家も奉公人も共に繁栄できる仕組みを生み出していきました。奉公人を屋敷の外に住ませた丹羽家、小僧たちを屋敷の中に住ませた桑原家、両家は近世中期と後期に、それぞれ最も繁栄できる仕組みを追求していたのです。

昭和 40 年の川出信太郎著『岐阜木材界今昔物語』には、戦後のこの界限の材木商がもれなく載っており、この中に雛屋から独立した店が多数あることがわかります。丹羽家が単独で、周囲を独占するように拡大したのに対して、桑原家は番頭が独立してばらまかれる形になります。雛屋の番頭たちは、桑原家と別の業種で開業し、自らも繁栄を追求していきました。この中の安田梅吉は名前を世襲し、息子が雛屋の番頭を含む岐阜の材木関係者合同で立ち上げた大日本土木の社長となりました。同社は戦後の金華山の模擬城や、令和の岐阜県庁や岐阜市役所なども手掛けています。

桑原家は、9 代目善吉が明治 10 年に他の有力町人たちと第十六国立銀行を設立し、10 代目善吉は十六銀行 2 代目頭取、11 代目善吉も 4 代目頭取となりました。桑原邸の向かい

に十六銀行の最も古い建物、富茂登（ふもと）出張所があります。

森哲宏さまは「金華山の城に祖父が納めた銘木があるので見てくるといい」と私たちに言われました。早速岐阜城に行ってみると、上の階に「枯木龍吟（こぼくりょうぎん） 桑原善吉書」と刻んだ銘木が掲げてありました。一旦衰えた者が、龍が吟ずるが如く息を吹き返すことの例えで、10代目善吉が作った城を、11代目善吉が大日本土木と共に再建したことを祝うものです。家族同様に暮らした真一さまと小僧・番頭たちのきずなです。

3 結論

以下に今回の探求をまとめます。

- 近世中期、武家出身の岐阜の材木商丹羽家は、武家や公家との通婚など深い関わりによって特権を維持し、更に石門心学も広めて社会の秩序維持に努める中で経済的優位を保持した。そのため支配階級との関係を優先し、奉公人はその次とする傾向がみられる。
 - 近世後期は貨幣経済が本格化し、自身も労働者階級から成長した材木商桑原家では、10代前半の小僧を多数預かって共に暮らし、番頭から別家番頭に昇格する仕組みを作って繁栄を目指した。番頭も長い年月の中で絆を深め、独立しても協力して共に成長していった。
 - 丹羽家・桑原家それぞれの成立は、日本が封建的身分秩序で運営されていた時代から、貨幣経済が定着して労働の形態や組織作りが変化していく過程を示している。
- 以上で私たちの発表を終わります。



北陸地方のローカル線

石川県立金沢泉丘高等学校
鉄道研究同好会

1 序論

日本全国には鉄道がたくさんあるが、中には利用者が少ない田舎の路線もたくさんある。そのような路線のことを「ローカル線」と呼ぶ。そして現在、日本のローカル線は、日本のローカル線は存続の危機に直面している。ローカル線は地元の高齢者や高校生を中心に、地域住民の足となっている。しかし、多くのローカル線では長年赤字が続いていた。さらに、新型コロナウイルスがそれに追い打ちをかけ、鉄道の利用者数が激減したのである。これに伴い、多くの鉄道会社は収益が大幅に減少した。現在、新型コロナウイルスの蔓延は落ち着き、鉄道の利用も回復しているが、以前の利用者数まで回復することは難しい。新型コロナウイルス感染拡大前は、大都市の鉄道や新幹線の利益でローカル線の赤字を補填していたが、それができなくなったのである。そのため、ローカル線の存廃についての議論が、現在日本全国で加速している。そこで私たちは、全国のローカル線の中でも、身近な北陸にあるローカル線について研究することにした。

2 本論

(1) 現地調査

私たちはローカル線の現状を知るため、また、利用者や沿線住民の生の声を聞くため、以下のような日程で大糸線と越美北線を対象に現地調査を行った。

2022年11月12日(土)：大糸線 糸魚川—南小谷

2022年11月13日(日)：越美北線 越前花堂—越前富田

左図は、北陸の主な鉄道路線を示したものである。



このうち、オレンジ色で示した路線は、2019年度の輸送密度（旅客営業キロ1kmあたりの1日平均旅客輸送人員）が2,000人未満の路線、すなわち、特に需要が少ない路線である。

1, 大糸線

大糸線は糸魚川—松本間を結ぶローカル線で、糸魚川—南小谷間を JR 西日本が、南小谷—松本間を JR 東日本が運営している。今回は、糸魚川—南小谷間を現地調査の対象とした。

私たちは、中土、平岩、南小谷の3駅で調査を行った。

1. 中土駅

まず、長野県北安曇郡小谷村にある中土駅を調査した。乗降客は私たち以外にいなかった。

待合室の壁にはスキーツアー客への貼り紙があり、英語表記のものもあった。外国人の来訪があったことが伺える。

2. 平岩駅

次に、新潟県糸魚川市にある平岩駅を調査した。乗降客は私たち以外にいなかった。この駅で糸魚川方面に折り返す列車が一日に2本設定されている。駅前には、「ガンバレ大糸線」と書かれた看板もあり、大糸線を応援したいという気持ちが感じられた。



3. 南小谷駅

最後に、長野県小谷村にある南小谷駅を調査した。この駅は、JR 西日本と JR 東日本の境界駅であり、大糸線の中でも比較的大きな駅である。乗降客は私たち以外に少なくとも25名いた。駅周辺には多くの民家や店があった。

大糸線の乗客15名にインタビューも行った。利用目的を尋ねた結果、観光目的8名、通勤目的1名いた。さらに大糸線が廃止になりそうだと、という報道を聞いて訪れた、つまり、大糸線を守ろうと行動した方が4名いた。



次に、平岩駅周辺でインタビューを行った。この方々は、平岩には年に1度お墓参りで来るとのことだが、悪天候による運休が不安なため、大糸線は利用せず、マイカーで来るようだ。ただ気持ちに余裕があるときには大糸線を利用するそうだ。大糸線が廃止されたら寂しいので、存続してほしいとのことだった。

次に、南小谷駅でインタビューを行った。ここで話を聞いた方々は、YouTubeで「大糸線に乗ろう」などというタイトルの動画を見て来られたそうだ。この方々をご覧になったと思われる動画の再生回数は多くはない(2022年12月時点)が、実際にこの動画を見て大糸線を守ろうと行動を起こした方がいたということである。その動画も我々のこの研究発表も、小さな訴えではあるが、小さな訴えでも、やる価値があるということだ。また、鉄道は廃止されたら復活しないので、存続してほしいとのことだった。

2. 越美北線

次に、越美北線の現状も調べた。越美北線は福井と九頭竜湖を結ぶJRのローカル線で1日15本運行されている。私達は越前富田、市波、越前大野の3駅にて調査を行った。

1. 越前富田駅

周辺は人気が多く、田んぼや人家、小中学校があった。乗降客は私達の他にいなかった。

2. 市波駅

周辺には、集落や田畑、温泉があった。乗降客は私たち以外にいなかった。

3. 越前大野駅

この駅は越美北線の主要駅であり、福井方面に折り返す列車も設定されている。周辺には多くの住宅や店が並び、越美北線の駅の中では特に発展している。乗降客は私たちの他に約 15 人おり、人通りも他の駅よりも多く、観光客もいた。



インタビュー

まず、車内の乗客 17 名にインタビューを行った。観光目的で、紅葉の名所である九頭竜湖駅まで乗る人が多く、空席はほとんどなかった。観光目的の乗客は 13 名だった。また、飲酒をする予定があり、自家用車の代わりに越美北線を利用しているグループもあり、車の代替としての利用も伺えた。乗客へのインタビューの結果、様々な年齢層に利用されており、存続を望む声が多数あった。運賃は、バスよりも安価である点から肯定的な意見が多かった。一方で本数が少ないことや、福井駅での乗り場がわかりにくいといった不満もあった。



次に、沿線住民の方にインタビューを行った。沿線住民からは、本数が少なく、自家用車があるのであまり利用しないという声があった。また、昔は快速列車もあって、今よりも本数が多くて便利だったといった声もあった。

(2) ローカル線を守るための取り組み

2022 年 8 月 20 日・21 日に、臨時快速列車「大糸線全通 65 周年号」が運行された。このとき、長野県小谷村の住民は、南小谷駅ホームで、列車の乗客を演奏でお出迎えしており、大変盛り上がっていた。この他にも、大糸線をテーマとした俳句を駅に展示する、沿線でスタンプラリーを行う、定期券購入の補助を自治体で行うなど、ローカル線を守る取り組みは様々な方法で行われている。しかし、JR は採算の悪いローカル線の存続に対してあまり積極的ではないのが現状である。

(3) 鉄道のメリット

鉄道は緊急時に極めて重要な役割を果たす。2011 年 3 月 11 日に東日本大震災が発生した際には、防寒用の石油を被災地へ輸送するため、被害を受けた最短経路の路線に代わり、磐越西線と呼ばれるローカル線を経由し、大きく迂回する形で被災地へ石油を届けた。



このとき、磐越西線が既に廃止されていれば、被災地への石油輸送は実現不可能だったであろうと言われている。つまり、ローカル線の存在が多くの人の命を救ったということである。

(4) まとめ・提言

1. まとめ

ローカル線には、通勤・通学・観光などの需要がある。ローカル線の沿線住民に限らず、ローカル線とは無縁な人々からも、存続を望む声が多数寄せられている。また、ローカル線の存続のために大勢の人々が努力している。さらに、鉄道には他の交通機関には無い良さが多く、廃線にすると多くの不便が生じるだろう。したがって、ローカル線は必要不可欠であるといえる。

2. 提言

ローカル線は、これ以上廃止にしてはならない。

まず、地方公共団体・国・鉄道会社が一体となって、よりよいローカル線作りに取り組んでいく必要がある。例えば、ローカル線の中には、速度制限があるために低速走行を強いられる区間もある。ローカル線を便利な公共交通機関にして利用者を増やすため、そして緊急時のためにも、ローカル線の高速化工事を行う必要がある。

また、ローカル線の存廃について議論する場合は、鉄道にしかない良さを意識したうえで議論するべきである。需要の少なさや経営の厳しさだけを理由に、ローカル線を廃止することはやめるべきである。

そして、一人ひとりがローカル線の問題についての知識を深め、考えることが何よりも重要だ。

(5) 出典

地図は一部を除き「Google map」で作成

- 鼠入昌史、佐藤未来. 絶滅危惧鉄道 2022. 山手章弘, 2022, 113p.
- 鐵坊主. 鉄道会社 データが警告する未来図. 小野寺優, 2022, 219p.
- 佐藤信之. 鉄道会社はどう生き残るか. 永田貴之, 2022, 217p.
- <http://www.lmuse.or.jp/collection/gallery/nishikie/>
- <https://mainichi.jp/articles/20220412/ddn/041/020/024000c>
- https://www.mlit.go.jp/sogoseisaku/environment/sosei_environment_tk_000007.html
- <https://www.youtube.com/watch?v=ulKJT3SLjso>
- <https://www.tokyo-np.co.jp/article/164942>
- <https://www.youtube.com/watch?v=S5kxDFhr0FQ>
- https://www.westjr.co.jp/press/article/items/220411_02_local.pdf
- https://www.mlit.go.jp/sogoseisaku/environment/sosei_environment_tk_000007.html
- <http://www.aizutetsudo.jp/station/ashinomakionsen/>

- <https://www3.nhk.or.jp/lnews/kanazawa/20221207/3020013524.html>
- <https://www3.nhk.or.jp/news/html/20220725/k10013735601000.html>
- https://www2.nhk.or.jp/school/movie/clip.cgi?das_id=D0005310122_00000
- <https://www.nhk.or.jp/politics/jinko/movies/10/>
- <https://www3.nhk.or.jp/news/html/20230729/k10014146541000.html>
- <https://toyokeizai.net/articles/-/216588>
- https://railf.jp/japan_railfan_magazine/2019/698/698-073.html
- <https://www.city.itoigawa.lg.jp/secure/12308/H310294ooito.pdf>
- <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%89%9F%E5%B2%90%E7%B7%9A>
- https://www.all-iwami.com/access/detail_1452.html
- <https://www.nikkan-gendai.com/articles/view/life/209122>
- <https://tetsudo-ch.com/10660649.html>
- <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%90%8D%E6%9D%BE%E7%B7%9A>
- <https://thegatel2.com/jp/article/313>

栃木県北部の養蚕業と猫神信仰

栃木県立矢板東高等学校

リベラルアーツ同好会

1 序論

明治期の主要な輸出品が繭や生糸であることは、高校で扱う日本史の教科書にも記載されている。しかし、具体的にどのような地域から繭や生糸が運ばれてきたかはあまり知ることがない。実際に私たちも、横浜からの輸出品としての繭や生糸が、私たちの住んでいる地域で生産されていた歴史を知らなかった。

那須野が原博物館が発行している『近代シルク物語日本と那須野が原を支えた蚕』【1】には、明治期の殖産興業と栃木県北部の養蚕業について詳細に記されており、現存する資料をもとに当時の那須野が原での養蚕業の活況ぶりを明らかにしている。

私たち同好会は地域史を研究しており、昨年度から近代における栃木県北部の養蚕業をテーマに活動してきた。その活動を通して、養蚕と関係の深い西那須野小唄と呼ばれたご当地ソングが消滅していることを知り、過去の歴史が現代に継承されていないことを実感した。

2 本論

(1) 栃木県北部の養蚕と雷について

・栃木県北部の養蚕

栃木県北部は、明治貴族による開拓によって発展してきた。特に矢板武や印南丈作による那須疎水の完成や交通の利便性が向上したことを受けて、現在的那須塩原市周辺では養蚕業が盛んになったといわれている。明治期に始まった養蚕業の活況ぶりは、現在でも地域に残る神社から知ることができる。

しかし平成 25 年の調査結果では、那須塩原市で養蚕業を営んでいる農家は 4 軒まで減少しており、養蚕業に関連する地域文化は衰退および消滅しているといえる。

西那須野小唄について

地域文化が消滅してしまった例として、西那須野小唄がある。この小唄はかつて西那須野町（現、那須塩原市）の製糸所で働いていた女工に向けた小唄として成立したものであった。その女工に対する唄が、戦後に工場で踊りが開かれ、地域の人が多く参加し歌われてきたことによって一企業の唄でしかなかったものが、名実ともに町の唄となった。しかし、製糸所の衰退とともに、唄も自然に消滅したとされており、現在は地域で聞く機会はない。

『しもつけの唄』【2】によると、西那須野小唄ができたのは昭和 10 年頃であった。民謡の中でも新民謡と分類されるもので、特定の土地の人々が歌ったり、踊ったりするために制作された流行歌の一ジャンルとされている。製糸所で働く人たちのための労働歌であるにも関わらず、養蚕については 4 番でしか触れられていない点において違和感がある。

西那須野小唄 しもつけの唄【2】より引用

ゝ日本よい国 輝く伸びる 那須野よいとこ 西那須野 のぼる朝日にヨ
 のびる繁昌の 歌の声
 ゝ花が咲いたよ 烏ヶ森に お山のぼれば ほのぼのと 風もみどりにヨ
 桜吹雪に 虹つつじ
 ゝ昔しや源氏の 狩場の跡よ 思い起せよ 印南翁 矢板翁とでヨ
 私財投じた 那須疏水
 ゝゴロリピカリと 夕立降りも 晴れて涼しや 蟲の声 桑はほきるしヨ
 育つ蚕の ほどのよさ
 ゝ行こうか塩原 まずその前に 結ぶえにしの 乃木神社 大山墓地へとヨ
 乗りがてらに 顔見せて

・西那須野小唄と雷

西那須野小唄の4番は、「ゴロリピカリと夕立降りも晴れて涼しや蟲の声桑はほきるしヨ育つ蚕のほどのよさ」となっており、養蚕の歴史を垣間見ることができる。私たちはこの歌詞の中で、ゴロリピカリという点に着目した。西那須野町の養蚕についての先行研究として木村康夫氏の『西那須野地区の養蚕信仰とその背景』【3】があるが、木村氏はその論文の中で、「那須連山や日光連山の影響で霜や雷が多い那須野が原での養蚕は、開拓の強い意志とともに神への祈りを支えにしなければならなかった」としており、雷による農作物被害が著しかったことを物語っている。

・栃木県の雷事情

私たちの住む栃木県は、雷がとても多いことで有名である。朝日新聞【4】によれば、宇都宮気象台によると、4月から9月の暖候期における雷日数は全国一となっている。栃木県北部は、北側にそびえる那須山、高原山、日光山と、南側は平野になっているという地形の特性上、雷雲が発生しやすく、それぞれの山の名称をとって那須雷、高原雷、日光雷と恐れられてきた。近年は本校でも何度か雷が落ちており、自然の恐ろしさを強く感じている。先述したとおり、養蚕業にとって雷は天敵であり、開拓の歴史の中でも、大いに悩みの種であったことは推測できる。現代だからこそ、今までの生活の中で教えてもらった知恵を生かしたり、技術の進歩によって雷を避けたりする工夫ができるが、昔の人はいつ発生するかわからない雷とどのように向き合ってきたのか。



写真1：本校の研究収録における雷の調査



wikipedia【5】によれば、江戸時代後期に諸国を巡り紀行文を書き残した橋南谿の著書『北窓瑣談』に、下野国烏山（現、栃木県那須烏山市）辺りで雷獣を見たことが記されている。その雷獣には、雲に飛び乗ると必ず雷が鳴り、地面に下りれば畑の作物を食べてしまうという特徴が記されており、庶民を困らせる存在と位置づけられていた。雷獣は全国各地で見ることができる妖怪であり、その姿は様々であったとされるが、雷獣の話が栃木県北部に残っていることは、江戸時代頃にはすでに栃木県北部で雷による被害で作物が育たないことがあり、民衆が苦勞しながら農業に従事していたことを表した話であると推察できる。

柏村祐司氏は著書『下野の雷さまをめぐる民俗』【6】の中で、雷神を祀る神社を雷電神社、雷神神社、加茂神社の3つに分類し、地域ごとに偏りはあるが、栃木県全域に雷の被害を防ぐ目的で建てられた神社が多くあるとしている。また、柏村氏は宇都宮市にある平出雷電神社の扁額絵馬殿に猫の姿を描いた絵馬が数点奉納されていることに触れ、猫は雷鳴や雷光に敏感であるため、靈驗あらたかとされ絵馬が奉納されたとし、雷信仰と猫には関係があると述べている。

私たちは昨年度、栃木県立博物館で開催された第132回企画展「異界～あなたとふいにつながる世界」を見学した時に、雷除けの御札をはじめ、嵐除け、雹除けの御札を見る機会を得た。



写真2：栃木県立博物館企画展の様子

これらの御札は、雷、嵐、雹などによって、農作物の被害が出てしまうことを避けるために、家の戸口や神棚に貼られたものであった。これらの御札は、県内では葉煙草栽培地域、麻栽培地域、ユウガオ栽培地域、麦栽培地域、梨栽培地域に見られるものであったため、農村地帯であった栃木県では多くの地域で共通して見ることができるものであった。那須野が原博物館が所蔵しているもののなかには、養蚕農家の間で広まるとされる猫を描いた猫絵があるため、当時の人々は逆らうことのできない自然災害に対して、雷や猫を信仰の対象とすることでよい結果を得ようと考えていたといえる。しかし、このような雷除けの札も猫を描いた札も最近は見ることがない。

（2）栃木県北部の養蚕と猫神信仰

・養蚕と猫神信仰

（1）を踏まえて養蚕業と雷の関係を調べ始めると、全国の事例として養蚕業は猫との結びつきが強いことがわかった。これは、猫が養蚕の天敵である鼠を駆除することから、猫を神として祀ったことが理由の1つとして挙げられる。下野新聞【7】によれば、仙台市の旅行会社は、栃木県北部の猫神信仰による猫像・猫碑を観光資源として活用した、地域を巡るツアーを開催していた。しかし、私たちは栃木県北部で猫像・猫碑を見たことがなく、下野新聞【7】の記事で初めて自分たちの地域に点在していることを知った。実際に栃木県北部では3市町に8基の猫像・猫碑が現存しており、フィールドワークを通して、私たちもその存在を確認することができた。特に那須塩原市にある熊田坂温泉神社には2基の猫像が安置されており、熊田坂温泉神社は雷を祀る神社でもあるため、養蚕業が地域に根付いていた根拠となりえる。その一方で、私たちが通学している栃木県北部の矢板市には雷を祀る加茂神社は存在するものの、猫像、猫碑は存在しないことがわかった。雷信仰と猫との関係も強いのであれば、矢板市内にある雷信仰をもつ神社にも猫像・猫碑を安置されていてもよいと考

えるが、そのことを裏付ける神社仏閣や石碑石仏は見当たらなかった。



写真3：栃木県北部（①那須町、②大田原市、③那須塩原市）にある猫像と猫碑

・地域産業からの考察

猫像・猫碑の存在をめぐって、雷を祀る神社が農作物からの被害を守る意味で作られたことが多いことに着目し、地域産業から考察した。その結果、栃木県北部は、養蚕業や煙草栽培、馬産などの共通する産業を営んでいることがわかった。相違点として、矢板市での養蚕は個人農家が副業として行っており、一方の西那須野町周辺では製糸所が設立され、大規模に生産されていたことがわかった。

製糸所が作られ、大規模な養蚕業が営まれていた西那須野町周辺では、以下の表1の人物らが中心となって指導・管理にあたっており、出身地を見ると、近県の群馬県や長野県が多いことがわかる。

<表1>引用：那須野が原の養蚕と製糸業 石ぐら会【8】

那須開墾社による養蚕…田島弥三郎（群馬県出身）による養蚕指導
三島農場の養蚕…田上貞質（鹿児島県出身）による肇耕社および三島農場の管理
蓮田文翁（群馬県出身） 気賀沢鉄之介（長野県出身）
杓掛角平（長野県出身） 藤森平四郎（長野県出身）

また、石ぐら会の資料【8】によれば、西那須野町周辺では明治39年から昭和18年に軍需産業に代わるまで製糸所が多く設立・操業されており、県外の指導者を誘致することで地域産業としての養蚕業に力をいれていたようである。特に、栃木県進出第1号は長野県の製糸業者であった大和組であり、従業員となる女工には東北地方出身者が8割を占めていたと記録されている。これらのことから、西那須野町の製糸所には他県出身の養蚕業従事者が多数存在したことがわかった。そのため、私たちは、養蚕における猫像・猫碑などの猫神信仰は、開拓当時に養蚕業に携わった移住者によって持ち込まれた信仰だったのではないかという新しい仮説を考えるに至った。ただし、養蚕業に関係する猫神信仰だけではないと考える。地域には犬像もあったため、たんなる供養であったものや、養蚕とは関係ない信仰のものもあるのではないかと考える必要がある。



写真4：宇都宮市高麗神社の猫像 信仰との関係は不明

3 結論

本研究では、栃木県北部の養蚕の歴史について、西那須野小唄、雷、猫神信仰の3点から多角的に考察した。その結果、養蚕業を営んでいた地域では、雷のような自然現象に対して雷信仰や猫神信仰によって災いを防いだり、良い結果を得ようとしていたことがわかった。養蚕業の発展を祈ったことがわかる信仰は現在あまり見る機会がなく、西那須野小唄のように地域文化であったものが年月を経ることで消滅していくと危惧される。

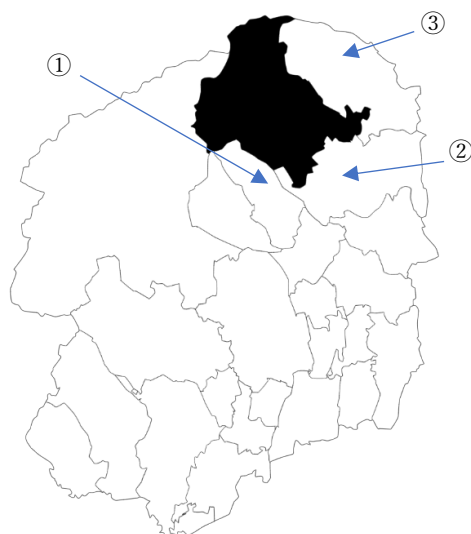
養蚕の歴史の名残として地域に点在する猫像・猫碑を調べたときに、その偏在性に着目すると西那須野町の養蚕業に従事した移住者によって持ち込まれた文化ではないかと仮説を立てるに至った。しかし実際にその仮説を立証するために関係する施設にインタビュー調査を行ったが、立証することはできなかった。

この考察には、次の課題があり、今後の研究が必要である。

- ・私たちが立てた新しい仮説を検証するために、全国の事例を踏まえた考察を行う。特に西那須野町の養蚕業に従事した移住者の出身地と、生糸の輸出が鉄道を利用していたことから、鉄道網から猫神信仰を追えるのではないかと考えている。

参考文献

- 【1】 那須野が原博物館 近代シルク物語日本と那須野が原を支えた蚕. 2013
- 【2】 福嶋寿克 しもつけの唄 下野新聞社. 1980.
- 【3】 西那須野地区の養蚕信仰とその背景
https://www.jstage.jst.go.jp/article/nasunogahara/2/1/2_31/_pdf/-char/ja
(閲覧日：2022/8/24)
- 【4】 中村尚徳 (2022年7月15日)。「雷都ってホント?」. 朝日新聞.
- 【5】 雷獣 <https://ja.wikipedia.org/wiki/雷獣> (閲覧日：2022/10/2)
- 【6】 柏村祐司 『下野の雷さまをめぐる民俗』. 随想社. 2021
- 【7】 関健 (2021年11月17日)。「猫を巡る旅石碑石仏ツアーを開催」. 下野新聞.
- 【8】 那須野が原の養蚕と製糸業―石ぐら会
https://ishigurakai.web.fc2.com/nyumon/h29_tukii.pdf (閲覧日：2022/10/2)



本研究の栃木県北部について
左の図における黒塗り箇所が、旧西那須野町を含む、現在の那須塩原市であり、養蚕にまつわる神社が点在している。
図中①が矢板市である。
図中②が大田原市である。
図中③が那須町である。
これらの地域は明治貴族による開拓の歴史を共有している地域である。

天竜川下流域に住む人たちの防災と暮らしの知恵

—磐田市草崎地区^{くささき}からの考察—

静岡県立浜名高等学校 史学部

I. 研究の目的と動機

本研究の目的は天竜川下流域に住んでいた昔の人たちの防災と暮らしの知恵とは何かを明らかにすることである。

動機は2つある。1つは天竜川下流域の歴史に関する講演会で、天竜川下流域には、高い木々が屋敷の周りを囲み、その屋敷の土地を田畑が囲んでいるという特徴をもつ住居があると聞いたからである。もう1つは自然災害の脅威が増える昨今、先人の防災や暮らしの知恵について検証することが大切だと考えたからである。

II. 研究対象地域と参考地域の概要

研究対象地域は静岡県磐田市草崎地区である。図1のように JR 豊田町駅の南側、天竜川の西側に位置している。また図2のように昔から屋敷のまとまりが島のようになん

研究を行うにあたり、富山県砺波平野を参考にした。この地区は散居村と呼ばれ、図3のように屋敷が点在している。屋敷は農業を効率よく行うため、水田に囲まれている。また一年を通して吹く西風や、フェーン現象により吹く乾いた風を防ぐために、屋敷の西と南にカイニョと呼ばれる屋敷林がある。

このように砺波平野は草崎地区と類似点があるため、参考地域とした。



図1 草崎地区の位置（国土地理院地図から加工）



図2 草崎地区の景観
(Google Earth から引用)



図3 富山県砺波平野の景観
(となみ散居村ミュージアム HP から引用)

Ⅲ. 草崎地区の特徴

磐田市草崎地区の屋敷は北西の方向が舟の舳(へ)先のようにとがっていて土地が盛り上がっている、「乾張り(いぬいばり)」という構造になっている。(図4)



図4 乾張り屋敷(左)と地の神(右)

北西には、この土地を守る地の神(図4)とご神木がある。屋敷の周りは水田で天竜川が氾濫した際に屋敷の浸水を防いでいる。

屋敷の周りは約3メートルの槇の木で囲まれ、これを「槇囲い(まきがこい)」という。(図5)



図5 槇囲い(左)・お蔵(中)・亀の甲積み(右)

槇囲いの役割は、①夏の日差しを遮ること、②冬に吹き込む遠州のからっ風を防ぐこと、③遠州のからっ風により火が発生しやすく、火の粉が燃え移りやすいため、火の粉から屋敷を守ること、の3つに分けられる。

屋敷の北西の方向には「命山」と呼ばれる、周りの地面よりも盛り上がっている所がある。命山の名前の由来は洪水や火事などで屋敷に住めなくなった時に命山だけは無事で、そこに避難できるようになっているからである。

また、命山の上にお蔵がある。かつてお蔵では食料や農具、布団などを常備し、もし天竜川が氾濫しても生活する事ができるように利用されていた。お蔵の壁は、内側に土の壁、外側に木の壁というように二層構造にして作られていて、外側の木の壁は取り外しができるようになっている。これによりもし火災が起こった時でも外側の木の壁を外すことで、お蔵に火が燃え移るのを防ぐことができる。木の壁は土の壁が雨風によって崩れるのを防いでいる。またお蔵は石が積まれて床が地面よりも高くなっている。これを亀の甲(こう)積みといい、天竜川が洪水した際、お蔵が浸水し、中に入っているものが濡れないようになっている。

屋敷内には食料や燃料になる木があり、屋敷内だけで自給自足ができる。

草崎地区には水田の中に盛り上がった畑がある。この形態を「島畑」という。これは、天竜川の氾濫で運搬された土や砂利などを盛り上げて作られている。かつてはこの島畑で稲や麦、野菜などを出荷用として育てていたが、現在は稲と野菜だけを自家用に育てている。

草崎地区の一族の分布は島のように固まっているという特徴がある。一族は本家(ほんや)と新家(あらや)に分かれる。本家とは一族の中心となる屋敷で、新家とは本家から独立した子孫の屋敷のことである。

またこの地区の一族の墓は、島の中にすべてあるという特徴がある。墓も榎囲いと同様に木で囲まれている。

この地区のご近所付き合いは、戦前まで住民の方々が一緒に農作業をしていた。現在は自治会で顔を合わせる程度の付き合いとなっているが、防災訓練や冠婚葬祭などには一緒に参加している。

IV. 草崎地区と砺波平野の比較

草崎地区と砺波平野を比較し表 1 にまとめた。

表 1 草崎地区と砺波平野の比較

	草崎地区	砺波平野
周りの木の名前	榎囲い	カイニョ
囲んでいる方角	南の一部以外ほぼすべて	西と南
点在している 屋敷の形態	島としてまとまっている	一軒一軒離れている
地の神	北西の方角にある	ない

① 屋敷の周りの木々

草崎地区は南の一部以外のほぼ四方を囲み、楨囲いと呼ばれているが、砺波平野では西と南に生えており、カイニョと呼ばれている。用途はどちらも暴風、日差し対策である。

② 点在している屋敷の形態

草崎地区は屋敷のまとまりが島として点在しているが、砺波平野では屋敷が一軒ずつ点在しており、散居村と呼ばれている。

③ 地の神

草崎地区では北西の方角に祀られていたが、砺波平野にはなかった。

V. まとめ

これらの研究から分かった天竜川下流域の防災と暮らしの知恵は以下のようにまとめられる。

(A) 防災の知恵

大きく分けて4つある。

① 水害への知恵

草崎地区は昔、天竜川によって、何度も水害に遭ってきた。そこで、土地の土台やお蔵の位置を高くし、周りに水田を作ることで屋敷の浸水を防いだ。

② 強風への知恵

遠州のからっ風という強い風が吹くため、楨囲いを作り、強風を防いでいる。

③ 火災への知恵

楨囲いや木と壁の二層構造の壁が、屋敷やお蔵に火が燃え移るのを防いでいる。

④ 避難所確保の知恵

命山にお蔵があり、そのお蔵の中に食料や家具がある。また、敷地内には食用や、燃料用として使える木々があるため、もし災害が起きても屋敷自体が避難所として使える。

(B) 暮らしの知恵

大きく分けて3つある。

① 暑さ、寒さ対策の知恵

楨囲いが日差しや遠州のからっ風を遮り、涼しい風が隙間から入るため、一年を通して快適に過ごせる。

② 島の中での共同体の知恵

昔は一族で農作業や行事を一緒に行っていた。また島の中に島畑やお墓があり、島の中で生活がある程度完結した。

③ 自給自足の知恵

島畑で自家用の稲や野菜を育て、屋敷の庭で果実を実らせたり、行事に使う植物を育てていたりするため、島の中で自給自足ができる。

◎この結果を踏まえて

自然環境と地形の特徴を利用し、災害対策や環境に良い暮らしへの工夫をするべきであると思った。また防災や暮らしの知恵を学び後世に伝えることの大切さを再認識した。そのため今の草崎の景観が残っていることが大切であると感じた。

－参考文献、参考 Web サイト－

- ・岩崎公弥 (1984):天竜川下流平野の島畑形成に関する歴史地理学者的考察, 地理学報告, 第 58 号, 1～10
- ・磐田市誌シリーズ『天竜川流域の暮らしと文化』編纂委員会 (1989):『磐田市誌シリーズ第十冊 天竜川流域の暮らしと文化 上巻』 磐田市史編さん委員会, 538～551
- ・NPO 法人 土蔵の会 (2015):『散居村の記憶』, 桂書房
- ・国土交通省中部地方整備局浜松河川国道事務所 (2018):『天竜川物語』
- ・小杉達 (2009):天竜川下流域の生活文化, 地域文化, No.88, 17～21
- ・新藤正夫 著 金田章裕 編 (2011):『富山 砺波散村の変貌と地理学者』, ナカニシヤ出版
- ・国土地理院地図: <https://maps.gsi.go.jp/>, (2023-08-07)
- ・ウェザーニューズ: <https://weathernews.jp/s/topics/201902/120155/>, (2022-10-07)
- ・となみ散居村ミュージアム: <https://sankyoson.com/>, (2022-11-20)

－引用 Web サイト－

- ・Google Earth: <https://www.google.co.jp/intl/ja/earth/>, (2023-08-07)

－Special Thanks－

磐田市草崎地区の田村敦さん、山内定輔さん、昭子さん、山内康典さん、磐田市長野交流センターの職員の方々には、大変ご協力いただきました。また、磐田市竜洋の歴史文書館の先生方から、資料の提供や、研究のご指導をいただきました。さらに、小杉達先生には、貴重なご助言をたくさんいただきました。この場を借りて、感謝申し上げます。

岐阜県川辺町の地下軍需工場

岐阜県立関高等学校地域研究部

<はじめに>

我々は、２０２１年２月より、学校付近に建設された秘匿飛行場に関する研究を開始した。秘匿飛行場とは、第２次大戦末期、本土航空作戦のために建設された施設をさす。資料や遺跡の調査、聞き取りによって、周辺に多数の地下壕が構築され物資が秘匿されていたこと、大勢の兵士や住民が動員されたことを確認できた。

軍は、特攻機 1 万機のうち 1 割を突入させれば、米艦船の 3 分の 1 を漸減できると見積もり、1945 年 10 月から特攻作戦を開始する予定であった。作戦には相当数の飛行機が必要となる。自治体史には、寺院や公共施設、地下壕に、飛行機部品が秘匿されていたと記録されているし、聞き取りによって、飛行機を格納する掩体があったことも判明した。飛行機や部品は、いったいどこから運ばれたのか。空襲が激しくなる中、飛行機はどのように生産されたのか。飛行機生産を次のテーマとすることにした。

1 飛行場と飛行機生産

飛行場と飛行機生産を考える上で、新たに得た情報を紹介する。インパール作戦の最高指揮官、河辺正三は、1945年4月7日、特攻作戦を指揮する航空総軍司令官に就任した。着任まもない5月4日、河辺が関飛行場を訪れたことを、本人自身が日記に書き記している。日記には、所沢から関まで飛行機で向かったこと、滑走路整備や工場の分散・疎開が不十分であることが記されている。視察目的が、秘匿飛行場の建設・運用、及び工場の分散・疎開の進捗の確認にあったことは明らかであり、文面からは工事の遅れに対する危機感も伝わってくる。軍首脳が特攻飛行場や疎開工場の整備を重要視していたことはまちがいない。

1944年7月のサイパン島陥落後、空襲に備え、工場の分散・疎開が本格化した関飛行場近辺でも、教室が作業場に、坂祝の紡績工場が川崎分工場に転用された。関高校の前身、武儀高等女学校の生徒も、川崎分工場に動員されている。

2 川辺地下工場

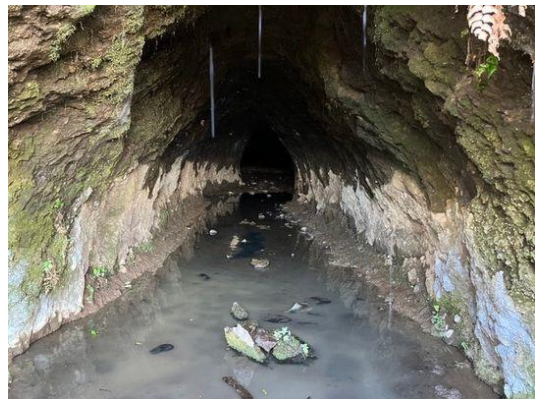
地図（右上）を見ると、国鉄



中川辺駅からほど近い丘陵に築かれた三菱第五製作所の疎開工場が、関飛行場からもっとも近い地下工場であることがわかる。川辺・坂祝工場ともに、鉄道利用が可能な利便性を備えた場所を選んで建設したのであろう。

1944年12月、三菱第五製作所の疎開工場として川辺地下工場が、同じく第四製作所の疎開工場として可児久々利の地下工場建設が始まった。久々利工場は総延長7キロで、国内最大級の規模であった。地図（前頁下）は川辺地下工場と関連施設の位置関係図である。駅からは約2キロ。ゆくゆくは国鉄引き込み線を敷設する予定であった。建設現場は幕引山と呼ばれる南北に延びる丘陵の山腹で計11本掘削された地下壕のうち3本が今も開口する。当初は、川辺から美濃加茂に広がる丘陵一帯に地下工場が建設される予定であったが、工事難航のため規模を縮小したという。

北側4本の地下壕に関しては、地下壕研究会の測量が行われている。北から全長259m、195m（右上写真）、222m、230mほどの規模を有する。掘削で掘り出された土砂の山が現在も残されており、土手のようにそのまま山すそに積み置かれ総延長300mに達する（右下写真）。地下壕内は崩落が激しく立ち入り危険なので、ドローン撮影を試みた。飛島組によれば、奥行270mの地下壕を掘削する予定だったという。入口近くには横に連結するトンネルを掘りかけた形跡がみられる。地下壕を横につなげて格子状にすれば、総延長4キロ規模の工場が完成したかもしれない。



掘削には、発破や削岩機もつかわれたが大半は人力掘削で、北側5本は中国人、南側6本は朝鮮人が掘ったと伝わる。三菱側責任者、河村三千三は、戦後、次のように回想している。



- ・正式名称は護国第612工場。建設本部は川辺町役場。工事は飛島組が請け負った。

- ・工事が進むと内部の整備が行われ名古屋から機械が持ち込まれた。突貫工事であった。

- ・坑道からの赤黒い土砂が目立ったせいか、1945年7月14日、米軍機6機の機銃掃射を受けた。以後、土砂を隠すため、伐採した樹木でおおうようにした。

- ・工事には、多くの朝鮮人・中国人が使役され、ゆくゆくは総員1500名程度で、飛行機部品を増産する予定だったが、工事完成前に終戦を迎えた。

3 事業所報告書と中国人労働者

この現場では、朝鮮人のほか、1945年5月、飛島組が御岳発電所工事現場から連行した中国人270名が作業に従事した。我々は、終戦直後に飛島組が作成した事業所報告書のコピーを入手し検討した。報告書には中国人270名の全氏名・出身地が記録されている。うち4名が病気や事故により死亡し診断書も掲載されている。

なぜこのような報告書が作成されたのか。その謎ときは、すでにNHKによって行われていた。戦犯裁判を恐れた外務省は、中国人を使役した全国135カ所の事業所に報告書提出を義務付けた。我々が入手した報告書はそのうちのひとつのコピーであった。さらに外務省は、調査員を派遣し現地報告をまとめ、全体の総括報告

書も作成している。労働者虐待がなかったことを証拠づけるための報告書であったが、冷戦の最中、戦争裁判が打ち切られたため、報告書の存在はいつしか忘れ去られていった。NHKはこの顛末を探り1993年にテレビで報道、さらに出版物として刊行した。

1942年、国内の労働力不足を補うため、日本政府は「華人労務者内地移送に関する件」を閣議決定し、結果、4万人近い中国人が日本に動員された。中国人は、表向き、自主的に募集に応じたことになっているが、実態はかなり異なる。外務省報告書や現地調査報告にも、捕虜や囚人、病人のほか、半強制的に供出されたケースもあったと記録されている。飛島組による川辺事業所報告書には「宿舎に入浴施設を設けた」「栄養に配慮した」「慰安施設はなかった」との記載がありますが、実態はどうだったのだろうか。終戦から78年。それを明らかにすることは容易ではないが、自治体史や聞き取りにより探ってみた。以下はその記録である。

- ・後ろ手を縛られて数珠つなぎになった中国人が、飛騨川に水浴に向かう姿を見かけた。

- ・中国人は、現場近くのバラック小屋で寝起きしていた。食糧事情は悪く代用食が主食だった。野草や木の皮も食べていた。衣服は粗末で、就業時間は12時間であった。

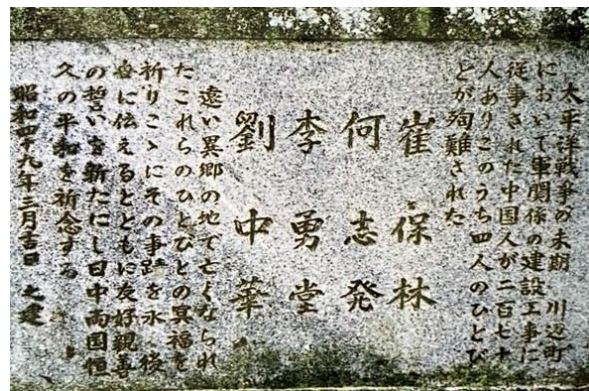
- ・当時、ここが慰安所だと言われる施設があり、「日本人や朝鮮人が利用していた、中国人は利用していない」という話を聞いた。

いずれも、自治体史の記載や当時を知る高齢者からの聞き取りである。事業報告書の記載と実態はかなり異なる。訴追逃れのためのデータ捏造に関しては、外務省嘱託調査員の証言もある。

中国人は終戦後も12月まで川辺に滞在し、佐世保経由で帰国した。その間に彼らのうち4名が死亡した。事業所報告書には3名が病死、1名がトラックから転落して頭を強打して亡くなったと記載されている。生きて祖国に帰れなかった4名の殉難碑が、工事現場近くにあると聞き、現地を訪ねた。遺骸は火葬にされ町内に安置されていたが、12月、他の中国人が帰国する際、持ち帰ったと聞く。1956年、木柱慰霊碑が建立され、町内の禅原寺の住職が供養を続けてきた。1974年、日中友好ブームの中、慰霊碑は石碑に作り直され現在にいたっている（右上写真）。

終戦から53年目の1998年、かつて工事現場で働いていた中国人2名が、川辺の地を訪れた。これはその時撮影された写真である（右下写真）。右が蒼欣晝さん、訪問当時72歳。左が張福財さん、同じく当時74歳。当時川辺の国民学校6年生だった鈴木佳子さんが殉難碑を案内し、3名が病死、1名が事故死であった記録されていると通訳を通じて説明すると、蒼さんは「事故死ではない」ときっぱりと断言したという。鈴木さんによれば、詳しい事情を聞く時間がなかったとのことである。事故でなければ何が起きたのか。真相は不明である。

中国人にとって川辺での生活はずいぶん苦しいものだったと想像されるが、心温



まる話もある。当時、女子児童は、宿舎近くに行ってはいけないと言われていたが、わんぱく盛りの男子は、中国人に遊んでもらったそうである。加藤栄樹さんもそのひとり。終戦後、加藤さんは友人とともに、労働から解放された中国人を訪ね、マージャンを囲む若者の膝にだっこしてもらい、コッペパンをもらって食べた。家族に話すと、もらいっぱなしは良くないということで、後日、干し柿とサツマイモを持参した。中国人の平均年齢は25歳。故郷の家族を思い出し、日本の子どもと遊んだのだろうか。加藤さんは、「無理やり動員され、苦勞した人たちなのに、憎い敵であるはずの日本人の子どもと遊んでくれた。今でもコッペパンをみると思い出す」と語ってくださった。

地下工場建設は終戦後放棄され、地下壕に運び込まれた機械は、山川橋から飛騨川に捨てられたという。三菱社員の回想録には、終戦前夜、宿舎や現場を抜け出した朝鮮人・中国人が神社の境内に集まり、大声で話し合っていたとの記載がある。不思議なことに彼らは日本の敗戦をすでに知っていて、善後策を相談していたと伝えられる。

4 地下工場とは何であったか

海外の人々を動員してまで作ろうとした地下工場とは、いったい何であったか。考えてみたい。名古屋周辺は日本有数の工業地帯であり、航空関連施設の一大集積地であった。戦局悪化の中、三菱・川崎ともに、生産拠点を分散・疎開させた。中でも、岐阜県東濃地域から愛知県犬山にかけては、日本屈指の地下工場密集地帯である。岐阜県の地下工場のほとんどが、この地域に集中する（右地図）。

山間地であり空襲から逃れやすいこと、駅に近く輸送に適していること、名古屋に近いことなどが、主な理由であったと考えられる。地下工場や作業場で生産された部品は体育館や講堂で組み立てられ、飛行場へと運ばれる手筈だった。部品生産から組立まで、各地の飛行場付近で一貫生産を行い、日本各地から特攻機を縦横無尽に出撃させ執拗に攻撃する。そのような作戦を陸軍は構想し、実際に、秘匿飛行場や地下工場を次々と建設した。東濃・犬山の地下工場は、東海軍管区にとって、特攻作戦の要と言える存在であった。



5 本土決戦と地下工場

本土決戦に備えた特攻作戦は、昭和20年10月から始まる予定であったが、空襲が続く中、どの程度の実効性があったか疑問が残る。東濃・犬山の地下工場群は終戦まで未完成だった。海外の労働力に依存しなければ工事が進まない中、一方で数千人の特攻機パイロットを育成するなど、果たして可能だったのだろうか。岐阜県内では、大垣や各務原の飛行場も空襲で壊滅した。7月には、関飛行場近くの民家に焼夷弾が落とされているし、川辺工場も機銃掃射を受けた。戦争が続けば飛行場や工場も次々破壊されたと考えられる。以上を総合的に考え、特攻作戦が実効性を発揮する可能性は低かったと推測する。軍の一部には、原爆投下後も戦争を続行する構想があった。上陸した敵軍を殲滅し、条件付き講和をめざす戦略である。敗

れた場合でも、長野県の松代大本営建設が物語っているように、山岳陣地を拠点に徹底抗戦する計画だった。一方の米国は、九州と関東の2カ所で上陸作戦を行う準備を進めていた。それでも日本が降伏しない場合に備え、伊勢湾を含む5カ所での上陸作戦を予定していた。

当然、日本陸軍も陣地戦の準備を進めていた。『名古屋陸軍造兵廠史』や『各務原市資料報告書第40号』によれば、多治見と美濃加茂を結ぶラインを、東海軍管区の最終防衛線とする構想があったとのことである。この防衛線は、東濃・犬山の地下工場群のほぼ



真ん中を貫いている。地下工場の陣地への転用が計画されていたのであり、東海軍管区司令官の岡田資中将の命を受けた名古屋陸軍造兵廠長田村宣武中将は、小銃、機関銃、銃弾の製造のため、多治見以北の中央線沿線に、造兵廠工場をすみやかに疎開させるよう指示を出している（上地図）。大都市から離れた内陸でも、住民を巻き込む凄惨な地上戦を行う計画があったことを知り、我々は言葉を失った。

まとめにかえて

前回、関飛行場の実態解明に努めた我々は、今回、特攻機生産の拠点のひとつ、川辺地下工場の調査を行った。聞き取りや資料調査で、中国・朝鮮出身者が厳しい管理下に置かれていたこと、東濃地域の地下工場群を本土決戦の陣地に転用する構想があったことを資料で確認した。特攻作戦や本土決戦、植民地・占領地からの動員・連行は、いずれの出版社の教科書にも掲載されている重要事項だが、郷土史とは縁遠く、身近に感じる出来事とは思えなかった。ところが調べてみると、実は、郷土史と無縁どころか、直結していたのである。今まさに土砂に埋もれようとしている川辺地下工場は「歴史の証人」ともいえる重要な遺跡であると、我々は考える。今年の5月、我々は、関飛行場跡で現地セミナーを行った。当日、100人もの方々が参観された。地元の高齢者をのぞけば、ほとんどの方々が、飛行場のことをご存じなかった。地下工場や本土決戦についても同様であろう。我々の研究は、高齢者や当時の様子を伝える資料によって支えられており。学んだ事実を、地域の皆さんや後世の人々に正確に伝えられるよう、これからも活動を続けていきたい。

参考・引用文献

- ・『坂祝村誌』（1955）
- ・『関市史』（1967）
- ・『関市立田原小学校百周年記念誌』（1972）
- ・『美濃加茂市史 通史編』（1980）
- ・『市民のための美濃加茂の歴史』（1995）
- ・『川辺町史』（1996）
- ・『新修関市史 通史編』（1999）
- ・『坂祝町史 通史編』（2005）

- ・『可児市史 近現代編』（2010）
 - ・『各務原市資料調査報告書 第40集』（2016）
 - ・『華人労務者関係調書』株式会社飛島組作業所（1946）
 - ・『往時茫茫 三菱重工名古屋五十年の回顧』菱光会（1970）
 - ・『名古屋陸軍造兵廠史・陸軍航空工廠史』（1986）
 - ・『写真集 証言する風景』「証言する風景」刊行委員会（1991）
 - ・『幻の外務省報告書 中国人強制連行の記録』NHK取材班（1994）
 - ・『中国人強制連行資料』田中宏・松沢哲成編（1995）
 - ・『川辺地下壕の概要 中国人殉難者の碑と川辺地下壕の跡』地下壕研究会
 - ・『本土決戦』土門周平ほか（2015）
 - ・『戦争体験集 平和を願って』平和を願う坂祝町民の会（2018）
 - ・防衛庁防衛研修所戦史室『本土防空作戦』朝雲新聞社（1968）
 - ・防衛庁防衛研修所戦史室『陸軍航空作戦基盤の建設運用』朝雲新聞社（1979）
- 防衛研究所史料閲覧室

http://www.nids.mod.go.jp/military_archives/catalog.html

ご協力をいただいた皆様（順不同・敬称略）

鈴木佳子 加藤栄樹 三品弘子 兼松修 瀬瀬征幸 （聞き取り調査協力）

地下壕研究会（情報提供） 梅溪得道（ドローン撮影） 舘弘士（情報提供）

坂祝町黒岩財産区（情報提供） 垣下智洋（情報提供） 高橋邦幸（情報提供）

更生戦車の活躍と現代における意義

神奈川大学附属高等学校
歴史研究部

1 序論

本研究は、資源の希少性が増している現代社会において、殺人のための兵器である戦車というネガティブな存在から、復興などの平和利用目的のブルドーザーというポジティブな存在へと転換した「更生戦車」（写真 1）という認知度の低い存在は再注目する価値があると考え、別々の文献に断片的に掲載されている数少ない先行研究や情報を一つのものとして再構成することによって、現代社会に活かすための糸口を見出すことを目的とした。

更生戦車とは「日本陸軍が保有および使用していた戦車を改造し、ブルドーザー等として使用できるようにした重機」の事で、開墾、除雪、がれきの撤去などに使用された。



写真 1 更生戦車

（株式会社中山組 HP より引用）

2 本論

生産数については、新聞や雑誌等の二次資料では、各々に記載されている数値が表 1 に示す通り大きく異なるため、生産者である株式会社三菱重工業に問い合わせたが社外秘のため情報を得ることができなかった。そこで、国立公文書館保有の資料において、衆議院不当財産調査特別委員会(1948)において、兵器処理委員会に対し更生戦車に改造するために工場に引き渡した戦車の明細を提出するように求められていたということが判明したため、当該明細閲覧のため、衆議院に問い合わせを行ったところ、「衆議院には提出を求めた書類は残っていたが提出されたことを示す文章は無く、提出されていない可能性がある。また委員会内の資料は原則非公開である。この 2 点の理由において閲覧することは不可能に近い。」との回答であったため、更生戦車全体の生産数や運用数を特定するには至らなかった。

1945 年 10 月 30 日の毎日新聞には「農地開墾、復興に戦車 3000 台を活用。連合国に許可を懇請」とあることから、日本政府が更生戦車の生産を強く望んでいたことが伺い知れる。また、1948 年 2 月 5 日の衆議院不当財産取引委員会に証人喚問された兵器処理委員

会の小松隆氏は、「米第八軍のバラード大佐に『そういうふうにしてもあまり有効じゃないぞ』と言われたが各方面から非常に希望があったため生産した」という趣旨の発言をしており更生戦車の生産は占領者であった米軍の意向に背くほど、強く望まれていたことがわかる。が、この更生戦車への期待はあくまで国産ブルドーザーが完成するまでのつなぎとしてであり、専門誌『道路』には「新規製造される重機の完成を待つ時間も、性能の良しあしで生産する車両を選ぶ余裕もない」とある。

大きくは都市復興と農業面での運用であった。前者の例としては、当時、空襲により生じた 628k m²の瓦礫の撤去が急務となっていたところ、連合国が日本政府に対し、旧式中型戦車 110 両と旧式装甲車 50 両をブルドーザーに改造し使用する許可を与えたことにより、東京都では瓦礫撤去や整地などの用途で長期間の運用実績があり、特に 1949 年 2 月 14～15 日にかけての大雪時には、通常のブルドーザーではキャタピラの形状の問題で路面を傷つけてしまい対応不可能であったところを更生戦車は 1 両のみで出動し 2 日間で延べ 45km の道路を除雪した、という記録がある。

また、後者の例としては、戦後の食料増産を目的とした開拓に従事したことが挙げられる。この際、主に改造に使用された九七式中戦車は戦時中からブルドーザー等の機能を持たす研究がされていたこともあり、改造はスムーズに進み、さらには九五式軽戦車、一式中戦車なども改造に使われた。

しかし、1955 年頃から高性能国産ブルドーザーが普及し、建設機械としての更生戦車は役目を終え、急速に姿を消していった。

記録上の最後の更生戦車の運用者は、北海道中央バス（写真 2）による除雪車やそのの牽引車としての 1960 年頃までの運用であった。

資料名	記載数
『道路』	3145両
『建設の機械化』	約3000両
『毎日新聞』	160両(都市用)
『日本陸軍の戦車』	数十両単位

表 1 生産数の相違



写真 2 北海道中央バス

（『北海道中央バス五十年史』より引用）

3 結論

更生戦車の認知度が低い要因として以下の2点が考えられる。

1つは短期間かつ少数しか運用されていなかったためである。東京都公文書館には改造許可申請をGHQに送るよう頼んだ文章（写真3）が多く残されていたが、これらの申請書は一度につき1〜3両の改造許可でしかなかったため、運用者である企業は少数のみしか存在せず、また戦後の混乱もあり、ほとんど記録に残されなかったのではないかと考えた。

2つ目は更生戦車が特別な存在だと考えられておらず、ブルドーザーとしてしか認知されていなかったためである。文献等にも両者を明確に区別しているとは言い難い記述が多く見受けられた。



写真3 改造許可申請書類

【参考文献】

衆議院公文書

『第2回国会 衆議院 不当財産取引調査 特別委員会 第4号 議事録』

（国会議事録検索システム (<https://kokkai.ndl.go.jp/>) より入手）

戦略爆撃調査団公文書

「○三菱重工(株) 東京機器製作所」

東京都公文書

「[渉外(GHQ)]旧軍用戦車改造使用申請 (T・L・0703.837)に関する件」

『官渉発第703号』1947年

東京都公文書

- 「[渉外(GHQ)]旧軍用戦車改造使用の件」『官渉発第 703 号』1947 年
「[渉外(GHQ)]旧軍用戦車改造使用申請について」『渉庶発第 1120 号』1947 年
「[渉外(GHQ)]旧軍用戦車改造使用許可申請」『渉庶発第 404 号』1948 年
「[渉外(GHQ)]旧軍用戦車改造使用許可申請」『渉庶発第 566 号』1948 年
「[渉外(GHQ)]旧軍用戦車改造使用許可申請」『渉庶発第 698 号』1948 年

内閣公文書

- 『緊急開拓実施要項』 1945 年 11 月 9 日
「衆議院不当財産取引調査特別委員会において調査上必要のための商工省鉱山局長宛
提出方要求したので念の為通知の件 ○要求項目 兵器処理委員会に関する件」
『公文類綴』1947 年

カマド出版 『日本陸軍の戦車』 2012 年 10 月 13 日

機械製作資料社 「復員戦車の補修に就いて」『生産工学』(36) 1946 年 10 月

日本建設機械化協会 『建設の機械化』 創立十周年記念号 1955 年 5 月 25 日

日本道路協会 「轉用戦車及び軍用トラクターの需要現況並に性能に就いて」
『道路 : road engineering & management review』(8) 1946 年 3 月

日本道路協会 「中戦車改造ブルドーザーによる除雪作業」
『道路 : road engineering & management review』(51) 1951 年 4 月

北海道中央バス五十年史編纂委員会 『北海道中央バス五十年史』 1996 年 6 月

内田和義・横川亮一 『開拓団長三好武男のリーダーシップ』 2000 年

大豆生田 稔 『戦時期の外米輸入：一九四〇～四三年の大量輸入と備蓄米』 2013 年

高瀬 雅弘・村上 亜弥 『戦後開拓地のライフヒストリー (1)』 2011 年 3 月

白木沢 旭児 「戦後食糧輸入の 定着と食生活改善」『農業史研究』 第 36 号 2002 年

「農地開墾に戦車三千台を活用 聯合國に許可を懇請」
『毎日新聞』東京朝刊 1945 年 10 月 30 日

「戦災地跡片づけに戦車 マ司令部許可」『毎日新聞』東京朝刊 1945 年 11 月 15 日

三省堂 『戦後史大辞典 増補縮刷版』 1995 年 6 月 10 日

Earthmover 研究会 『ブルドーザーの歴史』

<http://hw001.spaaqs.ne.jp/geomover/hstry/hstryindx.html>

最終閲覧日 2022 年 6 月 30 日

乗り物ニュース

『旧陸軍戦車、終戦後はどうなった？本土決戦用の九五式と九七式戦車、
その後の奉公先』

<https://trafficnews.jp/post/84021/2> 最終閲覧日 2022 年 9 月 15 日

NHK アーカイブス 日本映画社/日本映画新社

『生産再開へ労働者は進む』「日本ニュース」

https://www2.nhk.or.jp/archives/tv60bin/detail/index.cgi?das_id=D0009181446_00000

最終閲覧日:2022 年 11 月 9 日

花籠祭りの歴史とその類例の分布

鳥取県立智頭農林高等学校

地域研究部

1 はじめに

花籠祭りは、鳥取県八頭郡智頭町で少なくとも約 200 年前から続いている祭りで、花男が花籠を背負って集落から神社まで練り歩き、花籠を奉納するものである（写真 1）。智頭町芦津の虫井神社の花籠祭りは県指定無形民俗文化財に指定されている。また、智頭町だけでなく、隣接する鳥取県内の八頭郡八頭町、鳥取市用瀬町・佐治町、岡山県津山市阿波・加茂町でも行われている。ただし、同様の祭りではあるが、岡山県では花籠祭りではなく、花祭りの名称で呼ぶ。

本校の地域研究部は、地域貢献活動のためのボランティアで、ヤナギ巻きの準備や担ぎ手として参加してきたこともあり、2020 年から花籠祭りの智頭町における現在の実施状況、神社ごとの花籠の形態の違い、成立時期について調査を行ってきた。

本研究では、現在までの調査と花籠祭りの祭り飾りに着目した全国の類例調査の結果から祭り飾りの起源と花籠の担ぎ手である花男が相撲取りの格好をしている理由を考察したので、その結果を報告する。

2 調査方法と類例調査結果

調査方法は、智頭町の文献や古文書読解、祭りに関する文献調査、神社や公的機関を中心としたホームページによる情報収集、県内の神社には聞き取り、県外の神社に対してはメールや電話で連絡を取り、調査を行った。鳥取県内の花籠祭りについては 42 社、花籠祭りの類例とした県外の祭りについては 94 社について調査を行った。

3 祭り飾りに着目した花籠祭りの全国の類例調査に基づくその起源について

類例の一つ目の基準は、祭り飾りの形態的な共通点で、花籠と同様に 360 度に紙製の飾りがついた竹ひご（智頭町ではヤナギと呼ぶ）が刺さり、全体的にアーチ状になっているものを類例とした。その調査結果を図 1 に示す。特に島根県と鳥取県に多く、東は山形から西は福岡まで分布している。島根県の祭り花（神事花）の調査を行った『出雲の祭りと地域文化』では、祭り花の原型は平安時代以前にまで遡る「京都葵祭」であり、この祭りが最も古い形態であることが指摘されている。花籠祭りの飾りも広い意味ではこの祭り花に含まれる。次に 3 つの類例を紹介する。

（1）福岡県風治八幡宮「川渡り神幸祭」

川渡り神幸祭は福岡県無形民俗文化財に指定されている福岡県の五大祭の一つである。風治八幡宮の川渡り神幸祭では、切込みを入れた五色の色紙に糊をつけ、細く割った竹に巻きつける飾りを「ヤナギ」ではなく、「バレン」と呼ぶ。他の九州地方北部の類例に分

類した祭りでも同様の名称で呼ぶ。

神輿を先頭に 160 ～ 200 本ほどの五色（緑・黄・赤・白・紫）のバレンで飾られた山笠を担いで、彦山川の川瀬を練り歩き疫病退散、五穀豊穰を願う。バレンは基本、緑・黄・赤・白・紫の順に飾り付けられ、これは中国から伝来した「五行思想」の影響といわれているようである。昔はバレンの配色や色相を決まり通りにしていたが、現在は自由になっている。

祭りの後は、バレンを持ち帰り、丸めて輪にして玄関や戸口に飾ると火事や厄災から家を守ってくれるといわれている。

（２）静岡県富士宮市根原「道祖神どんど焼き」

どんど焼きは、松の内まで飾っていた松飾りやしめ縄、お正月に書いた書き初め、昨年買ったお守りなどを神社や地域の広場や畑などに持ち寄り、燃やす 1 月に行う地域の行事である。この地域では行事の際に柱にヤナギを飾りつけ、どんど焼きの飾りとする。

ヤナギは細く切れ目を入れた紫・白・赤・黄・緑の五色の紙を長さ 5.2 m の竹を 3 cm ほどの幅に割り、竹の先 1.4 m 分に飾り付ける。祭りの後は柱を倒し、ヤナギを丸めて各家庭に配り、火伏せのために屋根に投げ上げる。これと同様の特徴をもった、どんど焼きの飾りが東京都八王子市でもみられる。

（３）島根県出雲市「須佐神社切明神事」

毎年 8 月 15 日に開催される豊作を祈ることを目的とした祭りである。飾りは神事華と呼ばれ、高さ 5 m の柱の上段 2.4 m の長さの枝、下段 3.3 m の長さの枝に桜の造花と短冊を飾ったものです。祭りの最後に花を倒し人々が争って花枝（はなえだ）を奪い合い、それを持ち帰って田畑に挿し虫よけにする。

（３）を除き、（１）、（２）は丸めて火伏せにするという花飾りの用途を見ても花籠祭りと類似性が高い。これを類例の二つ目の基準として、分布図を作成した（図 2）。この結果、祭りが終わったあとに火伏せに利用するという用途をみても花籠祭りと同様のものが断片的ではあるが、関東地方から九州地方北部まで分布することが明らかになった。二つの基準に着目した花籠祭りの類例が北海道、東北を除いた全国的な分布を示すことは、祭り花と同様に江戸時代までの文化の中心であった京都が花籠祭りの祭り飾りの起源であることを支持すると考える。

4 花男が相撲取りの格好をしている理由

祭り飾り以外の智頭町周辺の花籠祭りの特徴に花男が相撲取りの格好をする点がある。智頭町で最も多い花男の衣装は、頭に三角巾を付け、上半身裸で相撲取りの格好をして、腰に刀をさすスタイルである。次に多いのが羽織りと相撲取りの格好で、口波多集落だけが白装束で袴にズボンのスタイルである。智頭町では、花男が相撲取りの格好をすることが花籠祭りの一つの特徴になっている。

このような格好をする祭りは今回調査した類例の中にはなく、鳥取県智頭町周辺の花籠祭りにだけ見られる特徴である。智頭町河野神社で聞き取りを行った結果によると、以前は神社の境内に相撲の土俵があったようである。智頭町内の他の神社にも土俵や土俵の跡がみられる。このことから奉納相撲との関連が考えられるが、野見宿禰という人物との関連も指摘されていた。そこでこの人物について調査を行った。

野見宿禰は、3～4世紀頃、古墳時代の出雲国の出身で、垂仁天皇の命令で奈良の当麻蹴速と相撲をとり勝った人物で、二人の相撲の様子は絵画の題材になっている。野見宿禰が出雲国から大和国に旅をする途中に鳥取県智頭町に滞在したとされている。このため、鳥取県東部には野見宿禰と関わりが深い場所が多くみられる。特に智頭町と八頭町に関連地が集中しており、智頭町には先ほど説明した野見宿禰の伝説の残る穂見薬師や、土師氏と関連の深い土師神社がある。

穂見薬師堂と関連した伝説は、野見宿禰が当麻蹴速の相撲の勝負に勝ち、故郷である出雲に帰る途中野営をし、その時天から如来が君臨したことから仏縁があると悟り、茶屋を造営したのが穂見薬師堂の由来であるというものである。また、土師の名を命名したとする伝説もあり、「智頭郷土史」に記載されている原典の記述によると、野見宿禰は現在の土師地区に泊まり、穂野見山に登り山頂についた時この里を「穂野見の里」、上から見た下にある谷を「土師」と名付けた。現在の穂見の名は五穀豊穰にちなんで稲穂の穂と野見宿禰の野見を併称させて穂野見の里としたことに由来するとされる。

類例の中にはもちろん、花籠祭りであっても鳥取県内の智頭町周辺にしか相撲取りの格好をしている例はない。また、山口県にはかつて花籠が奉納されている神社があったが、その神社でも相撲取りの格好はみられなかった。相撲取りの格好をする例は他の地域にはなく、鳥取県智頭町周辺の花籠祭りにだけ見られる特徴である。

一般的に身を清めるために神社でお参りをする前に、手水舎で手や口を清めてから社殿に向かうが、これはもともと裸になって禊を行っていたのが誰でもできる形に変化させたものである。花籠祭りの花男は単純な裸ではなく相撲取りの格好をしているのでこれだけでは説明できない。また、奉納相撲との関連も考えられるが、全国の他の類例にみられない特徴であり、智頭町周辺のみでみられる点から野見宿禰に関わる伝説との関連を考えた。

5 今回の研究のまとめ

一つ目は、ヤナギに着目した花籠祭りの類例の分布が、東は関東地方から西は九州地方北部までみられることである。先行研究とこのような広い範囲の分布を示すことから花籠祭りの起源は京都に遡ることができると考えた。二つ目として、相撲取りの格好をするのは智頭町のみであり、野見宿禰と関わりのある場所が鳥取県東部や智頭町周辺に多く存在することが明らかになった。相撲取りの格好については、奉納相撲との関連性が考えられるが、智頭町だけという分布図の特徴から野見宿禰との関係性を考えた。三つ目は、花籠祭りの全国の類例を調査する中で、花籠祭りの文化的な特徴には広域性と地域性があることが明らかになったことである。ヤナギにみられるような日本の広い範囲でみられる特徴と相撲取りの格好という智頭町でしかみられない特徴を併せ持っている。文政8年、1825

年には現在の花籠祭りの形が成立し、天保13年、1842年には相撲取りの化粧まわしをしていたという記録が智頭町土師の早野公民館所蔵の奥早野文書に残っている。五穀豊穰を感謝する農村の秋祭りが長い時間をかけて200年前には現在の形態に発展し、今につながっている。

6 研究の意義と今後の課題

花籠祭りは、長野県諏訪神社から勧請された柱祭りが行われている智頭町の中心部では行われず、周辺の山間部の農村集落でみられる。これらの農村集落では人口減少や花籠の若い担ぎ手の不足により次第に花籠祭りが行われなくなりつつある。今年からまた、再開しようと考えている集落も多いが、新型コロナの影響で3年間、ほぼ実施されていない。今後、智頭町の花籠祭りがどうなっていくかは分からないが、智頭町の農村集落の文化の記録としてこの研究には意義があると考ええる。

今後の課題として、花籠祭りが智頭町へ具体的にどのように伝わったか、調査することや野見宿禰が出雲から奈良へ行ったルートを昔の道を照らし合わせながら調査することが挙げられます。また、花籠祭りの文化的な価値をより多くの観光客や全国の人たちに知ってもらえるように部活動や地域の活動で取り組めるように考えていくことが課題としてある。

7 謝辞

本研究を進めるにあたり、鳥取県智頭町河野神社、福岡県風治八幡宮をはじめ関係機関に資料提供等、大変お世話になりました。また、智頭農林高校元教頭岸本智志先生、鳥取工業高校野田真由美先生には多くのご助言・ご協力をいただきました。厚くお礼を申し上げます。

<参考文献>

公益財団法人いづも財団／出雲大社御遷宮奉賛会

『いづも財団叢書⑦ 出雲の祭りと地域文化』今井出版 2020年

田川郷土研究会

『福岡県における川渡り神幸行事調査報告書 川渡り神幸祭』2000年

智頭町誌編さん委員会 『智頭町誌 下巻 地域誌・民俗・林業』2000年

「角川日本地名大辞典」編纂委員会 『角川日本地名辞典31鳥取県』1982年

鳥取県立公文書館県史編さん室 『新鳥取県史 民俗2民具編』2019年

富士宮市教育委員会 『富士宮市の道祖神 改訂版』2013年

宮内伝九郎 『智頭郷土史 上 明治百年記念』1971年

菅田正昭 『日本の祭り 知れば知るほど』実業之日本社 281 p 2007年

『都道府県別日本の祭り・行事調査報告書集成 5』海路書院 543 p 2008年

『都道府県別日本の祭り・行事調査報告書集成 9』海路書院 465 p 2009年

久保田裕道『日本の祭り解剖図鑑 その起源と日本人の信仰がマルわかり』

エクスナレッジ 159 p 2018年

福田アジオ 『知っておきたい日本の年中行事事典』 吉川弘文館 201 p 2012年
森井 禎紹

『につぼんの祭り ユネスコ無形文化遺産登録』日本写真企画 131 p 2021年

『日本の祭り 2022.02』 ゆめディア 2022年

芳賀日向監修 『日本の祭り 2012年版日本全国祭り撮影年鑑 タツミムック』
辰巳出版 129 p 2012年

星野 紘・宮田 幸・久保田 裕道・城井 智子 『民俗芸能探訪ガイドブック』
国書刊行会 2013年

松尾 恒一『日本の祭り大図鑑①、②、③、④』 ミネルヴァ書房 2014年

平 辰彦『来訪神事典』 新紀元社 2020年

竹永 絵里『わくわく発見！日本の祭り』 河出書房新社 2017年

佐藤 和彦 保田 博通『祭りの事典』 2006年

須藤 功『花祭りのむら』 福音館書店 2000年

俵木 悟『文化財／文化遺産としての民俗芸能』 2018年

神田 より子 俵木 悟『民俗小事典 神事と芸能 誇れる郷土データブック・ブック』
2020年版 2019年

本田 安次『日本の民俗芸能』 朝日新聞社 昭和35年

図 表



写真 1 花籠祭りの様子（１）



写真 2 花籠祭りの様子（２） 中央が花男



図 1 花籠祭りと全国の類例の分布



神輿を先頭に五色の
バレンで飾られた山
笠を担ぎ彦山川の川
瀬を練り歩く。

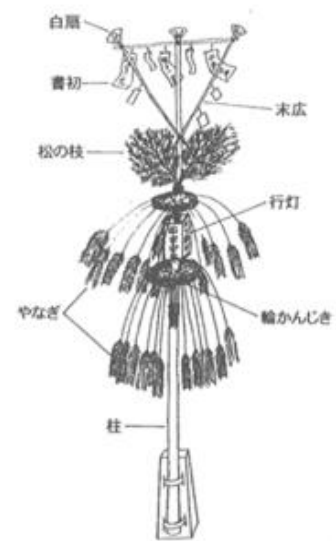


『福岡県における川渡り神幸行事調査報告書 川渡り神幸祭』より引用

資料 1 福岡県風治八幡宮 川渡り神幸祭の様子

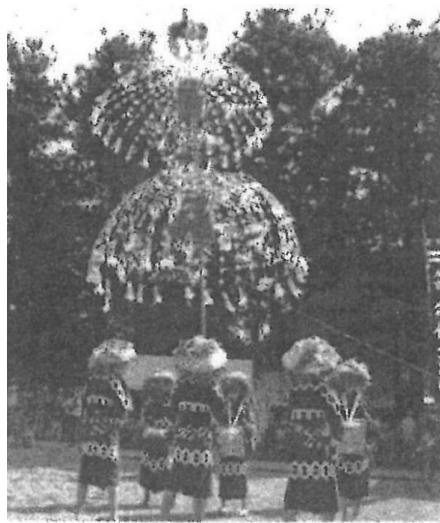


富士宮市教育委員会 『富士宮市の道祖神 改訂版』より引用



根原の「やなぎ」略図（口絵3参照）

資料 2 静岡県富士宮市根原 道祖神どんと焼きの様子



『いづも財団叢書⑦ 出雲の祭りと地域文化』より引用

資料 3 須佐神社切明神事 神事花（出雲市佐田町須佐）の様子

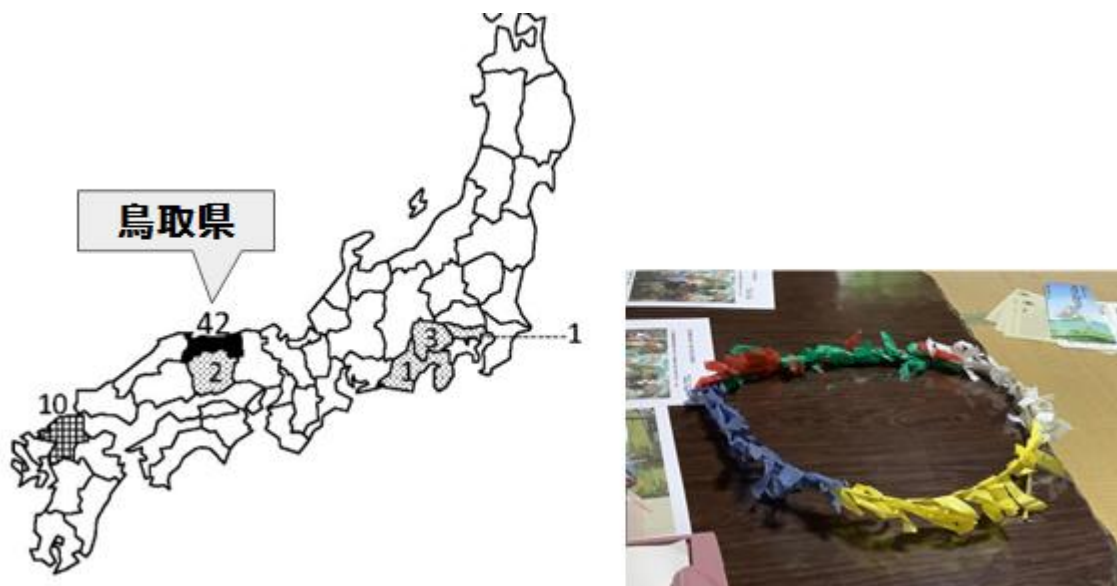


図2 ヤナギ（バレン）の分布図とヤナギを丸めて輪にした様子（写真）



図3 花籠祭りの分布



図4 鳥取県東部地域における野見宿禰の関連地の分布と神社の事例

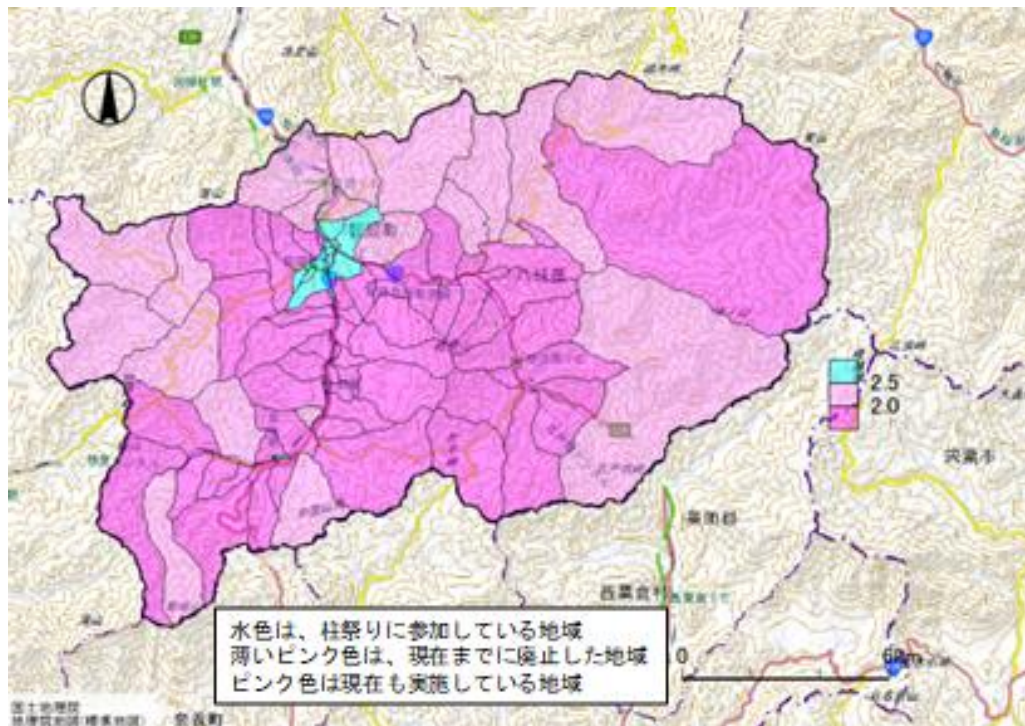


図5 2021年10月時点での智頭町における小集落別花籠祭りの実施状況

今治に国府が置かれた理由は古墳が教えてくれた！

愛媛県立今治東中等教育学校

観光おもてなし EAST チャレンジャー

はじめに

本校は、昨年度末より「総合的な探究の時間」の成果発表の一環として、一般の方を対象に学校周辺の身近な歴史スポットを紹介するツアーガイドを行っている。今回新たに案内する内容として本校に隣接する国分山に関わる歴史を取り上げることにした。

伊予国の国府が今治に置かれた理由を考える

(1) 古文書による記載

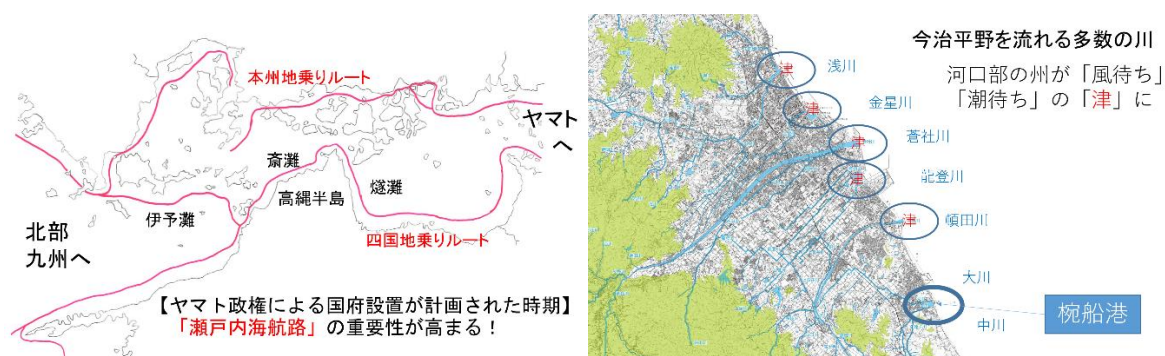
伊予国府の具体的な所在地については所説ある。今治（越智郡）にあったとする説は、「伊予国 国府在越智郡 行程上十六日 下八日」（倭名類聚抄）等が論拠である。

(2) 今治の地理的特色

今治平野は、高縄半島の北東部に位置し、燧灘に注ぐ蒼社川と頓田川が形成した沖積平野である。現在の愛媛県の県庁所在地のある松山平野と面積で比べると4分の1の広さである。江戸時代の今治藩と松山藩の石高を比較しても5分の1であるなど、稲作開始後の古代社会における租税徴収の観点からは魅力的でない。

しかし、ヤマト政権による国府設置が計画された時期は、東アジア世界全体が隋・唐王朝による統一以前の激動の中にあった。国内でも南朝への朝貢を始め、北部九州から渡来人による技術導入が積極的に図られる等、瀬戸内海航路が「本州・（四国）地乗りルート」を中心に確立され、後に「沖乗りルート」へと発展した。

芸予諸島沿いに来島海峡を往来する船は、燧灘に面した今治平野に注ぐ大小多数の川の河口部の州や自然堤防を「風待ち」・「潮待ち」する津として利用した。菅原道真を乗せた船が暴風雨を避けて志島ヶ原に停泊した伊予桜井の綱敷天満神社建立由来は有名である。今治平野の津は瀬戸内海航路の重要な結節点であった。



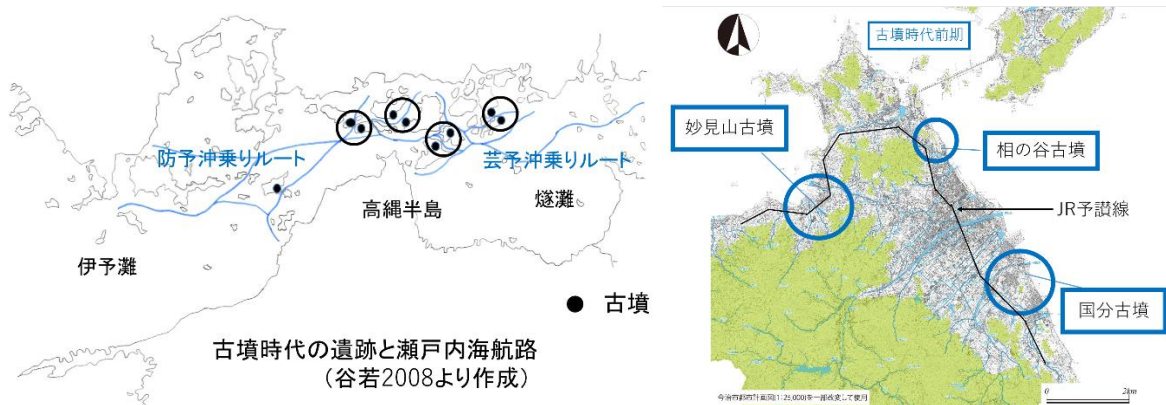
「海の高墳」的視点から今治の高墳を考える

(1) 「海の高墳」

「海を舞台とした人間活動と深い関連を持つ脈絡により、海の近くに築造された高墳」とされている。海拔高度・密集度からの分類はあるが、現在まで明確な定義はなされ

ていない。

本地域の古墳は、芸予諸島における海の難所や交易の中心地である津の付近に立地している。そこで、今治の古墳の埋葬者を海上交通・交易を司る権力者と予想し、古墳が遠く海上から確認できることで、津や航行の安全ルートを導く目印の役割を担っていたとする仮説を立てた。



(2) 代表的な古墳

2.1 前方後円墳

前方後円墳は、ヤマト政権と関係を持ち、設計図や技術者を派遣してもらえた有力者を意味する。

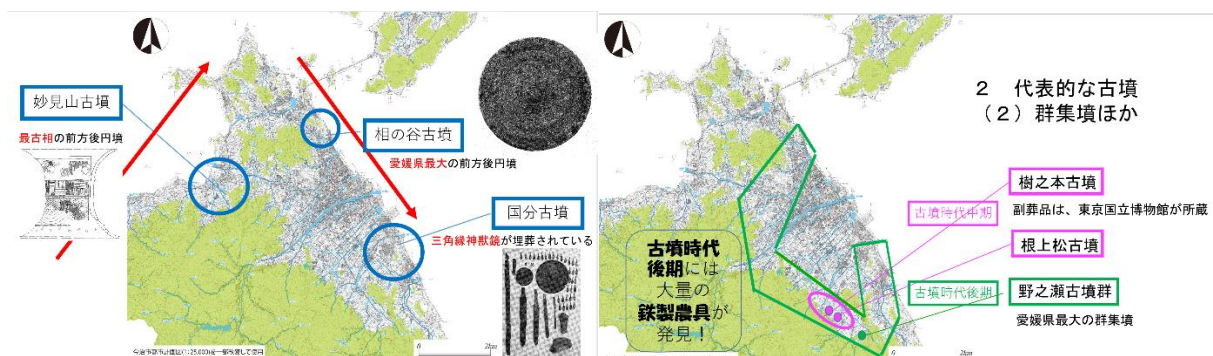
- ・ 妙見山古墳 最古相の前方後円墳
- ・ 相の谷古墳 愛媛県最大の前方後円墳古墳
- ・ 国分古墳 古墳時代を通じて埋葬されている。

古墳時代に古墳が継続して造成されたのは国分山であった。弥生時代の海岸線は現在の海拔5mの位置（JR四国予讃線の辺りに比定）のため、国分山の周辺にはほぼ耕作可能地がないことが分かった。後に、国分山の南側に南海道が整備され、国分寺、国分尼寺（桜井中学校跡地）が建立されている。奈良時代以降には、後背地が耕作可能地となったと考えられる。

2.2 群集墳ほか

- ・ 野々瀬古墳群、樹之本古墳、根上松古墳

いずれも頓田川上流の朝倉地区にある古墳である。野々瀬古墳群は愛媛県最大の群集墳であり、樹之本古墳の副葬品が東京国立博物館に所蔵されており、朝鮮半島系の土器も見つかっている。

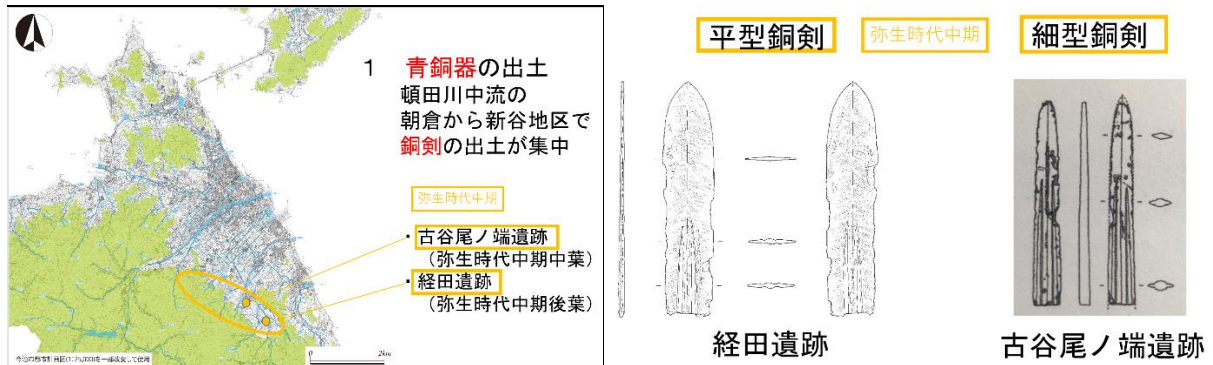


「首長」の姿について考える

(1) 青銅器の出土

発掘調査で発見されることが珍しい青銅器が、頓田川中流の朝倉から新谷地区にかけて銅剣の出土が集中する。

- ・細型銅剣（古谷尾ノ端遺跡：弥生時代中期中葉）
- ・平型銅剣（経田遺跡：弥生時代中期後葉）



(2) 鉄遺構の発見

中国東北部で生産された鑄造鉄器や破片が、朝鮮半島の西海岸に沿って弥生時代の前期末に北部九州に伝わると、伊予国では島に沿う地乗りルートから最古級の鉄器が潤沢に獲得できた。

2.1 代表的な鍛冶遺構

- ・新谷赤田遺跡（弥生時代中期末から後期の集落遺跡）

鍛冶炉は、日本列島内で鉄器が始まった最古段階のものとされる。

- ・松木広田遺跡（古墳時代前期の集落遺跡）

鍛冶炉の規模、鉄滓の大きさと生成量が瀬戸内以東で類例なし。

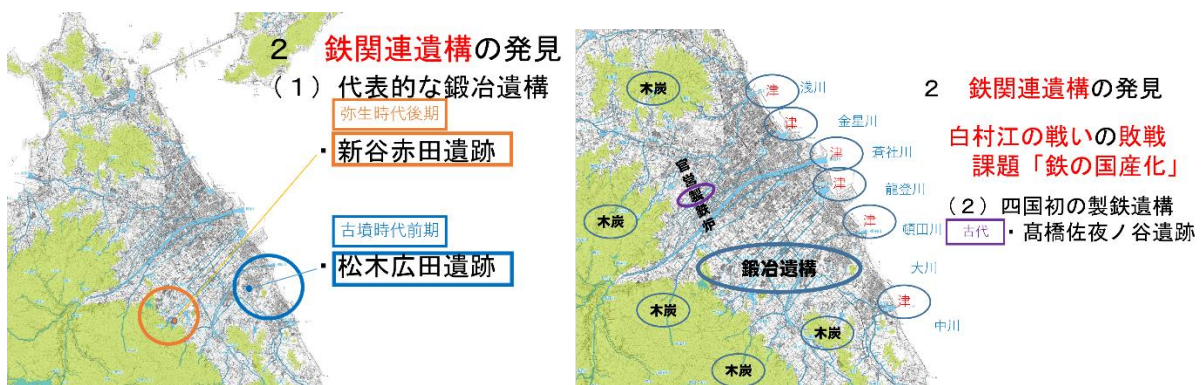
2.2 四国初の製鉄遺構

- ・高橋佐夜ノ谷遺跡（飛鳥時代後半～奈良時代）

四国で唯一発見されている古代の製鉄炉。白村江の戦いに敗れたヤマト政権が、朝鮮半島に代わる鉄の入手手段として、7世紀後半から近江で製鉄を独自に始めた。製鉄炉の形式が同型であり、近江の製鉄技術が伝えられたと考えられる。製鉄には河口部の浜砂鉄と丘陵部の森林の木炭が利用されたか。

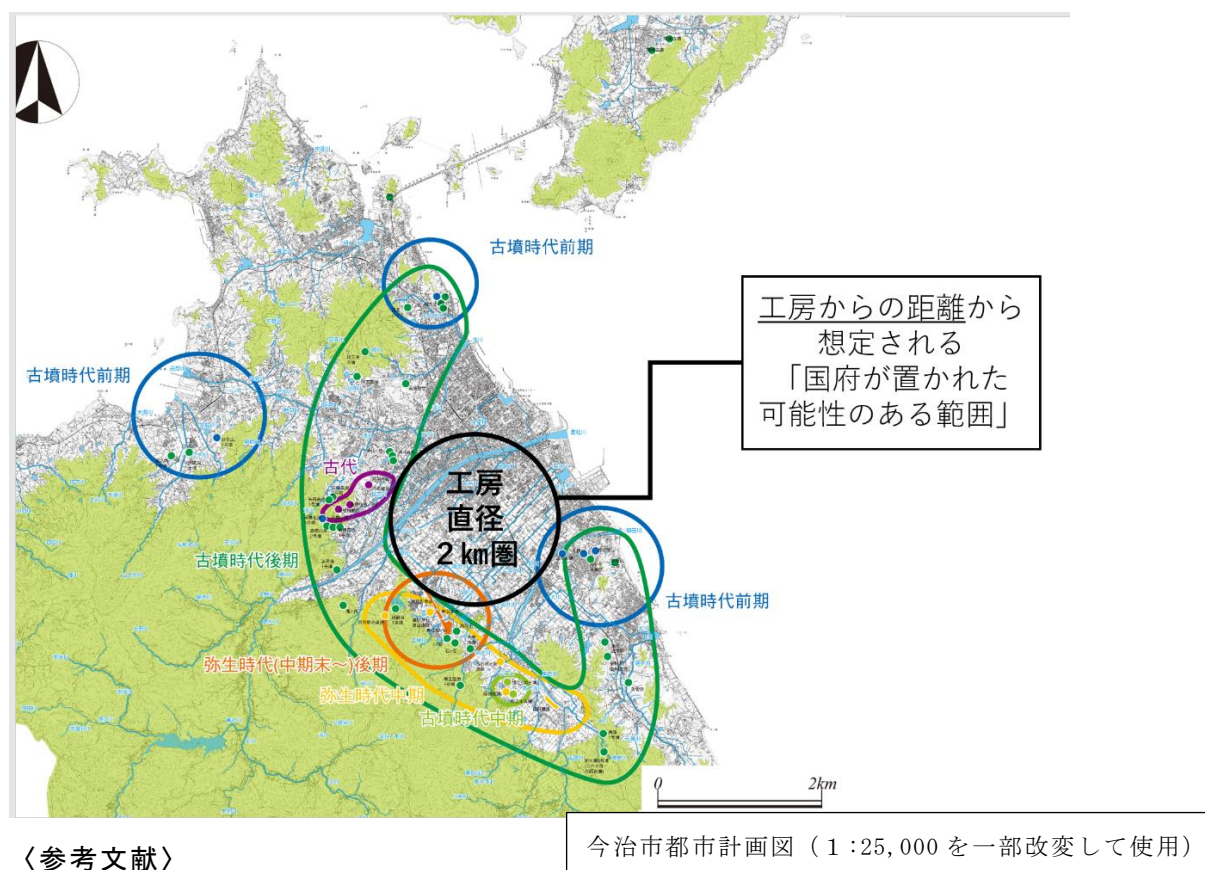
- ・（古代山城）永納山城跡（飛鳥時代後半～奈良時代）

同時期に永納山城が築かれ、城内で鍛冶関係遺物が発見されている。



まとめ

鉄資源の獲得を始め、渡来人による技術導入の必要から、瀬戸内海の安全航海は最重要課題であった。最大の難所である来島海峡に面し、多数の川が形成する今治の津は、絶好の潮待ち・風待ちの場所となり、古墳は安全な航路を導く目印の役割も果たした。更に島嶼部では盛んに塩も生産されたことから、ヤマト政権は今治を重視した。その証が前方後円墳の造成や三角縁神獣鏡などの副葬、遺跡での銅剣出土である。鉄関連遺構の発見も日本国内では最も早い段階である弥生時代後期に始まる。当時最新の技術が今治に導入されたのである。古墳時代に入っても、前期における瀬戸内以東では類例がない巨大鍛冶炉の発見、後期における愛媛県のみ見られる古墳への継続的な鉄製農具の副葬など、鉄との継続的な繋がりが見られる。白村江の戦いの敗戦は国内製鉄を必要とした。浜砂鉄に恵まれ、対外戦争の前線基地にもなりうる今治の地を、ヤマト政権は官営製鉄を行う場所を選んだ。全国的に見て、国府の2、3 km以内に、産業の中心となる鉄などの工房があることが多い。今治はこの条件を満たしている。以上が今治に国府が置かれた理由である。



〈参考文献〉

- 魚津知克 2011『学術研究集会 海の古墳を考える I 発表要旨集』
愛媛県 1982『愛媛県史 原始・古代 I』
愛媛県埋蔵文化センター2021『伊予の鍛冶』愛媛県埋蔵文化センター・愛媛県生涯学習センター共同企画展資料
愛媛県埋蔵文化センター2022『伊予の弥生集落』愛媛県埋蔵文化センター・愛媛県生涯学習センター共同企画展資料
谷若倫郎 2008『妙見山一号墳』
村上恭通 2021「今治の歴史と鉄器生産」『伊予の鍛冶』第1回歴史考古学講座発表資料

青谷原原発計画が遺したもの - 反対運動の展開とその後

鳥取敬愛高等学校
社会部

1 はじめに

本報告は、1970年代後半に、中国電力により計画された「青谷原子力発電所」計画に対し、地元住民が反対運動を組織し計画中止に至る過程を、公開情報(報道・書籍)とインタビューに基づき明らかにしたものである。

すでに約40年が経過していることから、当時の運動当事者に接触することは非常に困難であったが、現在も他の反原発運動に携わる関係者から当時の中心人物を紹介いただき、調査を進めることができた。

この原発計画は、地元鳥取県においてさえ人口に膾炙していない。本報告は高校生が行う調査という点で、一般的にジャーナリズムが行う調査報道に比しては見劣りがするものと評価されるだろうが、その内容の妥当性を置くとしても、そもそも過去の事実をまず県民に知らしめるという点で非常に有意義であったと考えられる。

2 研究目的・方法

すでに言及したように、研究目的は、すでに40年以上が経過し「忘れられた事実」とも言える事象を明らかにし、公表することである。

福島第一原発から「処理水」の放水が始まり、また山口県上関町に中間貯蔵施設の建設計画が浮上するなか、改めて身近なところに原子力施設に関わる問題があったことを明らかにし、身近で大きな問題であったということを自身が認知し、また社会に認知させることが大きな目的であった。

手法は、報告内でも触れたように、仮説をたて検証するという方法が必ずしも適さないことから、ジャーナリズム的な手法をとることとした。公開情報の調査及び当事者へのインタビューである。

3 研究経過

当時の関係者を人間関係を基に探すことと並行し、新聞報道を時間をかけて調査した。主に鳥取県の大衆紙である「日本海新聞」が情報源となった。開発公害研究会が発行した『開発と公害』29号に掲載のごく大まかな年表をもとに、新聞報道でより詳細な事実関係の調査を行った。

同時に、当時反対運動の活動家であり、現在も「青谷反原発共有地の会」(以下、「共有

地の会」)の共同代表を務める横山光氏と接触することができた。当時小学校の教員であり、勤務の傍ら運動を組織した方である。

激しいコロナ禍の中であり、本校社会部部員を引率して何度も自宅を訪れることは控えたため、部員が横山氏にインタビュー調査を行えたのは2回である。それ以外に2回顧問がインタビューを行い、計4回のインタビューが本報告の基となった。

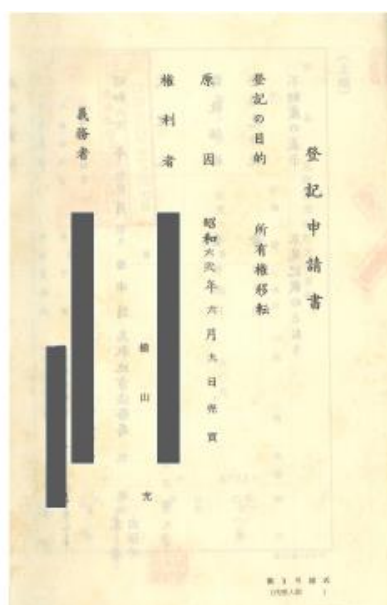


横山光さん
青谷原発反対の会
共同代表

48

調査開始以前、反対運動(共有地の会)が如何にして原発計画を中止に持ち込んだのかが判然としなかったが、インタビューを続ける中で、中国電力より早く計画土地を買い取り、それを譲渡しないことを運動の主軸としたという事実を把握した。いわゆる一坪地主運動である。この運動過程を明らかにするには、それを裏付ける書面、つまり不動産権利証書などを報告で公表することが必須であった。そうした個人情報にも連なる重要書類をお借りすることができるかは、本報告の成立を左右する問題であったが、複数回に及ぶ訪問と、高校生の熱意により快くお借りすることができた。

登記の目的
所有権移転
原因
昭和六十四年六月九日売買
権利者
横山充
義務者

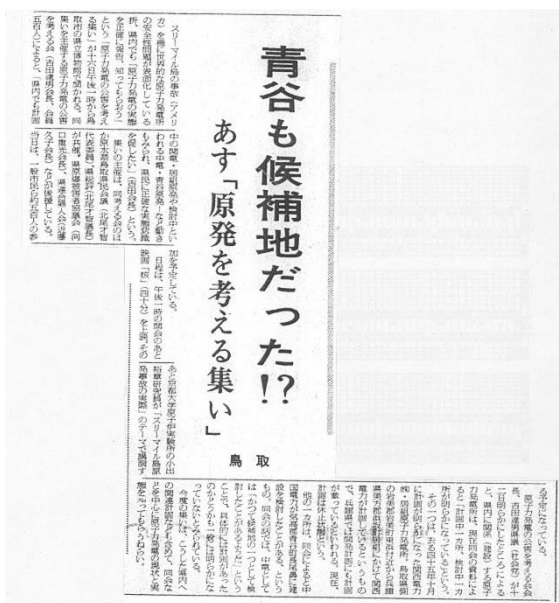


36

地番区域		青 谷	
地番 家庭番号		5244-24	
番 号	順 位	氏 名	住 所
七〇	一	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	二	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	三	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	四	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	五	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	六	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	七	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	八	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	九	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	十	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	十一	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	十二	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	十三	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	十四	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	十五	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	十六	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	十七	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	十八	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	十九	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	二十	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	二十一	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	二十二	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	二十三	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	二十四	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	二十五	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	二十六	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	二十七	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	二十八	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	二十九	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	三十	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	三十一	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	三十二	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	三十三	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	三十四	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	三十五	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	三十六	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	三十七	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	三十八	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	三十九	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	四十	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	四十一	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	四十二	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	四十三	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	四十四	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	四十五	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	四十六	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	四十七	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	四十八	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	四十九	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	五十	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	五十一	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	五十二	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	五十三	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	五十四	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	五十五	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	五十六	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	五十七	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	五十八	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	五十九	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	六十	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	六十一	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	六十二	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	六十三	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	六十四	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	六十五	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	六十六	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	六十七	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	六十八	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	六十九	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	七十	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	七十一	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	七十二	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	七十三	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	七十四	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	七十五	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	七十六	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	七十七	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	七十八	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	七十九	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	八十	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	八十一	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	八十二	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	八十三	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	八十四	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	八十五	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	八十六	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	八十七	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	八十八	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	八十九	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	九十	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	九十一	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	九十二	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	九十三	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	九十四	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	九十五	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	九十六	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	九十七	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	九十八	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	九十九	石井 克一	青谷町一丁目
七〇	一百	石井 克一	青谷町一丁目

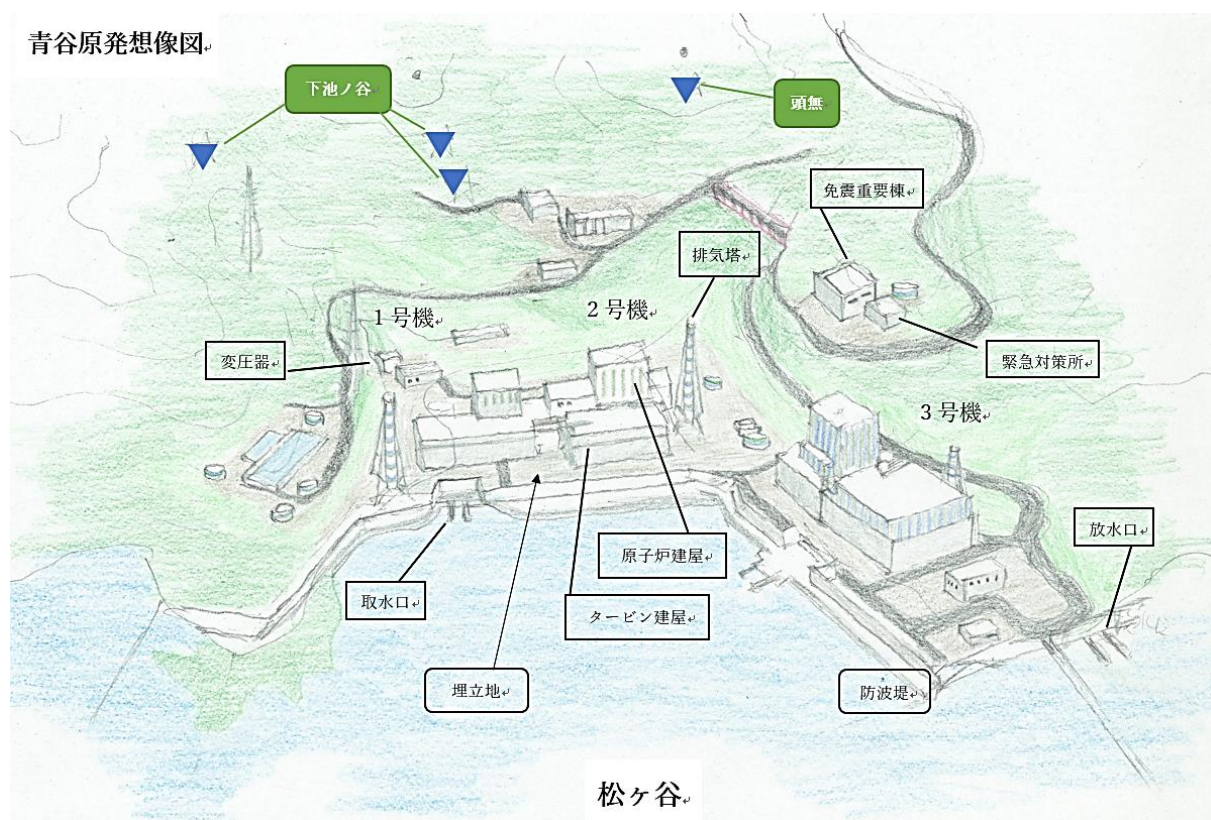
4 研究結果

新聞報道の調査については、鳥取県立図書館にて詳細に行うことができた。1979年の記事からの調査であり、媒体はすべてデジタル状態でのものとなった。書籍では概略であったものが、非常に詳細に明らかとなった。1984年から89年まで、報道において青谷原発の記事は姿を現さないが、これは共有地の会が運動を秘匿する目的で意図的に情報をオープンにしなかったことがわかった。1989年の記事により、中国電力に秘した形で土地取得を明らかにし、計画の中止を促す目的であったということである。



インタビューでは、活動中の計画や感情を、横山氏から具体的にお聞きすることができた。それは本報告で述べたとおりである。また原発立地予定地であった場所も2回訪れることができた。急峻な山や入り組んだ湾により、外部から隔絶された場所であることがわかり、他の原発立地場所と同様、電力会社にとっては非常に「適切な」場所であったことがわかった。これも写真により報告したとおりである。

なお、我々は最後に、「実際に青谷に原子力発電所が建設されたら」ということを考えた。調査を続ける過程で、どこか「他人事」を調査している感覚に襲われたからである。そこで、色鉛筆で架空の青谷原子力発電所を描いた。島根原発を参考にしたものである。



おそらく今後青谷の地に再び原発計画が持ち上がることはないと思われるが、日本全体において、また世界においては将来も原子力発電への依存度は高まることと思われる。本報告が微小なれども何某かの考察材料を提供できるものと信じる。

参考文献

井越忠編集、『開発と公害』29号、開発公害研究会、1985年

君待橋の由来と千葉工業高校の歴史

千葉県立千葉工業高等学校

(定時制の課程)

郷土研究部

1 はじめに

今回のテーマに深く関係する学校の紹介から始めます。

僕たちが通う千葉工業高校は、JR 蘇我駅から歩いて 15 分程度のところにあります。学校は丘の上に建っています。生徒は毎日、坂を上って登校しています。

登校するとき、坂道を上がりきったところをよく見てみると、茂みに隠された石碑（図 1）があることがわかります。

碑には「君待橋」と記載されています。今回僕たちは、この「君待橋」の碑について調べることにしました。

君待橋を調べるうえで、2つのテーマに絞り、調査することになりました。

一つ目は、「君待橋とは何か」です。「きみまち」といういかにも印象的な名前の橋はいったい何なのか。二つ目は、「橋の碑がなぜ学校の敷地内にあるのか」ということです。私たちの学校は丘の上にあります。近くには川もありません。

では、なぜ橋の碑が学校にあるのか、その理由を調べることにしました。



図 1

2 研究内容

君待橋とは何・・・

まずは一つ目のテーマ、「君待橋と何か」、についてです。

まずは君待橋を Google MAPS で検索してみました。現地に行ってみると、近くには、「君待公園」「君待橋苑」という小さな公園もありました。

ここにも石碑（図 2）がありました。どうやら昔の君待橋は今と異なり、この辺りにあったようです。石碑の後ろに橋の由来が



図 2

書いてありました。

君待橋苑の石碑に書かれた由来をまとめたものです。簡単にまとめると、

- ① 源頼朝が千葉に来た際に詠まれた歌から名づけられたという説。
- ② 藤原実方が詠んだ歌から名づけられたという説。
- ③ この地方に伝わる伝説から名づけられたという説。

以上の 3 つです。どの説が正しいのでしょうか。それぞれの説を詳しく調べることにしました。

説①は、源頼朝に関係する橋の由来です。

千葉常胤の6男、千葉胤頼がこの橋で千葉へ来た頼朝を迎えたとき、頼朝が橋の名前を尋ねた際に、

「みえかくれ やえのしおじをまつはしや わたりもあえず かえるふなびと」

という和歌を詠んだのが由来だとされます。

なぜ、頼朝は千葉に来たのか、調べてみました。

この地図は、源頼朝が石橋山の合戦で敗れ、千葉に来たときのものです。

千葉市立郷土博物館の展示によると、頼朝は、合戦に敗れた後、千葉で仲間を集めて体制を整えていました。

このとき、頼朝は 千葉うじ の助けを得るために現在の千葉市周辺に向かい、君待橋辺りで、迎え入れられたと考えられます。



歌が本当であればこのときに詠まれたものだと考えられます。

説②は、藤原実方に関する橋の由来です。

平安時代に藤原実方が、

「さむかわや そでしがうらに たつけぶり きみをまつはし みにそしらるる」

という和歌を詠んだことからついたとされる説です。

藤原実方について調べてみました。平安時代の人物で、和歌の才能に優れており、貴公子として知られる人物です。ですが、天皇の前で藤原行成と歌のことで喧嘩し天皇が怒り、「歌枕を見てまいれ」遠まわしに陸奥の国へ左遷させられました。説②の通りなら、左遷させられた際に千葉県に立ち寄ったのだと考えられます。

説③は地元に伝わる伝説がもとになっているものです。橋の上で待ち合わせをしていた男女がいたが、嵐で橋が流され、川を渡ることができなくなってしまった。女性が泣き崩れていると、それをみた男が激流のなかを泳いで渡ろうとしたが、流されてしまったというものです。女性はその男を追って川に身を投じてしまいました。それを見ていた近くの住人が君待橋となづけたというものです。

この伝説は千葉の民話集などに複数収録されています。また、民話集の解説には、「橋は恋人の待ち合わせ場所として古来より使われてきた。同様の伝説は全国に見つかることでしょう」と書いてありました。ここから橋にまつわる恋人関係の伝承は多く存在していると考えられます。

名前の由来を時系列順にまとめてみました。

縄文	弥生	古墳	飛鳥	奈良	平安	鎌倉	室町	安土桃山	江戸	明治	昭和	平成
----	----	----	----	----	----	----	----	------	----	----	----	----

藤原実方説

源頼朝説

現在に至る橋の歩みをまとめてみました。ここからは、千葉市が発行した『君待橋記念誌』を参考に作成しました。

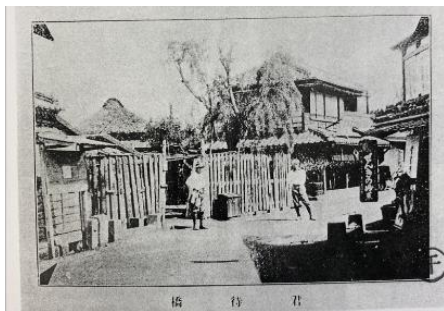


図 3



図 4



図 5

君待橋は、江戸時代以前の資料には登場していませんが、都川の支流の小川にかかっていたとされています。この頃の橋はほとんどが木造り（図3）であったとされています。都川にかかっている寒川大橋も、昭和8年まで木造りだった記録が残っています。

木造りから明治の間に石造りに変わったとされています。いつ壊されてしまったかはわかりませんが、昭和7年にコンクリート製（図4）に造り替えられていたので、それより前だということがわかります。石橋が壊された時に標石が石碑として、千葉工業高校に保存されていたということです。

現在は、学校から返還され、市が作った君待橋苑で保存されています。

コンクリートの橋は昭和7年に作られました。

昭和37年から「区画整理事業」として新しい街づくりが始まりました。（千葉市の記録）それから7年後の44年に、君待橋は取り壊されてしまいましたが、都川に新しく架けた橋の名前に、君待橋の名を残しました。それが現在の君待橋（図5）です。

では、地域に住む人々にとって君待橋はどのような存在だったのでしょうか。人々の証言が残っているものをまとめてみました。

昭和41年の千葉日報の記事（図6）です。区画整理で壊されそうになった君待橋を保存しようとした近所に住む秋元さんが紹介されています。秋元さんはコンクリート製の橋の一部を自作の碑とともに保存しようとしたようです。

君待橋記念誌に残る、橋に関する地元の人たちのインタビュー記事です。大正6年生まれの大須賀さんは、子どものころに橋で遊んだ思い出を話しています。また、由来についても源頼朝に関する説1を聞かされていたそうです。

大正元年生まれの秋元さんは、先ほど紹介した橋を保存しようとした秋元益太郎さんの奥様です。橋を保存しようとした益太郎さんについて語っています。

現在、君待橋の伝説についてどのような影響が残っているのかを調べてみました。すると、おゆみ野のお菓子屋さんに「君待橋」というお菓子が売られていることがわかり



図 6

ました。そのお菓子屋さんでインタビューしてみると、千葉の名所の名前をお菓子にした詰め合わせの中のひとつとして「君待橋」のレモンケーキを開発したとのことでした。レモンピールが入ったおいしいお菓子でした。

このように、地元では「君待橋」はよく知られ、また愛されている橋であることがわかってきました。

☆「君待橋とは何か」ということについて調べてわかったことです。

- ・一つ目は、君待橋は、日本の歴史上の人物などに由来をたどることのできる由緒正しい橋だったということ。
- ・二つ目に、千葉市の歴史とともに姿を変え、現在は建て替えられたものになっているということ。
- ・三つ目に、君待橋は、住民から親しまれ、現在でもお菓子になるなど千葉市の名所としても知られているということです。

なぜ学校に石碑があるのか・・・

ここからは2つ目のテーマです。以上のような由緒ある「橋の碑がなぜ学校の敷地内にあるのか」について調べてみました。

本千葉にあった橋の碑が学校に来ることになった経緯を調べるために、まずは学校に残る碑の看板（図7）を読むことから始めました。

君待橋は石の橋からコンクリートの橋に作り替えられ、その際に碑が造られたこと。また、千葉工業高校が君待橋の近くに創立されたこと。さらに、学校の移転とともに碑が移動していることが書かれています。

現在の石碑は、千葉市に返還した本物のレプリカであるようです。当時の渡辺校長は石碑が「創立当時に偲ぶよすがとして移転先に持ち歩かれた」と記していました。石碑は学校の移転と深くかかわってそうなので、まずは学校の歴史を調べることにしました。



図7

千葉工業高校は、昭和11年に市立千葉工業学校として現在の本千葉付近に開校しました。当時の校舎は、現在の君待公園に建っていたそうです。同窓会報にも、君待橋の近くに千葉工業高校の校舎が建っていたことが記されていました。

そのあとに校舎は検見川に移り、戦争後、津田沼に校舎は移りました。この時代から千葉県立千葉工業高等学校という名前に変わりました。

津田沼校舎は、近くに走っていた電車の騒音、出入り口の不便性などから移転が決まります。昭和42年に現在のおゆみ校舎が完成して、そこに移転して現在に至っています。

以上から千葉工業高校は複雑な歴史をたどっているということがわかります。また、そ

のためか、同窓会を中心に各校舎の思い出を残そうとしてる取り組みが行われていることがわかりました。このあたりから渡辺校長のいう「当時をしのぶですが」という考え方が生まれ、君待橋の碑も移転に合わせて移動していったのかもしれませんが。

同窓会にインタビューした結果、君待橋に関する経緯は、学校に残る看板以上のことは把握していないとのことでした。やはり移転とともに石碑が移動していることはここでも証言を得ることができました。

学校の歴史とともに移動していることは、様々な資料からもわかるのですが、なぜ、学校の外にあった橋の碑を学校の中に保存していたのかは疑問が残ります。学校関係者が勝手にやってしまったことなのか、もしそうなら「当時を偲ぶですが」であってもいいことなのでしょうか。

まずは、現在残る碑のレプリカが作られた時の証言を探し、歴史をたどることにしました。OBや旧職員の要望でレプリカが作られたということでした。

80周年の記念誌(図8)に津田沼校舎から現在の生実校舎に移った時の君待橋の碑の記録がありました。当時の校長先生が昭和42年に生実校舎に移ってきたときに石碑を移動させたことを証言しています。さらに君待橋苑ができた時に標石の由来を尋ねにきたとも証言しています。

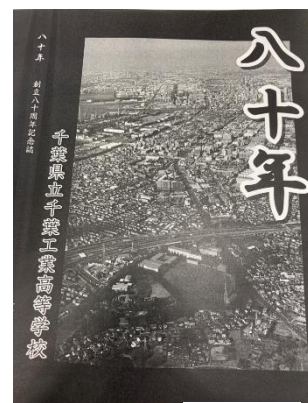


図 8

レプリカを作った渡辺校長が、一般の先生として津田沼校舎に赴任した時の証言です。新人教師だった渡辺校長が君待橋の碑と出会った当時のことをロマンチックに話しています。渡辺校長はこの時のことを覚えていて校長になった時にレプリカを作ったのでしょうか。そうだったら相当この碑に思い入れがあるのだなと思いました。

橋の歴史と学校の歴史を合わせると…

～ 1912	木橋が壊されたとされる		
	石橋が作られる		
～ 1932	石橋がとりこわされる	1932	商業高校の庭が資材置き場とされ、標石が置かれる(オリジナルの碑)
1932	コンクリート橋が作られる	1936	市立千葉工業学校設立される
		1939	火災により校舎焼失、検見川に移転する
1963	千葉市の区画整理事業が始まる 秋元さんによる橋の保存計画(2つ目の碑)	1946	空襲に遭い、津田沼に移転する
1969	コンクリート橋がとりこわされる	1967	騒音や出入り口の不便性により、生実に移転
1971	新君待橋ができる		
1980	新君待橋が開通する。 君待橋苑が作られる(3つ目の碑)	1980	標石を市に返還する
		1994	学校にオリジナルのレプリカが作られる(4つ目の碑)

先ほど紹介した橋の歴史と学校関係の歴史を合わせるとこのような流れになっています。

材料置き場になっていた学校にたまたま置かれていた碑が、移動した先々で卒業生や先生たちの思い出として記憶されていったことになります。この流れがとても面白いと思いました。

3 研究結果（成果）

＜調べた成果＞

・君待橋の碑はこれまで、4つ（本物の橋の一部、君待橋苑の碑、秋元さんの説明文が書かれたもの、学校のレプリカ）作られるほど、千葉市・地域にとっては重要なものだったと考えられる。

・君待橋の碑が学校に置かれたのは偶然だった。その偶然から移転とともに卒業生などから学校の思い出として記憶されていったようだ。

＜今後の課題＞

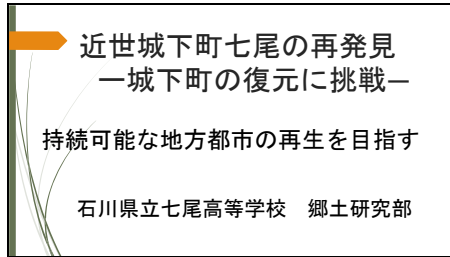
- ・検見川校舎時代など、碑に関する証言やコメントがないか、もっと調べる必要がある。
- ・橋の架け替え工事の材料置き場になった経緯など、市の記録がないか調べてみる必要がある。

＜参考文献＞

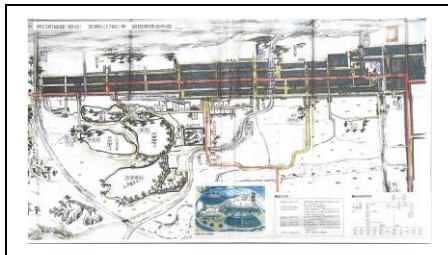
- ・千葉市史編纂委員会『千葉市史（原始古代中世編）』昭和49年
- ・千葉市史編纂委員会『千葉市史（資料編原始古代中世編）』昭和51年
- ・財団法人 千葉県史料研究財団 『千葉県の歴史（通史編 中世）』平成19年
- ・千葉県文学教育の会『千葉の伝説』昭和52年
- ・藤沢衛彦『日本の伝説』20019年
- ・小山規『千葉常胤公物語』H28年
- ・創立80周年記念誌編集委員会『千葉県立千葉工業高等学校創立80周年記念誌』2017年
- ・千葉工業同窓会『千葉工業同窓会報1～20号』
- ・秋葉和夫『カルチャー千葉 第8号』1985年
- ・「頼朝伝説を偲ぶ」『千葉日報』平成7年8月18日
- ・「幻の君待橋 遺物みつかる」『千葉日報』昭和55年5月17日
- ・「史跡保存に土地を提供」『千葉日報』昭和47年5月9日
- ・千葉市役所区画整備部都市改造課『君待橋記念誌』昭和55年
- ・安藤操『千葉市の民話・伝説・歴史ばなし』千秋社 昭和54年
- ・吉野秀夫『君待橋物語のリメイク』千葉歴史文化サロン 2008年

近世城下町七尾の再発見（城下町の復元に挑戦）

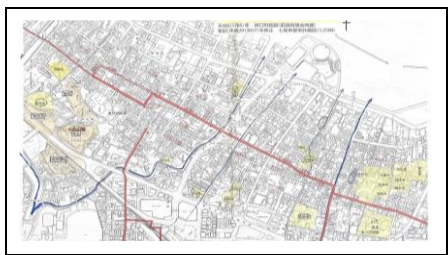
石川県立七尾高等学校 郷土研究部



1. これから七尾高校郷土研究部の研究発表を行います。今回の私たちの研究テーマは「近世城下町七尾の再発見」です。この研究は七尾市教育委員会のご紹介で、京都大学の山村亜希教授の歴史地理学の講座に参加させていただく機会を得たことがきっかけです。



2. まずこの絵図を御覧下さい。これは天正年間、かの前田利家が初めて国持大名になり、能登国の中心とすべく築城した「小丸山城及びその城下町」の絵図です。絵図から読み取れる、城郭、町割、寺社などを抽出し、江戸時代初期の城下町の構造の復元に挑戦しました。



3. 次にこれは現在の七尾市街地の住居地図です。図中に記した「赤い路線」は、江戸時代の絵図に見られる、道路や河川を、同じく「黒い名称」は地名や各種構築物を、私たちが現在の地図上に表記したものになります。一見、簡単そうに思えますが、実際には、かなり困難を伴います。記録にない改変や移転があるからです。



4. 右側の地元新聞切り抜きは、講座を受けた時の記事になります。地図上の復元作業を通じて、新たな発見があったり、新たな仮説が生まれたりと有意義でした。左側の写真は、その後、実際に現地を踏査することで、復元作業が適切であったかを確認する巡検を行った様子です。地元テレビ局の取材を受けました。



5. 私達のこの一連の活動は、地元の新聞、テレビなどのマスコミにも大きく報じられたため、地域ではちょっとした話題となりました。そこで七尾市役所からお話が有り、取材を受け、「広報ななお」に掲載されました。この冊子は七尾市の全世帯に配布されています。

「城下町 一本杉通り商店街
の活性化に向けて」

1. 一本杉通り商店街とは
2. 一本杉通り商店街の現状
3. 私たちの考える方策の提案



1. 一本杉通り商店街とは

400年の歴史
城下町の石畳で
全長500mを誇る
前田利家が
築いた商人の町



昭和20年代後半頃の一本杉通り



昭和40年代後半頃の一本杉通り



※ 調査に御協力いただいた中山薬局さん御提供

登録有形文化財 計5か所



高澤ろうそく店 北島屋茶店

登録有形文化財 計5か所
(※後1件は個人居宅)



鳥居醤油店 上野啓文堂

6. この調査の中から私達は、今回、小丸山城下町の中でも特に由緒ある「一本杉商店街」の地区について調査を深めることにしました。文献調査では、約400年前、天正10年以降の数年間で、「一本杉通り町」が形成されたと推定できました。この時期はほぼ間違いないです。

7. この商店街には、現在、日本で一番のシェアを誇る和ろうそく屋や、北前船の寄港地になっていたころから構える昆布のお店、大正時代から変わらない製法で作る木樽を使用した醤油屋や、天皇家に献上したことがある和菓子屋など様々なお店があります。

8. この写真は、昭和20年代後半頃の一本杉通りです。文献調査でも、現地調査でも、このような写真が多く見つかりました。今回は戦後の数枚だけ御紹介しますが、戦前・戦時中の貴重な写真（おそらく未発表）も含まれており、近現代の商店街の変遷が窺えます。

9. この写真は、昭和40年代後半頃の一本杉通りです。東端の仙対橋方向から撮影したものです。今もある中山薬局、下原時計店の看板が出ています。この頃は、看板の様子から多くの店が営業しており、人通りが多く栄えていたことがわかります。路線バスもあり、市内外から訪れる客も多く、この商店街の重要性が窺えます。

10. 一本杉通りには、登録有形文化財が6か所もあります。この登録基準は建築物、土木構造物及びその他の工作物のうち、原則として建設後50年を経過し、かつ、
(1) 国土の歴史的景観に寄与しているもの (2) 造形の規範となっているもの (3) 再現することが容易でないもの、と定められています。

11. 写真では分かりにくいですが、現地で実物を観察すると、確かに登録文化財に指定されるだけの価値がある建築群であると確信できました。ただ、現地調査で感じた残念なことは、単体で見ると確かに素晴らしいのですが、まとまっておらず、連続性がない点です。

2. 一本杉通り商店街の現状

★現状調査 10月29日土曜日 午後2時頃の様子★



聞き取り調査 —商店街の人々の声—

昆布屋 しら井

- ・昔からのお客さんを大切にしたい。
- ・ネットでの販売は行わない方針。
- ・是非一度、現地まで来て対面で買って欲しい。



高澤ろうそく

- ・昔から固定客が多い。
- ・海外進出も進めている。
- ・時代の変化に合わせたデザインに挑戦している。



徳永仏壇店

- ・昔は、能登半島全域から常連客が来ていた。
- ・高齢化、生活様式の変化により減少
- ・国指定無形文化財を守っていききたい。



商店街で共通するお話

- ・以前は、一本杉通りをバスが走っていた。運行本数も多かった。
- ・観光客もたくさんいた！
- ・休日や祭日は大賑わい（通りが人で動けない！）



1 2. 次に一本杉通り商店街の現状についてお話しします。写真のように、空地のまま、利用されていない土地も多く存在しています。人通りもまばらで、全国各地で見られるようなシャッター街に近い様相を呈しています。そこで、私達はサブテーマを「城下町一本杉通り商店街の活性化に向けて」に設定しました。

1 3. 私達はさらに現状を把握するために、一本杉に商店を構える店舗に聞き取り調査を実施しました。商店街には現在、銀行や郵便局も含め、57店が加盟しています。昔は一本杉通り沿いの店のみを商店街としていましたが、近年は近隣の店舗も商店街に含め活性化を図っています。

1 4. 白井さんは新しいお客さんよりも昔からのお客さんを大事にしており、ネット販売は行わない方針です。実際に現地まで来て買って欲しいと仰っていました。このことから、ブランド化しているお店は、固定客をしっかりと確保しており、経営に困っていないとが分かります。そして、自分のお店の品物に、自信をもって販売されています。

1 5. 高澤ろうそくさんは、地元の固定客だけではなく、奥能登や県外からもたくさんの客さんが商品を求めに訪れています。また、海外からの需要もあり、それぞれの国に合わせて、デザインを変えるために、デザインはデザイナーさんに依頼しているそうです。ミシュランガイドに掲載されるレストランでも高澤ろうそくは使われています。

1 6. 徳永仏壇店では、昔と今では客層が変化しているそうです。昔は遠方から家族連れで訪れている人が多かったようですが、年齢層は主に60～80代と高く、年々減少しているそうです。生活スタイルの変化の影響は大きく、仏壇の需要も減ったことで、仏壇づくりの職人さんの数も徐々に減っているそうです。

1 7. 昔の様子も語ってくれました。現在はコミュニティバスが、1日に8本通っているだけですが、昔は、路線バスも1日に何本も通り、観光客も多く訪れて居たそうです。また、青伯祭の日や光徳寺の報恩講の際には、露店も立ち並びたくさんの人で大賑わいしており、写真のように地面が見えないほどだったそうです。

3. 私達の考える方策の提案

- 全国での取り組み事例調査 -

歴史的資源を活用した観光まちづくり

宮崎県日南市飫肥

空き家であった古民家を宿泊施設に再生

人口 約63,421人 隠岐(七尾市とほぼ同じ規模)

たった3年でシャッター商店街再生！

- ・港の活用
- ・城の活用
- ・リノベーション
- ・コンサルティング

なぜ成功したのか？



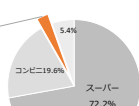
校内アンケートの実施

そこから見えること……

Q5 普段はどこで食料品などを買いいますか

商店街

0.3%



→ 商店街の性格の変化

● スーパー ● コンビニ ● 商店街 ● その他

問題点(課題)

- ・「日常生活」のための商店街という役割は既に終わっている。
→ **他の地域での再生事業の失敗例**
- ・「特別な経験」ができる商店街という魅力を創造するしかない。
→ **その地域だけが持つ特色を活用**

★地方都市の特色を活かした再生★

「七尾市」の特色とは何か？

- ①「中核都市」という歴史的背景
→ 能登国 → 七尾城 → **小丸山城** → 七尾県
古代国衙 中世城下町 **近世城下町** 近代県庁
- ②「港湾都市」という歴史的背景
→ 加嶋津 → 香嶋津 → **所口湊** → 七尾港
古代 中世 **近世港町** 近代

18. 昔は賑わっていたというものの、現在は、半分以上の店がシャッターを下ろしている状態の一本杉通り商店街の現状を調査した私たちは、全国の取り組み事例を参考に、特に歴史的資源を活用した観光まちづくりを参考に、一本杉通り再生のための方策の立案に取り組みしました。

19. 歴史的資源を活用した観光まちづくり例としては、兵庫県丹波篠山市、愛媛県大洲市、宮崎県日南市飫肥の取組が挙げられます。特に日南市飫肥。たった3年程で寂しかったシャッター商店街が劇的に蘇り、数々のベンチャー企業が進出するなど、行政と市民が一体となってまちづくりを大きく動き出させている地域です。

20. ところで、そもそも七高生は「一本杉通り商店街」を知っているのか？何とかしたいという思いはあるのか？という疑問が生まれました。そこで七尾高校の1、2年生全員を対象に校内アンケート(※設問は全15問)を実施しました。このアンケートの結果で私達が最も注目した設問がありました。それが、Q5です。

21. Q5とは、普段はどこで食料品などを買いにいくのか、という質問ですが、約7割がスーパー、2割がコンビニで買い物をしており、そもそも商店街で食料品などを買う人は全体の0.3%でしかないことが分かりました。ここから「商店街の性格の変化」が見てとれます。

22. 「日常生活」の商店街という役割は、既に終わっています。再生事業での成功例は、その地域だけが持つ特色を活用できた事例がほとんどです。つまり商店街の課題として挙げられるのは、「特別な経験」ができる商店街という魅力を創造することであると考えられます。

23. 以上のことを踏まえて方向性を検討します。七尾の特色は、「能登国の中核都市」という性格と「日本海の港湾都市」という性格が柱です。そこから、城下町や港町という地理的背景、前田家や北前船といった歴史的背景が導かれます。持続可能な地方都市の再生を目指す上で、この二つの特色を活かした再生が必要だと考えます。

着目点（方策）

- ・「**コンセプト**」のある商店街
ex) 近世 城下町（小丸山城）
近世 港町（所口湊）
- ・「**ストーリー**」のある商店街
ex) 前田家（利家とまつ）例 花嫁のれん
北前船（西廻り航路）例 昆布ロード

小丸山城（近世城下町） 「利家とまつ」



「利家とまつ」……花嫁のれん



昆布ロード



参考文献

能登・七尾 一本杉通り公式サイト | 歴史街道、語り部局 <http://ipponsugi.org>
能登・七尾 一本杉通り公式サイト（かわら版） | ちょうど50年前の一本杉通り
（石川県七尾市） ipponsugi.org
七尾市歴史アーカイブ by jshukuji.net (nanaoarchive.com)
七尾市史
七尾高等学校1959年度（第11回）卒業記念アルバム
TVアニメ「君は放課後インソムニア」公式サイト (kimisomu-anime.com)
たった3年でシャッター商店街再生！宮崎県日南市「地域再生議員人」の仕掛け
greenz.jp グリーンズ
日南市統計書 (nichinan.lg.jp)
グラフで見る！日南市（ニッパツ 宮崎県）の2000年の人口ピラミッド【出所】総務省
国勢調査及び国立社会保険・人口問題研究所 将来推計人口、総務省 住民基本台
帳に基づく人口、人口動態及び世帯数 (gdfreak.com)

石川県立七尾高校 郷土研究部



24. 最後に私達が検討した方策を提案します。

「コンセプト」のある商店街として、近世の城下町・港町を想起する、空間整備（ハード面）、企画準備（ソフト面）。

「ストーリー」のある商店街では、近世の前田家・北前船を想起する、空間整備（ハード面）、企画準備（ソフト面）。

この2点が鍵となります。

25. 具体的には「小丸山城」の整備が最優先事項です。併せて、城下町を貫く「能登街道（一本杉）」を整備する。次に着手するのは「所口湊」の整備です。併せて、「西廻航路（御祓川）」を整備する。最後の仕上げに、この両者を「仙台橋」で連結し、回遊性を持たせる。以上が空間整備（ハード面）の概要です。

26. 次に、企画準備（ソフト面）ですが、これは空間整備（ハード面）さえ出来ていれば、いかようにでも出来ます。つまり、舞台装置（ステージ）が出来ていれば、物語脚本（ストーリー）はどのようにでも作ることが出来るし、追加することも出来ます。

27. ほぼ無制限に、物語脚本（ストーリー）を考えられますが、私達はブレインストーミングで出し合ったストーリーの中から3つ、実現可能で効果的と判断したものを紹介します。①「花嫁のれん」（利家とまつはおしどり夫婦で有名、立身出世・夫婦円満）、②「昆布ロード」（北前船の海産物で昆布はよろこんぶ、縁起物で有名）

28. 参考文献の一覧表です。なお、今回の作品作成に当たり、七尾市教育委員会事務局、京都大学山村亜希先生、地元一本杉商店街の皆様には多大な御協力を頂いたことを感謝いたします。そして最後に発表の場を与えてくださった静岡県の関係者の方々に深くお礼申し上げます。

<追記>石川県立七尾高等学校郷土研究部です。今年、本校がモデルとなった「君は放課後インソムニア」という漫画がアニメ化・映画化されました。本校や今回発表する場所なども登場していますので、全国の高校生の皆さんにも、ぜひご覧になって頂きたいと思っています。

令和5年度 全国高等学校社会科学・郷土研究発表大会 実施要項

- 1 大会名 令和5年度 全国高等学校社会科学・郷土研究発表大会
- 2 目的 全国の高等学校社会科系の部活動のメンバーが一堂に会し、日ごろの活動の中から優れた調査・研究の成果を互に発表し、研鑽し合うとともに、情報交換などを通してメンバーの交流を深めることを目的とする。
- 3 主催 静岡県高等学校郷土研究専門部
全国高文連社会科学・郷土研究専門部設立準備会
- 4 共催 静岡県高等学校文化連盟
- 5 後援 全国高等学校文化連盟、高大連携歴史教育研究会、静岡大学人文社会科学部
- 6 開催日程 令和5年8月10日（木）発表大会
11日（金）午前（フィールドワーク：駿府城周辺）
- 7 会場 静岡県男女共同参画センター「あざれあ」（静岡市駿河区馬淵1-17-1）
- 8 発表内容 「歴史・考古」、「地理・産業」、「公共・政策」の分野のいずれかについて、またはその複数の分野にかかわる研究
- 9 発表方式 ステージ発表（口頭を主としますが、発表を補助するためのパネル・模造紙・視聴覚機材等を活用することは構いません）
- 10 発表時間 15分
- 11 審査員 静岡県高等学校郷土研究部門関係者
静岡県内の「歴史・考古」、「地理・産業」、「公共・政策」にかかわる有識者
- 12 表彰 最優秀賞2校、優秀賞3校、その他は優良賞として表彰します。
- 13 参加料 無料
- 14 参加資格 全国の高等学校等の社会科系部活動等の部員からなるグループ。ただし、各都道府県から2校までとする。
- 15 参加規定 参加者全員が高校(高等部等を含む)入学後3年以内の生徒であること。
(1) グループ内の全てのメンバーが同一高校同一部活動等に所属していること。
(2) 顧問の教職員が必ず引率すること。
(3) 各都道府県の専門部を通して出場する際は、その都道府県の規定に反しないこと。
- 16 参加申込 静岡県高等学校文化連盟 郷土研究専門部事務局にEメールで申し込む。
(送信先: ky-ichiritsu@div.city.fuji.shizuoka.jp)
- 17 その他 宿泊等の幹旋は行いません。

大会参加校

	県名	高校名	部活動名
1	神奈川県	神奈川大学付属高等学校	歴史研究部
2	神奈川県	神奈川県立足柄高等学校	歴史研究部
3	静岡県	静岡県立浜名高等学校	史学部
4	静岡県	静岡県立韮山高等学校	文芸郷土研究部
5	石川県	石川県立金沢泉丘高等学校	鉄道研究同好会
6	石川県	石川県立七尾高等学校	郷土研究部
7	栃木県	栃木県立石橋高等学校	歴史研究部
8	栃木県	栃木県立矢板東高等学校	リベラルアーツ同好会
9	岐阜県	岐阜県立加納高等学校	地域研究部
10	岐阜県	岐阜県立関高等学校	地域研究部
11	鳥取県	鳥取敬愛高等学校	社会部
12	鳥取県	鳥取県立智頭農林高等学校	地域研究部
13	千葉県	成田高等学校	社会科研究部
14	千葉県	千葉県立千葉工業高等学校(定)	郷土研究部
15	愛媛県	愛媛県立今治東中等教育学校	観光おもてなし EAST チャレンジャー

大会運営スタッフ（ボランティア）

沼津城北高等学校メディア部

静岡高等学校郷土研究部

静岡学園高等学校歴史研究部

浜名高等学校史学部

韮山高等学校文芸郷土研究部

三島北高等学校郷土研究部

令和5年度全国高等学校社会科学・郷土研究発表大会概況

1 8月10日（木）

研究発表大会

会 場：静岡県男女共同参画センター（あざれあホール）

静岡県駿河区馬淵1丁目17-1

参加校：15校（8県）

参加者：205人（教員・関係者57人、生徒148人）

来 賓：油井大三郎（東京大学・一橋大学名誉教授）

審査員：小和田哲男（静岡大学名誉教授）

貴田 潔（静岡大学人文社会科学部准教授）

望月保宏（静岡県古城研究会会長、沼津工業高校長）

秋山浩司（前静岡県高文連郷土研究部長、沼津工業高校教諭）

発表結果

最優秀高校：静岡県立浜名高校、愛媛県立今治東中等教育学校

優 秀 高 校：神奈川大学附属高校、栃木県立石橋高校、成田高校

優 良 高 校：その他10校

2 8月11日（金）

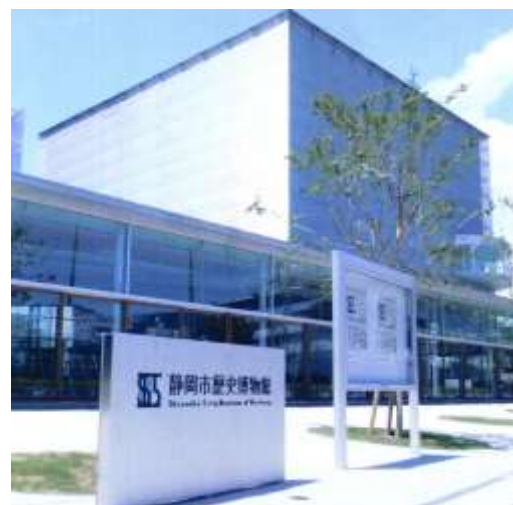
巡検（フィールドワーク）

Aコース（駿府城公園） 30人

Bコース（久能山東照宮） 48人

Cコース（登呂遺跡） 40人 計118人参加（教員・生徒）

※A～Cコースも最後は静岡市歴史博物館見学を実施



静岡市歴史博物館

1 8月10日（木）発表大会



ホール玄関看板



発表状況 1



発表状況 2



ランチミーティング

2 8月11日（金）巡検（静岡市内）



巡検（駿府城）



巡検（駿府城内・徳川家康像）

新聞記事



静岡新聞 令和5年8月11日

令和5年度全国高等学校社会科学・郷土研究発表大会報告書

令和5年10月31日

編集・発行

令和5年度全国高等学校社会科学・郷土研究発表大会実行委員会

(静岡県高等学校文化連盟郷土研究部事務局 富士市立高等学校内)

印刷 (有)旭タイプ印刷 (富士市石坂)